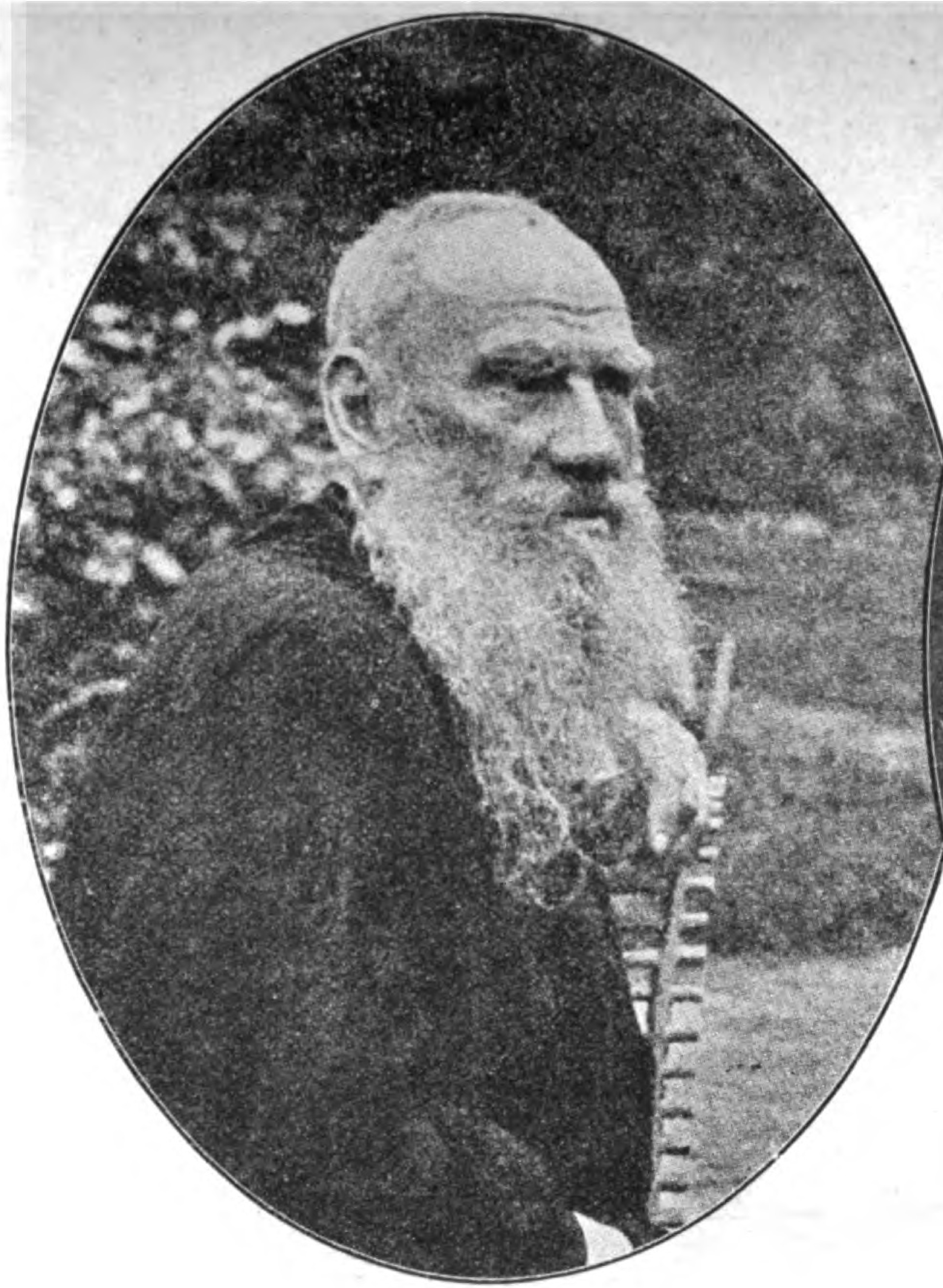
中央公論

本號目次



（羅馬法皇）



（トルストイ伯）

中央公論　第十六年第九號

紙上の犯罪

姑らく此に其一例を擧ぐるのみ。左の如き廣告は屢々新聞紙上に掲げらるゝ所。われらは之を見る毎に、其之を公けにする藥舗の大膽と、此等の廣告を掲載する

> 血塊 月やく忽ち下る確證藥
> 本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止にても忽ち下す特効あり但し姙婦は流産の恐れあるに付飲むを禁ず故に毒血悪血を一掃することを請合なり▲價六十錢特別製分一圓十錢▲郵劵代用は必ず二割増し

新聞社の無頓着と、更に之を取締るべき任に當れる當局者の寛大とに驚かずんばあらず。夫れ「姙婦は流産の恐あるが故に飲むを禁ず」といふに非ずや。流産の恐ありといふは胎兒の死すべき恐ありといふの意なり。世に若しよこしまなる心あるものありて、之を其藥品の効力ある處に利用せば、以て墮胎の用に供し得べしとも解釋せらるゝことを得ん。是れ豈けしかる次第に非ずや。人の健康を害しつべき物品の賣買を取締るにさしも嚴重なる其筋が、現に胎兒の生命を奪ひ得べしと公々然と廣告して販賣する藥品を何故に禁止せざるか。吾人元より件の藥品を購求して之を分拆試驗したるに非ず。隨つて件の廣告は唯其効力を誇張して世人を瞞着せんとするの手段たるに過ぎず、存外何等の害もなきものなるかも知るべからず。されども兎にも角にも賣藥者自身が流産の恐ありといふ以上は、其筋に於ても先づ之を取り調べて斯の如き不穩の文字を取り消さしむるだけの勞は取らざるべからざるべし。流産の恐ありといふは畢竟墮胎の用に供し得べしといふに外ならず。而して滔々たる天下、墮胎用の藥物を慾求しつゝある淫蕩女子の頗る夥しきを知らずや。

更に試に他の三四を一例せん。

其一に曰く、

●快樂秘密 女殺し

美本全一冊減額 郵稅共金廿二錢 郵劵代用二割增

（目錄大要）●女殺し總論●女の氣を引く法●娼妓の氣を知る法●藝妓の心を知る法●娘の氣を知る法●貴婦人の氣を知り愛を得る法●他人の女房の心を知る法●女悅藥製法●女を自由にする法●女の性根を奪ふ法●女の心を替さす法●女の氣を愉快に〇〇〱にする藥法●女の精神を定めさす法●女に愛せらる法●女に慕はる丶法其他數件

其二に曰く

●鶯鶯 人著（御注文次第即刻送本）

●婚姻秘事 嫁入道具

美本上下合本全一冊實價郵稅共十八錢

本書は其名の如く婚姻に關する秘事密件を皮肉的に記述せし極めて有益なる極めて愉快なる：：青年男女必携の珍書なり尚ほ附錄として愉絕快絕男女秘密箱を添

●天下唯一 裸體美人 郵稅共十六錢

●爲替高麗橋局拂渡●切手代用一割增

其三に曰く

●〇〇秘訣 男女たのしみ草紙

書入頗美本郵稅共十八錢切手代用一割增

其四に曰く

實に是れ愉快至極世間在來の有名無實的瞞着物に非ず書中の眞味は蓋し鬼神も泣く目錄略す

美人寫眞添物進呈此廣告切拔に限る

粹珍圖書大安賣

男女交合 枕の夢	減價金廿六錢
新選枕文庫	減價金廿六錢
快樂秘密 女殺し	減價金十三錢
男女交合 無上の快樂	減價金十三錢
變幻 不思儀の婦人畫	減價金十二錢
男女通俗 交合秘訣	減價金十六錢
傾世買四十八手	減價金十六錢
艷雲嬌雨 閨房餘戲	減價金十六錢
美人珍寫眞 十枚揃 二十枚揃	三十錢 五十錢

右列記書籍は目錄等憚る處あり略すと雖も其愉絕快絕なる表題に依て粹察あれ舊正月年頭御祝儀郵稅無料にて御注文に應ず

五十錢以上は一割引 郵劵代用一割增 爲替高麗橋支局取組

嗚呼是れ何等の醜惡廣告ぞや。斯の如き廣告は正面より文字通りに解釋して何等故障を入るべからずと雖も

其の隱約の間に天下の風俗を壞亂しつゝあるは何人と雖も疑ふべからず。此種廣告の文字が如何に一種の感情を挑發し、如何に志操の未だ固定せざる年少子女を導いて淫靡の俗に陷らしむべきか。之を思ふ毎に未だ曾て悚然たるものなくんばあらず。

さりながら、唯之を廣告すといふのみに止まらしめば醜と雖も佝恕すべし。蓋し己が賣らんと欲する所の者を廣告するは、普通商人のなすべき所なればなり。然れども此等の廣告は時に一種の詐欺を含む。此等の廣告は直接に所揭の書物を廣告し、間接には人を一段奧深き罪惡の窠中に導びき入れんと欲する也。此等廣告の憎むべき所以實に此に在り。試にわれらをして更に一歩を蹈み込ましめよ。

> 男女必讀 天下一品 粹人の寶
> 全一冊正價十五錢の處今回爲披露二錢郵劵二枚封入申込めば直ぐ送本す

の廣告を讀むものは、思ふに「男女必讀天下一品粹人の寶」なるものゝ何物なるかを知らんと欲するなるべし。試に郵劵二葉を投ずれば四六版二十頁の小冊子を送り來る。披いて之を讀むに「懷舊」「猫の辭」「地獄通信」「舟遊」「金言集」などいへる愚にもつかぬ小品文を集めたるに過ぎず。事の奇あるなく。文の妙あるなし唯是れ平凡なる一種の廣告雜誌のみ。即ち知る、此冊子の主要なる部分は其本文に非ずして表紙と卷末とに附したる十二頁の廣告に在ることを。夫れ郵稅二錢にて事足るべき自家の廣告を四錢の郵劵と取り代ふるさへ沙汰の限なり。然るに其廣告中には實にいふに忍びざる醜穢の文字を列べて、いふに忍びざる醜穢の品物を廣告しあるなり。今其中のやゝ穩なるものを擧げんに、「日本婚禮式大全」の廣告文中に曰く

抑も婚禮には、表面的に屬する事と、又裏面的に屬する事の二あり、即ち表面的の事とは禮式をいふ(中略)裏面的の事に至ては多くは隱微に涉り之を兩親に尋ぬるすら恥づ、況や他人にをや、裏面的の詳細を知る實に難し、(中略)本書は殊に裏面的種々、乃

ち新夫新婦閨房中に於ける諸心得等人に聞き能はぬ種々の秘事密件まで懇切に記して餘蘊なし。云々

（附圏の文字は原文に二號活字を用ひたり）

是を其のやゝ穏なるもの、他の甚しきに至ては、之を轉載せんも本誌の神聖を汚す。思ふに讀者は其の一斑を見て早く旣に其全約を窺ひ得たるなるべし。

進呈

●粋人虎の卷

右爲披露一千部限り望の人郵劵二錢御送附次第直ぐ送呈す貴紳粋客是非見よ實に絶妙保證

稱して「披露の爲一千部限り送呈す」といふ。試みに郵劵を投して之を求むるに、所謂「虎の卷」なるものは一枚摺の廣告引札に朱肉にて「粋人虎の卷」の活字を捺したるものに過ぎず。載する所何々ぞと見てあれば、こは是れ極秘極粋珍書本、極秘錦畫等の代價目錄を記したるものなり。此等が果して春書なりや否や、今更之を問ふを須ひず、唯其の「極秘極粋」なんどの文字を冠し、「上等十二枚揃正價金六十圓」「古代優美極上等全十二冊正價金三十六圓」などあるに徴して、其所謂粋書珍書の何たるかは直ちに推測し得べきに非ずや。われは其の之に添へたる廣告文のあまりに卑猥なる爲め、此に其の全文を掲載して讀者の一覽に供し得ざるを憾とす。

●愉絶快絶男女秘密箱

開けて悲しきは浦島の玉手箱開けて嬉しきは此秘密箱荒れ男と小町の別なく目のある人は必ず一見せよ書中の愉絶快絶なる處普通の秘密書とは天地の差ある猶向卅日間添物として美人珍寫眞無代價進呈すべし望の人二錢郵劵八枚封入申込むべし

「愉絶快絶」などいへど、實は前に掲げたる「粋人の實」の類のみ。之に添へたる美人珍寫眞といふは、古ぼけたる醜業婦の寫眞に過ぎず。而して此寫眞を包める紙は一見反古の如くして實は然らず、思ふに此の廣告の主眼とする所も、此包紙を送るに非ざりしかと疑はる包紙とは世をしのぶ假の名、實は「閨房餘戯○○繪案内」と稱する春書（とより思はれず）の目錄なり。枕二個を列べたる圖を書き、讀むに堪へざる淫猥の序文を添へ、最後に此等の繪書は何れも嚴緘密封小包郵便に

て送るべき旨を附記せり。われ嘗て其目錄中なる一枚摺○○繪小半紙二折形十二枚揃正價三十錢といふものを注文せしに、坊間普通にひさぐ所の美人風俗十二ヶ月などいへる色摺りの畫を送り來れり。さては故さらに○○繪など記して人の好奇心を促し、其實何の奇もなき通常の美人畫を賣り捌くものなるべきか。春畫を賣るは元より明に法を犯すもの、春畫を賣るもの丶如く裝ひて通常一般の畫を賣るに至つては、法を犯すものたることを免るべしと雖も、其の間接に人を欺くの罪は斷じて許すべからず。

之を要するに、以上の如き卑猥の廣告を掲載するは既に一應の罪惡なり、之によりて人を欺くに至つては、罪惡更に一段の重きを加ふ。斯の如きを事とする商人の打擊せられざるべからざるはいふ迄もなしと雖も、此の如き人を誤るべき廣告を得んとして掲げ出す新聞紙幷に、其掲げ出されたるを見て何等の制裁を加ふるなき當局者も、亦大に非難を免るべからず。省みずんばあらざる也。(縱横)

時代思想の犧牲 (二)

現代思想の狀勢、すなはち上に說く所の如し。顧みてかくの如き時代に處して、最もよく勝を制するものに如何なる人なるかを究む。人の性に隨うて、智と情と及び意と、三者の別あるはすでに世の知るところ、智の人は思慮餘りありて案を立つるによろし、しかもこれに制せられてみづから過を招くの虞あり。情の人は多情多恨、よく感じよく動く、しかも事に拘はりて執着の氣根を决く。たゞそれ意の人か、泰然自若、不撓の勇を皷して目的に精進す、かくの如き時代に處して成功を得るに近きもの、恐らくはこれなるべし。こゝに於て、吾人は故星亨氏を想起せざる能はず。星氏や現代有數の人物、その毀譽は紛々定らずといへども、ともかくも、その意志の强剛なると、その手腕の戰鬪的なるとは、一種超凡の資格として擧世均しく推服する所なるが如し。試にその五十二年の生涯について、氏が經來りし跡を見るに、外に對しては、その猛烈な

る戰鬪的手段、時としては破壞的手段を用ゐて敵者の中堅を衝き、内に向つては、金錢を散して巧に人心を收攬したり。これ一は社會の相殺的狀態を見て目的のために手段を擇はず、一は擧世滔々利に趁るを見て、人心の鍵は黄白なるを覺りたるを以て也。それ、曩にいへるが如く、進んで他を侵すものは退いてまたみづから衛らざるべからず。氏は、かくの如く敵者を仆してその領土を蠶食するとゝもに、乾兒を集めて自衛の具となし、而して、讀書の如き官職の如き、苟も自家を益するものは、悉く探つて成功の資に利用し去れり。これらの行動は、常識的批判を以てするもとより非難すべきもの多く、人としては、その意志あまりに强暴に過ぎ、行爲としては、不健全なる動機に近きものありといへども、そのよく現代思想を識りて、而してこれに順應するの道を執りたるに至りては、その識力まことに偉なりといはざるを得ず。けだし氏が五十二年の生涯は準備の時代にして成功の時代にあらず。その地盤を築き終へて理想實現の途に就くは、すべからく今より後ならざるべからざりし也。こゝを以て、その一生の行事は、いまだ以て氏の全面目を窺ひ得たるものにあらず。もし壽を全ふしてその本領を發揮せしめば、かくの如き性行、かくの如き手段の人が、現代に處していかほどまでに成功するか、もしくは終極に於ていかなる効果を生ずるかの疑問を解釋することを得て、吾人のために好個の實證を與へたらんも、またいまだ測り知るべからざりし也。しかれども、たゞその準備時代についてこれを見るも、かくの如き性行かくの如き手段の人が、現代に成功することを知るを得て、而して、現今の時代がこれらの人物によりて勝利を占めらるゝの時代なることを證據し能ふに足る也。吾人は、星氏によりて、現代に於て成功するものの、いかなる人なるかを觀たり。しかれども、現代に於て成功したるもの、豈ひとり星氏のみならんや。氏は、たゞその格鬪の猛烈にして、その成功の迅速なりしを以て、その間に於て頭角を現はしたるのみ。もし、少しく意を注いで目下の社會を檢覈したらば、すでに成

功し、もしくはまさに成功せんとする幾多の小星、小亨は、累々として随處に跳梁するを見ん。而して、氏や、戰ふに武器を擇ばず、敵を見る甚だ傲岸なりしを以て、終に大なる反動を崇りて非命の最期を遂げたるも、他に至りては、氏の如く公明ならず、また大膽ならず、陰險譎詐、小智小慧を弄して暗に敵を陥るものなるを以て、その反動も、亦隨つて氏の如く大ならざりし也。これを要するに、この類の人物は現代思想の所産也。一星氏仆れたりといふとも、或はその跡を見てこれに倣ふものあるべく、或は無意識にしてその手段を執るあるべし、一代の風潮かくの如くにして、道徳的効力の薄弱また今の如くんば、幾多の星亨は接踵競出して決して跡を絶つものにあらざる也。

現代思想に於ける成功者は、ほゞ以上說く所によりて明なり。次いで問ふべきは、失敗者のいかなる人なるかといふことこれ也。思ふに今の如き精神的戰鬪の旺盛なる時代にありては勝を制するもの以上陳ぶるが如き人なりとせば、敗るゝものは、これと反對の人ならざるべからず。反對の人とは何ぞや。意の人の如く意志剛健ならず、勇往果敢ならず、大膽不敵ならず、艱難を冒して力鬪し得るにあらざるものこれ也。この類の人、吾人は多く情の人に於てこれを見る。しばらく名づけて意志薄弱の人といはんか。意志薄弱の人は、よく感じよく動す、しかも、目的に向つて勇往邁進、衆難を冒して事を濟さんこと、ほとんど難し、多くは左支左吾、躊躇し、逡巡し、達せずして先づ躓くのみ鬪んとしては、すなはち極めて不合格なるもの也。これを今代に於て見るに、今の時は、さきに嘗ていへるが如く自我の意識强盛にして、道德の効力すこぶる薄弱なるの時也。人々たがひに相衝き相鬪いて間あらばたゞちにこれに乘ぜんとし、而して、道德にありては舊標準壞れて新標準いまだ定まらず、世を擧げて懐疑煩悶の裡に彷徨せり。この時に於て、勝を制せんとせば、一切の倫理を蹂躪して縱に自我の翼を冲天に搏つにあり。星氏の如き、すなはちこれ也。しかれども、意志薄弱なるものはかくの如くなる能はず、たゞにか

くの如くなる能はざるのみならず、みづから倫理の鐵鎖に拘束せられて冲天の翼、遂に擲つに由なからしむ。けだし、彼の執る所は權道也、此の守る所は正道也。彼は權道の非理なるを知つてこれを自家成功の資に利用せんとし、此は權道の非理なるを知るが故に正道にあらざればこれを守らざらんとす。而して、彼は今日の時代が權道にあらざれば成功し能はざるを知るも、此はかくの如きを覺らざる也、否、たとひ、これを覺るといふとも、先天の性行はこれをして敢てし能はざらしむる也。この點に於て、彼は道徳の外道也、しかれども社會の成功者也。此は倫理の忠臣也、しかれども時代の失敗者也。要するに、今日の時代に於て成功せんとせば、一切の道徳を蹂躙して社會的法則の羈絆を截斷せざるべからざる也。

說いてこゝに至る、吾人は憮然として長嗟を禁ずる能はず。かくの如きの狀勢漸く盛を致して、名利權勢を欲ふもの、競うてこの方途を執るに至らば、その世道人心に及ぼす所の影響果して如何なりとするぞ。それ道徳を蹂躙して社會の制裁を無視するは、人心の腐敗を誘うて社會墮落の因をなすものにあらずや。さなぎだに今の時は物質進步の餘勢に驅られて拜金の風はなはだ盛なるの時、この時に於て、かくの如きの狀勢を見る、國家社會のためまことに深く患ふべしとなす也かつ、かの所謂失敗者といふもの、勝者の傷ふ所となりて再び起つて競爭に當る能はず、人ありといふとも自家の經營に急なる來つてこれを救濟することなければ、ます〱窮地に陷つて空しく怨を呑まざるを得ずしかもその生存に艱むや、もし自暴自毀して社會的罪惡を犯すに至らば如何、社會はすなはち勝者と敗者の二面よりして恐るべき害毒の種子を蒔かるゝものにあらずや。現代思想の弊害それかくの如し、經世家たるもの、深くこゝに省みて三たび思を致し、而して詩人の如き宗教家の如き極めて同情の念厚きものは、すべからくその同情を弱者に注ぎて、これがために豫め慰撫救濟の勞を執らざるべからず。このごろ公德の問題唱へられ、弱者同情の聲まゝ聞ゆるが如き、疑ふらく

はこの弊風に慨する所ありて然るか。顧みて我國經營の跡を見るに、三十年の間すでに形而下的事業の建設を了して、まさに精神的事業に着手するの運に際す。目下倫理の研究はなはだ盛なるが如き、その所因は他にあるべしといへども、しかも、吾人はこれが一因としてその隆盛を慶せさるを得ず。ねがはくは、先人學理の研究に力むるとともに、現代思想について、また深く考慮を盡さんことを。（春湖）

實業學校増設の非

學校の増設は悉く實業の進歩なるか

篠原泊東

極端は何れの所にても忌まる。例へば教育の進歩と共に、學校の増設せらる可きは、當然の道理にして、さながら、影の象に伴ふにも似つ可きも、學校の増設は、悉く教育の進歩を意味す可きや。雨降らは地面の潤ふ可きも、地面の潤ふを以て必らずしも降雨とのみ限る可からず、教育の進歩と、校舎の増設とは相伴ふとは云へ、一概に學校を増加したればとて、これを以て直ちに、人智の發達、教育の進歩とは云ひ得まじ、學校増設と云ふ事業中には、先づ第一に、充分なる資力、適切なる教育家の、包含せらるゝ事を慮らざる可からず。如何に蛋白質が、滋養原質に富めばとて、脂肪、澱粉、含水炭素の、諸原質を調和せずんば、彼れは決して其効力を有す可きにあらず、彼我相待つて、始めて能く、其本能を發現し得可けれ。こは誠に平凡なる知れ渡りたる事柄にして、而も能く世人の誤解し易き所なり。現に我が實業教育に對する世言の如きも、皆に其實例ならずや。

近時漸く實業教育の發達し來れるは、實業國たる可き日本にして、洵に好都合なる現象なるも、されはとて、目下朝野の聲の如く、頻りに實業學校増設を促す如きは、これ或は、鹿逐ふ獵師の山を見ざるの亞流ならざるか。實業の隆盛は、誰しも希求する所なり、從て其教育の進歩、其學校の増加は、萬人の辭せざる所なり。さりながら、本邦現時の場合に於て、何故に、實業學校の増設を急とす可きや、尚更らに、より急なる要務は知られざるか。實業學校と云へば、極めて手短かなるが如きも、之れを分類せば、工業、商業、農業の如きより、水產、航海、商船の諸學校に至る迄を含み、

是等はみな、特種の科學、及實用的技術の教授を任とするものなり。適切なる教授を要し、高價なる實驗器具を要し總じて巨額なる費用を要す可きものなり。而して目下、本邦各地に設置せられたる、諸學校の狀態を顧よ、完全なる機械を有し、試驗室を具へ、適當なる教師を有する、所謂學校らしき學校は、果して幾何か存す可き、淺猿しくも、不完全なる器械を具へ、間に合せの職員を雇ひ、國庫の補助を受けて、漸く實業學校の名目を有つもの、其數過半なり。抑も實業と云ふ名義を冠せるからには、普通學校と趣を異にし、議論よりも、先づ主として有形的に、實地の試驗を要し、分析を要す、平たく云へば、議論の人よりも、實行の人を養ふ所なり。然るに唯々、假初めに器械の弄用を試み、曖昧なる試驗を施し、一時逃れの所業に、時日を送ればとて、これを以て、實業は決して進歩するものにあらず、寧ろ學生を誤り、進運を阻害するものなり。現在に於いて既に然り、況んやまた此れが增設をや。

現狀既に如此しとせば、斯かる謂はれなきものを、如何程增加したればとて、增加は却て其弊害に歸せんのみ、弊害を重ねんが爲めの增設は、誰れしも甘して受けざる所なる可し。斯かる無用の費用あらば、現在の諸校をして、漸次完備の途に就かしめ、着々、有爲なる次代國民の養成を計らずんばあらず。結びなき糸は途に縫ふ可からざるなり。さりながら誤解する勿れ、吾人は決して何時迄も、實業學校の增設を非とするにあらず、唯目下の場合に於て、國富乏しき本邦に於ては、好んで用なき冗費を出さんよりは、不完全なる現在の學校を整頓し、而して後ち、更らに出來得る限り、完備せる學校の增し行かん事を欲するものなり。尤も現時に在つても、未だ設備なき種類のものにして、充分なる出資の目的を有し、國勢進步の上に於て、必要迫り來れるあれば、吾人は敢て、斯かる者迄も悉く非とするにあらず、例へば地方幼年、中央幼年學校の如き、不生産的人物の養成を廢して實益ある、目下の急務なる、殖民學校を設くるが如きは、業に既に翹希する所なり、兎にも角にも、學校は虛飾物にあらざれば、徒らに其數の多きを誇らんよりは、有爲なる人物の養成を、旨とせむ事を忘る可からざる也。

帶となすか襷となすか

學校の增設はさて置き、現時の實業教育は、經費の欠乏よりも、器具の不完全よりも、先づ其主旨とす可き

教育の方針に於て誤れり。例へば、帯をつくるには帯の寸法あり、襷となすには襷の寸方あり、凡ゆる事物は、皆な其用途に從つて、夫れ々々、其組織方法を異にす可けれ、帯に短かく、襷には長き、中途半端のものを造らんには、恐らくは、此れ程不都合なる事はなかる可し、用れば不便利なり、然らざれば不經濟となる兩者何れにするも、一も得る所なきなり。彼のスヰフトの所謂、兩端の中間に懸つて生活する、憫れなる蜘蛛の生涯にも比す可きか。嘆す可きは現時の實業教育は、殆んど其陰影を辿りつゝあるに似たり。

抑も近來に至り、各種の高等學校を經て、高尚なる思想を有するものゝ、實業社會に其地位を求め、實際の業務に從事する者、漸く增加し來れるは、此れ正に、官尊民卑の夢覺めて、實業國たる本邦の、天職を全うす可き一端として、慶す可き所以なるも、其條の語る所に依れば、深遠なる學識は兎も角、實際の事務に於て、結果の甚だ捗らざるもの多しと。實務に從事する人の最も必要とする所は學理よりも實行に在り。即ち日常普通の事務に間に合ふ可き、常識常能に在り。然るに由來、本邦の實業教育は、兎角理論に流れて、實行を忌むの弊ありき。此れなほ官尊民卑の弊習未だ去らざると、文明進步の幼稚なる時代に於て、有り勝ちなる事なるも、進步せる社會は何時迄も舊思想の墨守を許さず、必らずや時勢に伴隨して、此れが改善進捗を計らずんばあらず。而して本邦の教育者は、未だ此に出でず、殊に大學を中心とせる諸學校は、最も其弊の甚しきを聞く。大學とし云へば、先づ本邦學藝の中心、云ひ換ふれば、日本文明の中心とも云はる可き所なり、而して其一派の、斯かる方針に出でつゝあるは、大學は唯學者、乃至官吏の養成所なるか。學者も可なり、官吏も可なれども、其實業に志あるものゝ、帯ともならず、襷ともならざる、中途半端の粋人のみにては、青年の爲めにも、國家の爲めにも、此上なき迷惑と云ふ可きなり。蜘蛛の巣を見て架橋の術を了れ、而も其中間に懸つて、僥倖の餌を待ち設けつゝある中ブラリの蜘蛛の生涯を學ぶ勿れ。帝國大學は、少くとも高等なる、文明的人物の養成所ならずや、而してまた、國民一般の模範的人物の出所なりと知らずや。

實業教育に因みて、學者の出所たる大學に望む所あり。そは餘の義にあらず、經濟大學の新設これなり。元來日本人は、經濟上の思想と、伎倆とに於ては、公經濟と、私經濟とに別なく、諸文明國に對して、恥かはし

き迄てに欠乏せり。著しき例を取らば、日清戰役後の財政經濟の如き、小にして云へば、宵越しの金を使はざる、江戸ッ子の類の如き、苟も文明國としては、最も先じて、斯かる不都合なる思想を一洗せずんばあらず。さればにや、文部當局者の如きも、思ひ此に當れるか、漸く中學科程に於て、經濟の課を加ふるに至りぬ、洵に國家の慶事なり。さりながら、尙ほ進んで文部當局者に切望する所は、經濟大學の獨立に在り。何となれば、折角中學程度に於て、經濟科を加へたるも、其泉源たる大學にして、今日の如く、僅々二三の學者に擔任せしめて、遠大無邊の大科學を研究せしむるに於ては、其本源や、如何にも不確にして、自ら難きを以て、人に强ゆるの惑ひなくんばあらず。加之大學は、學理の研究上先づ最高等の場所と定めたるなり。然るに目下の狀况の如んば、恐らくはまた學者の養成に於ても、中途半端のものを出すに止まんか、學科は深遠なり、研究は假初めなりとせば、是非なく然らざるを得ざるなり。而して社會の狀況は、益々經濟思想の涵養を迫りつゝあり、焉ぞ諸課目中の一科のみとして、研究するの場合ならんや。實務家としては、充分に實務家たるの道を勉む可し。經濟の學理を研究するものとせば、充分に其蘊奥を探らん事を計らざる可からず。而して共に、實業國の本分を發揚せん事を、慮らずんばあらざるなり。斯くて其經濟學の獨立を計るには、吾人は先づ京都大學の奮發を希ふものなり。同校は創立日猶ほ淺く、從つて其目的を達するにも、自ら便利なる道理なり、されば、此に時勢の傾向を鑑み奮て其獨立を計り、併せて將來新大學の、模範たらずんばあらず。

以上これを要するに、今日實業學校增設の聲高きは、正しく時勢の反響なる可きも、兎角極端に失し易きは火山國民の常なれば、宜しく其時勢の眞狀を察し、心靜かに、萬善の策を講ぜずんばあらず、而して現今の場合に於ては、學校の增設を希ふはやま〳〵なるも、未だ現在の各校にして、資力乏しく、諸事不完全なるが故に、ひとまづ其增設の費を以て、此れを整頓し、完備し、學校らしき學校として、實業者らしき實業者を養成せまほしきなり、不完全なるものを、如何程增加したればとて、不完全の增加は、益々不完全に、遂に其成功を見る能はざるを思ふるものなり。且や大學に於ても、此に注意し、實業の實務に當らんとなれば、充分に實務に當るの備へをなし、經濟專攻となれば、

充分に其專攻の實を擧けしめん事を計り、中途半端の不便宜なる、不經濟なる人物の養成を矯めずんばあらず。これ正しく學校の增設に先ち、寸時を忽にす可からざるの最急要務なり。覩よ、本立たずんば、道遂に生ぜざるを。

盲目的慈善家

花田衆甫

社會問題の解釋

社會問題なる文字漸く世の流行となり來りて、政治家宗教家さては自稱紳士輩の好看板に供せられ始めたり、予輩敢て彼等の顰に傚はんとにはあらず、唯一言の贅すべきあるなり。

抑歷史の一大系統は、歷史自己が定められたる行程を確守するにはあらずと雖も、而かも變遷の跡を察するに倏然として亂れざる者あり。その昔種族の競爭より漸次社會の組織を來たし、進みて國家の建設となり、各種の時代を通過して、地理の變遷、人種の盛衰等より幾多の治亂興廢を示したりしも、世界文明史の概觀に於ては、徐々進步の大勢を止めさるなり。されは近世紀の一段階に至りては、盛に政治思想の發展となり、極端なる民主制と極端なる君主制とは、屢幾多の生血を革命の犧牲に供したりき、十八世紀の後半に起りたる北米合衆國の獨立戰爭、及び十八世紀の末年より十九世紀の後半に及べる、佛國の大革命に於て、或はルイ十六世の死刑となり、ナポレオンの流竄となり頻々たる狂瀾に幾度か立國の基礎を洗ひ去りたるが如きを、その著しき現象として、各國共に政躰の變動に漂はされたり。日本の如き、また此の機運に促かされて、幕政より轉して專政となり、再轉して立憲政となれり。而して東洋にまれ西洋にまれ風雲の變態頗る測り難きことは今猶昨の如し、二十世紀の問題として將來たさるべき政躰的問題も決して少なからじ。

然れども歷史の行程は明かに一步を進めたり、今世紀に於て盛に唱へらるべき問題は主として社會の研究に移轉し來れり、政躰的問題の粗明了したる後に於て社會組織上の大暗黑は前途に横はれり、而かも危險は年を追ふて接近し來るあれはなり。

言ふまでも無けれど近世紀に於ける科學の進步は蒸汽力の使用となり電氣力の應用となり工業界の組織に一大變動を來したり。十八世紀の末年まで人々の家々に

於て行はれし手工は、忽ちにして、大工場の機械工業となり、人の肩と手とによりて運はれし運搬は瀛車瀛船の輸送となれり。此に於て工業商業の進歩は絶大なる一大飛躍を遂け、生産力の增大は著しく加倍し、英國のみに於ける今日の機械作業は優に七億萬人の勞力に相當するに至れり、況んや各國工業力の總計は蓋し驚くべき巨額ならん。然るにかゝる工業の發達や、物質文明の進歩に向つては非常なる多大の貢献を爲せしに相違なしと雖、その裏面には終に現社會組織を根脚より破壞し去らんとする恐るべき害毒を伴へり、嗚呼富の不平等、實にこれ拔き難き害毒なり。一八五六年より一八六一年に至る僅々五年間に愛蘭及び蘇格蘭に於て機械工業の爲めに其職を失ひし勞働者は十四万六千人の多きに及び、一八四六年フランダーズに於て機械の驅逐する所となりて解雇されし者實に二十五万人の多きに達せしと云ふ、此の如くにして勞力の不用は加ふるに賃金の低落を來し、手工業者の生計は全く機械の爲に掠奪せられて、而して資本家の暴利に歸せり。而して資本更に資本を生み利益更に利益を招き富者益富みて貧者愈貧なるに到り、文明の恩澤は社會少數者の幸福となりて、其餘瀝をたも多數者に頒たさる大悲運に陷り、年一年月一月不平均の度を增加して貧富懸隔の大弊害に突進す。此に於て社會は豫期したる光明時代を迎へずして闇黑の時代を迎へ、幸福の時代に接せすして意外なる不幸福時代に會せんとす、かくて人類は温き神の慈愛の手より捨てられて、殘忍なる惡魔の足下に蹈み蹂られんのみ。

然れとも學術の進歩は拒くへくもあらす、工業の發達また固より抑壓すへきにもあらされは、富の不平均は必然の傾向なり。社會は將さに一大施設を以て之に備へさるへからす。この施設にして成効するあらんか、民生の福祉これによりて益進むへきも若し然らさらんか社會の前途眞に戰慄すへきものありて存す。而してこれ果して成効し得へきや否や、社會問題の解答は蓋し甚た困難なり。幾多の政治家經世家の主張多岐にして頗る反對したる思想無きに非す。若し夫れマンチェスター派の自由放任主義の如きは、全然社會自然の傾向に放任して、その成行に從ふへしと論し、優勝劣敗の定理は決して人力の左右し得へき者にあらすと謂ふ、これ等は固より社會改善の意志ある者にあらす、社會改良の問題に就ては門外漢たるのみ。

此等の放任主義の極端なる反面には突飛なる社會共產

主義なる者あり。彼等の主張によれは、純然たる共産制度を設くるに非れは社會の平和は到底望むへからすとし、財産の不平等か總ての權力、地位、學術、生活、衛生諸有る方面の不平等を招くの原動力となれるを根脚より打破せんには私有財産制度を廢せさるへからず。凡て人の生るゝや、過重なる權利を有して生れたる者にもあらず、また過重なる責任を帶ひて生れたるにもあらず、必ずや同一の天祐の下に生活すべき者なり、天は人類の爲に世界を與へたる者にして、一私人の爲に與へたるに非す、何そ貧富尊卑の區別あるを許さんや、優勝劣敗の自由は同一の地位に立ちたる上に於てこそ公平なれ、生れなからの大財産家と、生れなからの赤貧者とは固より競爭し得へきの敵手に非す、さるを尚優勝劣敗の美名の目に抑壓せんとするは甚しき社會組織の罪惡なりと。かゝる思想は歐州の或部分に盛にして、我國の論者また時にほのめかさゞるに非れとも、これ殆んと一個の奇論たるに過きさるなり、苟くも或る所有權の存在を認めたらんには十分の目的は達せらるへからず、位地權勢の如きは必すしも同一ならしむるの要ありや否や、また同一ならしめ得へきや否や。とまれ予輩はあまり急激なる變調の奏効し難きを知り、且つ極端には必すある弊害の多きを認め、かゝる共産主義の如きは、寧ろ之を唱導するを惡む。放任主義と共産主義との兩極端の利害を參酌して來れる者これを國家社會主義と名く。即ち現今の社會制度を破壞せずして而かもまた任意の趨勢に任せず、一個の社會政策の下に彼等劣者を保護し、少くも彼等劣者をして社會上の位置、衞生上の位置、教育上の位置、經濟上の位置に於て個人としての資格を失墜せさらしめ、以て甚しき貧富懸隔の弊害を防き、社會の秩序を保存せんとするに在り。

ビスマークの社會政策勞働者保護條例がまし失敗に歸しつゝあるにもせよ、かれは餘りに關渉に過きて被保護者にまて煩しきに堪へざらしめ、或は時間の制限上却て收入の減額を來し勞働者の富を妨くるが如き觀あるに出てたる者にして、決して關渉保護の不必要を證する者にはあらす。國家として特殊なる關渉を加へ、法律の力を用ゐて大勢を喰ひ止め若くは挽回せんことを企つるは、最も安全の策にして且つ有力なる方法なり。局に政務に當る者大に察する所無かるへからず、されど動もすれば黄金の光に眩惑して一錢毒の害をだに除き得ざるが如き政府に向て、此の如き社會千年の

大計を托せんこと殆んど無用のこととならずんば非す。よしんば政府者の措置頼むべきありとせんも、しかも決してまた二三政策の奏効し得べき者にはあらず、必ずや民間有力者の奮起するありて大に盡瘁する所なからざるべからず、富者の財産を運轉し、以て貧者を教養し救恤して、以て社會に於ける競爭に堪ふべき資格を與へざるべからず。かくて漸次社會の組織を改良し福祉を増進するの外、蓋し萬全の計無けん。

論し來りて予輩は大に現下の盲目的經世家或は似而非有志者の妄を打破するの要を認む。吾人は社會問題を擧けて政府及び有力者に托せんと云ふ、敢て慈善家に托せんとは謂はさるなり、何となれは所謂慈善家なる名は姑息老婆の如きの心情を以て財を與へ衣を給し、以て天晴社會に盡瘁する者と信ずる一號の名稱たるの嫌あれはなり。宗教者號動もすれは神の慈愛と稱へ盲目的愛を説き、徒らに一時の感情に驅られて婦人の涙を濺き、而して以て宗教の眞義なりとす。宗教の眞義果して此の如き者ならば、これ遊民をして益遊民たらしめ惰夫をして愈惰夫たらしむる者、社會の組織は爲めに益危殆を加へんのみ、予輩は宗教を驅りて先つ社會より遠さからしむるを要とす。與ふべきの理なくして之に與へ、救ふべきの責なくして之を救ふは、これ固より道を守る者の慈愛ならん、然れとも衣食金錢などの給與は恩を售るに於ては或は可ならん、決して世を救ふの道に非るなり。遠く病源のよりて來るを察せず、大勢の推移し去る所を思はず、唯現在若干の窮民を救養して、以て人に誇るの輩、少しく大觀する所ありて寧ろ冷酷なる思想を以て、永遠に禍根を斷つの擧を企てよ。所謂慈善事業の如き予輩の見る所を以てすれは利害遽かに斷すべからさるあり。

然れども世はかゝる姑息の愛を歡迎するなり。孤兒院を建つれば忽ち大慈善家の名を與へられ、保護場を設くれば忽ち大慈善家の名を與へられ、乃至數圓の義捐また容易に慈善家の名を得るなり。慈善家の名譽此の如く廉なり、何を以て僞善者の輩出を妨くを得ん、則ち到る處に射名の徒を見さるなし、名を射るは或は利を射るよりも罪なきことあらん、されと神聖無垢神々しき慈善家など云へる名譽を竊んで、更により大なる利を射、雁を射らんことを望むに至りては何ぞ夫れ惡むべきの甚しきや、僞善家も此に至りては、陽惡の却て愛すべきを見る、かゝる僞善者流の輩出は社會改良の施設に向ては少なからさる妨礙を加ふるなり。而し

て社會自から之を招けり。孤兒院を訪ふて、餘りに義捐財物の豐富なるより衣食等に於ても普通兒童の生活よりも却て一層の高きを占めつゝあるを觀、乞食根性の養成を憂ひたることある人は容易に施行的婦人的の恩惠が人を毒するの甚しきを了解すべし。乞食根性の養成は決して貧富の懸隔を去り、權勢の不平等を除く所以にはあらず。敢て社會問題の起原及必要を顧み目下宗教家一流の盲目的慈善の無效にして却て有害なるを認め得たり、誰か起て眞個に社會問題を解釋する者ぞ。監獄に於て警察に於て教育に於て總ての方面に於て眞個の社會改良者を待つこと切なり。

夫婦論

有馬祐政

夫婦を以て天地に比へ日月に較べて稱することは、遠く支那に始まりて、博く東洋の諸國に行はれをれり。天は廣大にして空虛、能く萬物を容れ、能く一切を蓋へり。地は圓滿にして重厚、能く一切を載せ、能く萬物を蓄へり。日はこれ和煦昱爍、晝これに依る、萬物外に生ひ長ちて榮ゆること限りなし。月はこれ清明貞節、夜これに依る。一切内に藏まり息ひて靜けきさま類ひなし。以て直ちに夫を說くべく、又婦をも說き得べきなり。

儒教の說くところに據りてこれらを考ふるに、天といひ、日といへるは、同じく乾の象にして、乾は剛健中正にして純粹精なるもの、知を以て大生し、始終を明らかにし、統御を正しくし、保合和寧を致すなり。地といひ、月といへるは、等しく坤の象にして、坤は至柔至靜而かも德方常なるもの、作を以て廣生し、乾に承け、主に順ひ、盛んに育成を務めて、含蓄光化を極むるなり。易經の繫辭傳に曰はく、「乾道成男坤道成女」。これ卦爻の變易についての言なれども、乾の夫に對し、坤の婦に對して、相應するところ、眞にかくの如きを見る。夫たる者と婦たる者との心すべき事、目的とすべき處、履み行ふべき道、自然に異るものあるは、以て容易く知り得べきにあらずや。實際、これを生理上より見るも、心理上より見るも、將又、小にしては家族、大にしては社會における整頓進化に向つても、必ずや適當なる分擔分業の劃然存在すべきことは、喃喃するまでもなく明白なりと信ず。即ち五倫の中に、夫婦有別といへるあるは、實にその理あるものといふ

べし。

然れども、支那はさておき、わが邦にては、元來女子は雄けく優れゐて、いとやんごとなき上つ方にても、遠くも遠き神代において、夙に、天照皇大神の御聖德に渡らせたまひたるあり、さては、その後、神功皇后の三韓御征伐を始め、推古天皇、皇極齊明天皇、持統天皇、元明天皇、元正天皇、孝謙稱德天皇、明正天皇、御櫻町天皇は、みなこれ女子にて在しましたる御方なりき。下つ方にては、文章家に、紫、清、伊勢、和泉等尠からずいで、強勇者としては、板額、巴など、高名敢て男子に讓らざる者さへあり。節操ある者には、靜、袈裟の類ひ、夥しきこと數ふる能はざるほどなり。然しながら、夫唱婦和、夫婦相馳びて、相共に賢良善美なる者に至りては、をのれ未だ前者等に拮抗すべく顯赫なる者を認め得ざることを嘆ぜずんばあらず。唯上古において、わが邦の神祖として、伊弉諾尊、伊弉册尊と併べ稱し奉るのみにて、甚たしくもその餘には殆んどこれなきが如し。源賴朝に政子あり、豐臣秀吉に淀君あれども、むしろこれ放縱淫逸の徒に過ぎじ。中世以降武門には賢婦比較的にこれありしも、かれらは夫の戰役等によつて名を得、その後に至つて漸く功を樹てたる者にして、最も有名なる楠公の夫人の如き、大石良雄の室の如きも、亦到底この類たるを免れず。近世儒家には、二山伯養の垂水氏、貝原益軒の江崎氏、川井東村の高瀨氏、鷹見爽鳩の鷹見氏、中江岷山の北村氏、龍草廬の貞香子、細井平洲の石村氏、梁川星巖の紅蘭、岡本黃石の絳雲等は、その著はれたる者なれども、多くは文墨の點において一致したるまでにして、能く分業を爲して、內治齊家の任を全うしたる者においては千中无一の感なき能はず。過ぎたる者、及ばざる者、古今天下に充ち塞がりて、一の規範となすべき者を求むるに難し。豈嘆惜すべきにあらずや。惟ふに、これ儒道の四角四面の弊に陷ゐりて、和氣靄然たる家庭を産みいだすこと能はざりしゆゑにもよるべく、且又、佛敎が女子を以て罪業深重なる者と爲して、遂に卑屈賤劣に赴かしめたるにも基づけること少からざるべし。その夫と妻との關係は果して如何にすべきか、これわれらの古に顧み今に鑑みて、靜かに慮るべきことにあらざるなきを得んや。

夫妻ありて、後に親子あり、兄弟あり。家庭もこれによりて成り、親族もこれよりして生ず。社會も國家も亦皆源を此に發するなり。一家の盛衰起滅も、一國の

治亂興廢も、その源始を探究すれば、いづれとして夫婦の關係によらざるは鮮し。これを古今に求め、これを東西に尋ぬるに、到るところ、その適例あらざるはなく、日本支那はいはずもがな、遠く印度、埃及、希臘、羅馬の昔時より、近く佛蘭西、英吉利、亞米利加合衆國の近世までも、みな著しき證左を示し居て、殆んど煩はしきまで夥しく現はれをれり。されば、夫婦の關係はあらゆる社會的現象の根本的要素となれることは、何人といへども決して否定するを得ざるべし。然るに、世間夫婦の關係麗はしく齊ひ圓やかに修まれるもの果して幾許ありや。蓋しその理を知らざるゆゑ爲さゞるにはあらざるならん、若しかく知りつゝもかゝるやう務めざるものとすれば、その咎甚た大なりとなさゞるべからず。

夫婦有別てふ主義は、永く支那日本に行はれ、篤く識者德者に崇ばれたるものにして、實際上これを主義とし、これを標準とせば、誠に能く倫常を失はず、貞節を損はざるに庶幾しといへども、その極端に趨るの弊やゝもすれば冷薄に陷ゐり固陋に流れ、眞に究屈迂僻の感あるを免るゝ能はず。わけて夫婦として、比翼連理の事實なく、資助唱和の功用を缺きて、その愛や、自然に皮相の美を主とし、その樂や、知らず識らず肉體の快を重んずるに到ること、古來その例數ふるに遑なく、天下滔滔としてかゝる濁流暗潮に耽溺するの狀あり。支那にては、特に甚たしく、日本においても、藤原氏攝政のころより、すべての武家時代を通じて、この弊害極めて著るく、全く極端なる有別主義に搦め取られたるの餘り、男子は唯女子の色香に迷ひつゝ、剰さへ、女子を以て專ら自己の淫慾を果すべき器具とし考へ、しかもかつ、徒らにこれをもて遊びたりしなり。かの佛蘭西のルーソー等もこの見解にてありたれば、その影響意外にも國風を惰弱にし民俗を浮薄にしたること、歷歷見るべし。わが邦、亦かくの如くにして、固より比翼唱和の美風吹き初むる時機とてなく、逸豫猥褻の爲體見るに忍びず聞くに耐へざることのみにて、家庭齊はず、親族睦しからず、社會も腐れ爛れて、國家も能く強く榮えざりしさま、實に遺憾にも厭忌すべきことならずや。

をのれは初めにもいへるが如く、その取り扱ふ事件、その履み行ふ道路などにおいてこそ、別はあれと信ずれども、決して全然有別主義を執れるには服せざる者なり。教育についてわれら國民に下し賜ひたる勅語に

は、夫婦相和せよと誡め置きたまへり。その　大御心深遠にして、われらの推測し奉るなど、恐懼の至りなれども、こはわが邦神代より固有の精神にもあり、又その家族的組織の根本にもなるもの、それのみならで、倫理學上、社會學上、當に然らざるべからざるところ。眞に國民全體の擧りて拳拳膺に服すべき寶詞金言と稱すべきなり。

取り扱ふ事件、履み行ふ道路よりいへば、必ずや夫妻別あるを要す。夫は表たるべく外たるべし。妻は裏たるべく內たるべし。されど一致するところなければ、表裏の差も立つるによしなく、はた一物なればこそ、却つて內外の別も設けらるゝものなれ。一本の手、一枚の紙、一軒の家、みなこの道理によらざるはなし。夫婦相和せよとの　勅語は實にこの點を示したまひしやう覺えらる。然り而して、その夫婦相和するとは果して如何なることとなるか、且又如何にしてうべきことなるか、をのれが平常考ふるところは大略左の如きなり。

そも、一物たり、一體たり、一致するところあるものなりといひしばかりにては、未だ以て相和するの意義を表示しえたりとなすべからず。それらはむしろ相和することをうべき由縁を說き明かせるにすぎざるのみ。然らば則ち、その相和するとは果して何事ぞや。をのれは斷じて同情の一語を以てこれに答へんと欲す。

をのれのいはゆる同情とは、相互に想ひやりをなすことなり。夫は能く婦の心情を解り、喜憂を慮るべく、婦も亦常に夫の喜憂を察み、心情を推し量るべし。一身の事、一家の事、一族の事、世間の事、相互にその腦裡に起りし事、悉皆披瀝開陳して、相爲めに謀り、相共に成し行くべし。かくなさば、自然に相憐相愛して、毫も遮る雲もなく、隔つる霞もなし。淸朗なる團圓の月は常へに兩人の腦中に照り渡りて、温柔なる陣陣の風は斷えずその家庭を吹き和らぐべし。こゝに至りてか、琴瑟相和して、同枝連理、眞に無上の樂園は面前に現はれ來るべきなり。しかのみならで、夫と婦とは、重ねて亦いづれよりも等しくこれ至極會心の友、知己の侶たるべし。若しこの同情を以て相互に想ひやりをなさば、恐らくは求めずして相互に心を會し、己れを知るの、無比の好伴たることをえん歟。

然るに翻つて世俗の狀態を見るに、動作の上においては、別ある者勘からざれども、眞に心情を推し量り、

喜憂を相共にし、同心同氣、相愛相憐、暖かくかつ清らけく和らぎ合ふ者に至りては、そのれは不幸にも未だ一の朗麗なる龜鑑を認めえざるを悲しまずんばあらず。こはそも何が故ぞ。畢竟夫婦が智識の間隔甚しき、これなりと信ず。かの歐米諸國において、比較的その差違少なく、相倶に同一專門學にさへ通曉する者まゝあり。貞淑和順の婦道より論ずれば、快らぬ節なきにあらざれども、智識の進達によりて、婦の夫に同情を致すことの親切なる點は、わが邦婦女子の執りて以て模範とすべきことゝす。見よ、男子の教育は、普通となく、專門となく、年を逐ひて繁榮なりといへども、女子の教育に至りては、全國を通じて今猶創始の際にありといはざるをえず。普通においてすら、學に就けるの女子は、學齡者の十の五六に過ぎず。高等女學校の類は、公立のもの、日本國中僅に三十左右、一昨年の初め、文部省は各府縣に向つて必ず三ヶ年の中に一校以上を設置すべきことを嚴令せしも、目下の狀況にては、その校數の僅少なるのみならず、外形内容共に甚だ足らざるの觀あり、その私立にかゝるものは、都鄙共に少からず存すれども、大抵宗教的學舍にして、不具か、偏曲か、二者いづれかその一たるを免れざるものなり。その餘裁縫等の技藝學校あれども、これらは實業的教育を專一とするを以て、多くは、野卑か、狹隘か、到底完全を求むるに由なきものゝみ。本邦女子教育の大勢概ねかくの如くなれば、そが男子のと次第に遠ざかりゆきて、隨つて、夫たる者と婦たる者との智識霄壤の如く隔絶せずんば已まざるの狀あり。これがために、夫婦の別はいやます別に趨り過ぎて、心氣融通の途を絶ち、同情の氣風もはや起るに由なく、終に眞實和樂なる家庭は永久に現はれずして止まんなり。こゝを以てのゆえに、教育は同情をうるの基礎として、その普及上進を計ることの必要なるは、敢て多言を俟たざるべし。

以上陳述したるをのれが鄙見を總括すれば、行爲の上にては、飽くまでも、正しくその分に應じて別を立つるを可とするも、この別は同心一體なる上においてこそ初めていひうべきものなれ。かるがゆゑに、その心得にて、同情同氣、以て相和すべし。これにて夫婦のなからひ完たかるべく、家庭のうち円かなるに至らんこと、鏡に向つて面像を睹るよりも瞭然たり。されど、かゝる麗妙なる境界に到達せんには、必ず先づ教育の力によりて夫婦が智識の間隔を僅少ならしめ、以て同

情の念を惹き起し、想ひやりを致さしむるに努むべし。即ち普通教育の充分なる感化に因りて、同心一體の理を覺り、夫唱婦和の道を全うせんことを望む者なり。夫たらん者、婦たらん者、この意義を以て、この素養を以て、夫婦相和せよとの勅語の大旨を實踐勵行せんこと、これ退きては一家のため、進んでは天下國家のために、當に爲すべきの務にあらずや。況んや、聖旨を奉戴すべき責あるにおいてをや。



海外新潮

海外大勢

露西亞の將來に就て

前きに獨乙の將來を論じて一大氣焔を吐けるカルチェスは、今又「露國と其問題」なる表題の下にフォートナイトリーレビューの七月紙上に於て掲載を初めたり、本號の所論は註して内部の問題と云ふと雖、其内容を見るに廣く一般に亘りて露國の政策を論ずるもの丶如し、今左に其大要を摘記せん。

●露國の政策、

恐露病者は常に露國の不信を云々すると云へとも、之れ只露國の行動の往々にして英國の利益を侵損するより生ずる一種の反響に過ぎざるのみ、敢て根據あるの說にあらず、加之露國の政畧は又世人の想像するが如く微かく巧妙なるものにあらず、見よ露國の得たる所は嘗に英國に及ばざるのみならず、其これを得るや敢て特に外交の妙技を以ての故にあらず、寧ろ單に自然の法則に從へるのみ。

人若し露國外交の跡に付て之れを見んか、寧ろ失敗の歷史に富み、自然の地位が十二分に勝利の材料を與へたる時の外は又敢て一の赫々たる成功あるを見ず、例へば千八百七十年に局外中立の政畧を取りたる結果、千八百七十八年の伯林條約に大々的國辱を受けたるが如き其一

例なり、蓋しこれ最近五十年間に於ける佛國を除きては殆ど其類例を見ざる一大失敗なり、一言以て之れを掩へば露國は吾人の常に想像するが如く敢て特得の政畧を有し強大なる實力を有するの國にあらず、又敢て爾かく不信なるにあらず、露國のヒンドー、クッシュ又は支那本土の如き確固たる境界并に自由なる出口に向つての膨張は之れ即ち自然の勢力にして、之れを妨害せんとする吾人の行動こそ却て自然に反して虚偽の境界を設けんとするものなり、露國は決して斯る人工的制限を以て抑壓せらるべきにあらず……

◉眞の問題

露國の眞の問題は今や其一歩々々自然の障礙に接近しつゝあることなり、此自然の障礙たるや之れを排除すること頗る難く、只内部の勢力(インターナルフォーセス)の開發によりて僅かに其一部を刈除することを得んのみ、約言すれば露國は資力に乏しく教育普及せず、又内部の組織も完からず、從て國力の點より之れを見れば敢て何等の進歩なく、他の歐洲列國に對する關係的國力は之れを一百年の昔に比して却て遜色なきを得ざるなり、何となれば一世紀以前に於ては文盲の度更に甚だしかりしと云へとも當時にありては他の列強も亦等しく文盲にてありしなり、又當時露國は一の憐むべき農民の社會にてありしさ云へとも普魯西も亦然りしにあらずや、要之以上の諸點は一旦事あるの時に際して露國の一大弱點たるや是れを南亞戰爭晩近の經過に徴して明なり、露國は由來富の集積に力めず、現今資本の集積に從事するもの僅かに約二百万人に過ぎず、之れを獨乙の二千六百万人に比して如何ぞ。

◉露國と平和、

此に於てか露國は専ら平和を望み、以て内部の改革を計り、西歐諸邦の水平線上に浮み出んことを欲す、露國現下の急務は戰勝にあらずして平和にあり、されば露國を化して一大工業國となすを以て畢生の目的とする大藏大臣ウヰテー伯の如きは現代に於て最も須要の人物と云はざる可らず、然るに露國現在の資力を見れば最近三十年間に於ける合衆國并に英國殊に政治上の必要より之を獨乙帝國の資力増加に比較すれば實に大海の一滴たるの感なきを得ざるなり、……要之戰爭の點より見れば露國は其外觀に反しピーター大帝以來現今を以て最も不利の地位にあるものと云はざるべからず、いつの世如何なる國に於てか只單に頭顱の多數が終局の勝利を制し得たるの例あらんや。倘同人は戰爭と云ふことは露國にとりて破滅を意味し、從て平和は其切望して止まざる所にして、先年の平和會議の如きは政畧として頗る妙を得たりと云ひ、又產業の發達するに從ひ革命の危險あるを說けり。

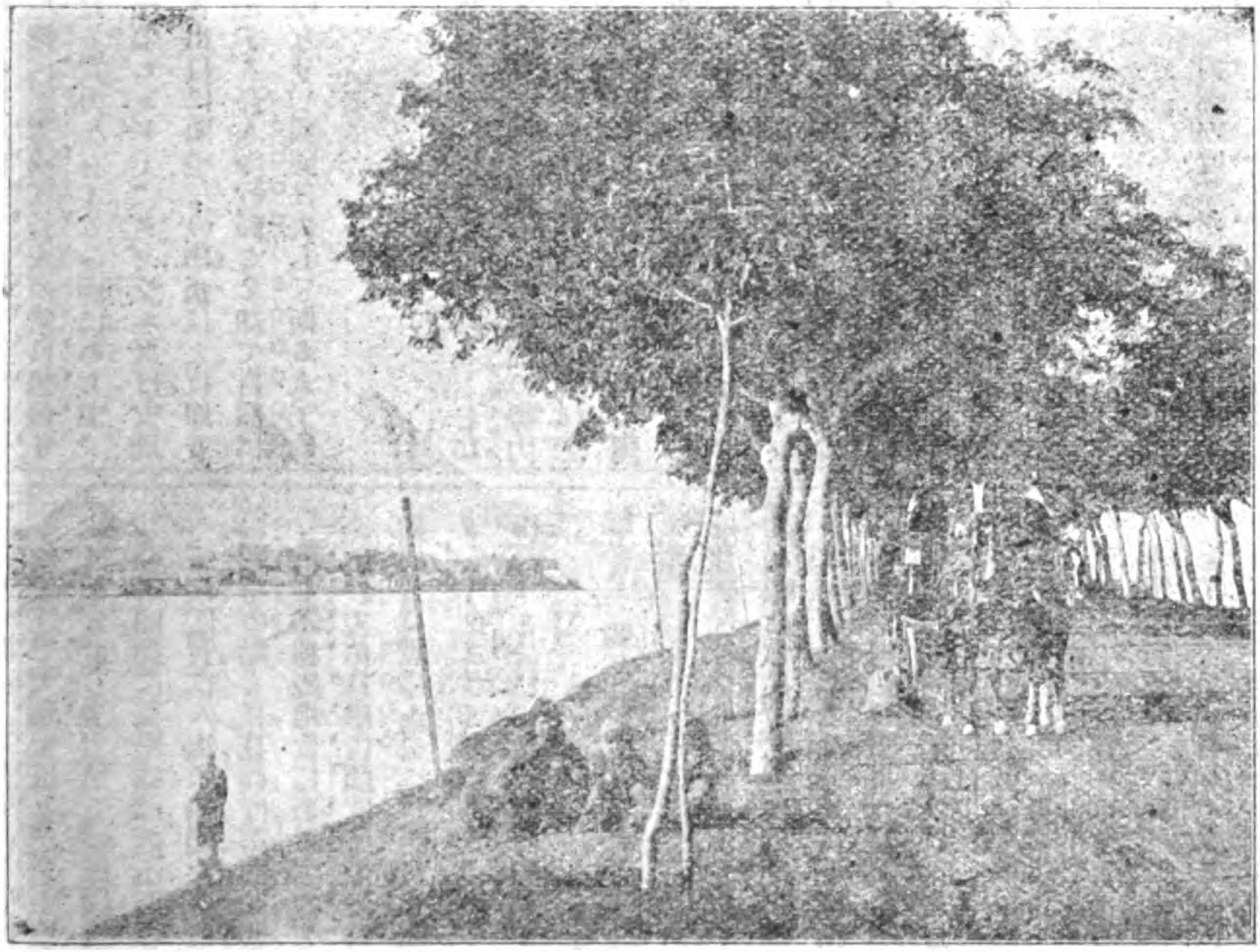
英佛平和の障害

七月發行のフォートナイトリー、レビューは英佛の關係に付て二個の評論を載せたり、其一は英佛間の平和の現狀と題してバロン、ド、クーベルタンの所論なり、氏は一般論者の如く英佛の關係に付て敢て樂天觀をとらず、兩國の間甚だ輕視すべからざる衝突の導火の伏在するを認め、佛國の殖民的膨張并に露佛同盟を以て其導火となせり例に依て其大要を摘譯すること左の如し。

◉佛國の殖民と英國　佛國何ぞ敢て英國を害し以て其領土を擴張せんことを欲するものならんや、而かも英人の傲慢にして嫉妬に深き常に謂へらく、亞細亞人種に文明を傳ふるはこれ獨り英人の天職にして敢て他國の能くする所にあらず、殊に佛國の如きは最も取るに足らざるの國なりと、之れ常に兩國間の平和を迫害する一大危險なり。

吾人は敢てアングロサクソンの文明を卑下するものにあらず、否之れを賞美するに於て敢て人後に落ちずと云へども又英國を以て全人類を其配下に置て然るべき程に完全無缺なる國民とは信ぜざるなり、英人は例へ自ら斯る自負心を表白せずとするも其行動を見れば自ら明なり、即ち不吉の鼓吹、忌はしき行動、及び不謹愼なる言語は皆これ右の迷想に出でざるなし、…………約言すれば彼等英人の我佛領を見ること恰も曩に米人のキユバーを窺へるが如し。

●露佛同盟　英佛間の平和を迫害する他の一大危嶮は露佛同盟の存在なり、この同盟は元獨乙帝國に對して締結せられたるものなりと云へども、其後形勢一變して本同盟は恰も英國に對する有力なる武器となれり、一朝亞細亞に於ける英露の關係にして破裂するに至らんか、佛國も亦遂に局外者たるを得ざるべし。若夫英露の衝突にして南亞事件局を結び英國また內顧の憂なきの時に至つて爆發するとせんか英國は必すや破竹の勢を以て露國よりも寧ろ其同盟國にして手近なる佛國を襲擊すべく、自由思想の二大本源たる兩國は全然兵火の中に埋れん、而して露國は獨り其間に滿洲を吞了し亞富汗に據ることを得ん。



◎三國同盟の將來、

これニユー、リベラル、レビユー雜誌の七月紙上に出てたるルシーン、ウルフ氏の所論なり、氏は本同盟に對する伊國當初の目的は以て佛國に備ふるにありしと云へども爾來伊國の基礎漸く鞏固なるに及び最早や其必要を認めざるに至りたれば三國同盟なるものは伊國より見れば既に存在の理由を欠ぐことゝなりたり、と云ふ、所論の要旨左の如し、

●英國と三國同盟との關係
千八百八十六年本同盟の延期を約

議するに當りて伊太利政府は英國の加盟を以て條件となしたり、即ち當時英國政府に政權を執れるソルスベリー卿は三國同盟に向つて頻りに秋波を送り、地中海に於ける現狀にして維持せらるゝことを得ば敢て加盟を拒まざるやに見へたり、若夫伊國にして英國より海岸保障の領意を得ば三十万の兵士は專ら陸上國境の防備に任ずることを得可く、從て獨乙并に墺太利の利便は非常なるべし、此に於てか談判は直ちに英國政府に向て開かれたり、ソルスベリー卿は書類に調印して國家及び後繼者を拘束することを拒みたりと云へとも、卿が政權に在らん限りは伊國海岸の保障たるべきを契ひ、伊國も亦之れに滿足したるなり、

其後千八百九十一年更に之れを延期するに際してやウヰリヤム帝自らハトフヰールドに於て協商を遂げられたり、ビスマーク晩年の言によれば此度は正式の調印ありたりと云ふと云へとも、之れ恐らくば事實ならざるべく、若し調印ありしとするもそはソルスベリー卿の手に私議せらるゝものに過ぎざるべし、

●伊國方針の一變　伊國新王はスラブ、ラテン同盟に意あり既に英國をして之れを信ぜしむべき態度をとれり、彼が政治上重大の利益を期する英國に對してすら既に此の如しとすれば其無意識の三國同盟に對する意向も亦知るべきのみ、而して其こゝに至れる所以のものは新內閣の恐佛病者によりて組織せられたると、伊太利が非常の利益を受けつゝある獨伊通商條約の延長が獨乙に於ける農民の動搖によりて殆ど不可能に歸したるに依るなり、

氏は更に結論して曰く獨乙は極力三國同盟の維持に力め、皇帝及宰相は協力して通商條約の延長を計るべければ本同盟は其形式に於ては或は消滅することなかるべしと云へとも其精神に至りては其死するや既に久しと。

地中海上英國の現位置

英國の一佐官ヴァーナー氏は地中海に於ける英國現下の地位と題する一論文を公けにせり左に其要旨を摘譯す、

今を去ること僅か二十年の以前に於ては地中海上に於ける我艦隊を威迫する海軍根據地は只一のツーロンありしのみ、而もツーロン軍港たるやジブラルタルとマルタを連結する航路を去ること凡四百哩の外にあり、若夫セバストポールに至りてはマルタ、アレキサンドリヤ間の航路を去ること一千哩以上の遠きにありしなり、然るに今や形勢一變し、佛國は我外交の違算に乘じてチュニスを占取しビゼルタを加へたり、此に於てか英國古來の讐敵たる佛國はジブラルタル、マルタ間航路に對し數時間航程の內に侵入し來たれり、又一方に於ては土耳古に於ける外交失敗のため、同國は露國掌上の玉となり、黑海は我に閉されて獨り露國のために開かれ、從て露國の艦隊はイージヤン海に出で來るにあらずんば我は遂に之れを攻擊するに由なし即ち換言すれば今日のセバストポールは實際上恰もダーダネルス海峽の門戶にあると異なるなく從て「自マルタ至アレキサンドリヤ航路」を去ること僅かに四百五十哩にして一日の行程を出でざるべし云々、

海外雜纂

亞米利加發見は佛教僧徒なり

此問題は十數年前より已に歐米の學者に依て唱へられし者にして、今猶研究中にあるもの、社友文學士園田宗惠氏の如き先きには米國に於て現今は獨逸に於て修學の側ら其考證をつゞけつゝあり、同氏が此問題に就て米國に於て其研究を共にせるカリフォルニヤ大學に東洋語學竝に文學の教鞭をとれるフライヤー博士、今回ハーパー雜誌の七月紙上に於て此表題の下に頗る趣味ある一論文を寄せたり博士はコロンブスの亞米利加發見を去ること數千年の昔に於て已に一佛教僧侶の亞細亞よりクリール及びアリユーシヤン諸島を經てアラスカに渡り亞米利加大陸に入れるの根跡を擧げ更に物質上の困難を以てこの說を否認するの不可なるを辯じ堪察加より普通の小舟又は獨木舟に乘じ以て潮流に從はんか其渡海はさのみ難事にあらずして長時間陸影の外に漂ふの要なけんと云へり。博士は更に云ふ、アラスカより亞米利加海岸に沿ふて漸々南下し以て中米に向ふはこれ誠に易々たるのみ、彼の印度及支那間の陸路往還其他證跡明確なる佛教僧徒の幾多の大遍歷に比せば誠に瑣々たるものなり、蓋しこの僧徒渡航のことは其通路に當れる諸島土民の今日能く知る所なるが、五世紀の頃に於ても亦然るが如し、思ふに熱心なる僧侶は佛陀の福音を滿天下に傳へんが爲め、此島より彼島へと次第〳〵に進入し、更に島民のために大陸の存在を敎へられ、遂に遠く中央亞米利加に進せるものなるべし。

◉**支那史上の證跡、**この佛徒傳道に關する直接の證跡は主として其根據支那の歷史書類にありと云へとも、亞米利加に於ても亦アラスカより墨西哥に至る全太平洋岸、及び附近の諸島に於ける傳說、歷史及び宗教上の信仰幷に古器物は皆これが傍證たらざるなし、太古より支那に於ける歷史及地理の諸書、幷に詩歌其他の古書は等しく、遠く支那の東方に當りてフサン又はフスーと稱する一大々陸あることを示し、其距離は約二万里即ち六千五百哩餘にして、其幅員約一万里、即ち三千二百五十哩なりと云ふ、而して大陸の彼方に一大海の橫はるありと云ふは、思ふに大西洋のことなるべし、又フサン(扶桑)と云ふ大木あり以て國名となすと云ふは日本を云ふに非ず蓋し墨西哥のアゲーブ樹を指すものならんか。

◉**僧侶の旅行記**　これヒユイセンの書けるもの只一あるのみ、同人は當時佛教傳道の中心たりし、カブールの人なり、其記事によれば自らフサンの國に入り、紀元五百二年歸國して支那皇帝に謁見し種々珍奇の品を献納したりとあるは、蓋し墨西哥より齎したるものなるべし、又其布教記事によれば紀元四百五十八年に於て初めて佛教のフサン國に輸入せられたることを記し、アリユーシヤン群島及びアラスカ經由の旅程を記述したり、而して其風俗習慣等は彼が墨西哥に於て說ける所と全く相一致するを見るなり。

◉**宗教幷に技術の間に殘存する痕跡**　額て墨西哥の方面を探査するに長き帶とアントルを着けたる白面の偉人來りて國民に向ひ、凡ての邪惡を避け、正直且つ平和なれとの敎な

說きたりと云ふ傳說あり。

加之、墨西哥、ユカータン及中央亞米利加に於ける宗教上の慣習、彫刻暦及び美術に於て佛教の餘勢の殘存すること一目瞭然たり、全くこの話を知らざるものと云へども紀元以來亞細亞と亞米利加との交通ありしことは遂に之れを認めざるを得ざるべし、亞細亞にては佛のことを Gautama 又は Sakhya と云ふ左の諸名詞を以て之れに比せば其間の消息蓋し思半に過ぐるものあらん、

Guatemala, Huatamo, Guatemotzin

Oaxaca, Zacatecas, Sacatepec, Zacatlan,

Sakapulas.

加之、ミツキステカに於ては高僧の稱號を Tuysacca or the man of Sacca と云ひ又パレンリーにある佛像の上に Chac-mol とあるは Sakhya-muni のことなるべし、又西藏及び北清に於ては佛教僧侶のことを lamas と云ひ墨西哥に於ても亦 llama と云ふ。云々、

話柄百端

▲麥酒製造所　全世界にて五万一千個所有り、其中二万六千までは獨逸に在り

▲葡萄の初めて英國に移植されしは一千五百五十二年なり

▲煙艸消費高の一番多きは墺地利國民なり、歐州列國の比例は人口百に就き煙艸の消費高、一年に西班牙は一〇〇封度、伊太利は一二八、英國一三八、露國一八二、丁抹二二四、那威二二九、而して墺地利は二七三封度なり

▲花は皆香氣あるものと思へるは誤まれり、歐州の花四千二百個のスペシース中、其香氣あるは其十分の一に過ぎず白色の花は比較的香氣多し、千百九十四種中其六分の一は香氣有り、

▲十六世紀英國に於て店頭に陳列して林檎及び杏子を賣ることを禁ぜしことあり、其理由に云く下女下男の食慾を誘引すること多くして爲に竊盜罪を犯すもの多ければなりと、

▲世界第一大仕掛けの印刷局は米國政府の華盛頓府に在るそれなり

▲ヒラデルヒヤ市は千七百七十四年まで亞米利加第一の大都會なりし

▲世界郵便物の三分の二は英語にて書かる

▲世界新聞紙の六割八分は同じく英語なり

▲希臘は全國にて僅かに百五十二の新聞を有するのみ

▲メキシコ灣流（ガルフストリーム）平均の溫度八十六度

▲メキシコ婦人は支那日本婦人の如く帽子を被らず

▲馬來人の髮は其長きもの七呎に上る

▲最長の人間は現今南部及び東部のパタゴニア人則ち土人の Tehuelches と稱する族にして國民平均の身長六呎弱あり六呎四吋又は六呎六吋の身長を有せるものは珍らしからず

▲キユバ島民は野鼠を第一の美味として食す

▲袋鼠の尾はスープとして最も美味に且つ滋養に富む

▲魚類は每年太さと長さを增して死に至るまで發達す、人間の發達が或る年齡にまで限られたるとは異なり

▲多數の魚族が其腹白くして其脊青きは自衞上最も必要なり、白色は水中を透る光線の色なり、以て水底の敵をマギラかし、脊は水の色と同じくして水上の敵をゴマカす、

▲パナマ地峡　に毎年奇觀有り、六月の始めより其近傍蝴蝶の數多くなり毎年七月の十四日又は十五日まで其數次第に增加し數百千万の蝴蝶空を掩ふて地峡を通過するを見る非常の美觀なり

▲菌類の壽命　は植物學者か日を以て數へずして時を以て數ふる程短命なり、然れとも或虫類に向ては尙其菌類の傘に卵を植へ付け子孫の繁昌する丈けの餘裕あるなり

▲從來琥珀の　裡より發見されし昆虫、爬虫、植物、貝殼、菓物、の類二百餘種有り、近ろ龍動の市場に顯はれたる八吋の長さある琥珀は最も珍らしきものにして、其中に一疋の蜥蜴迄も欠損無くして包含せらる其實價一百万圓と云ふ

▲一万圓のハンカチーフ　を所持さるゝは露西亞の皇后のみならん、有名の手工が七年間其刺繍に手を費やせるもの

▲人間を歩かせて廣告用にする、所謂サンドウイッチマンは遠き昔、紀元千三百四十六年伊太利フロレンツの酒商が貧民を雇ひ來て人間を麥藁にて包める葡萄酒の瓶に扮せしめて市中に廣告して廻はらしめたるが抑もの初めなり

▲伊國の人口　政府の統計にては五年間に一万二千八百八十三人の人口減少を見る

▲音樂が動物　を動かす力あるは誰も疑はず、近來ニューヨルクの音樂家中音樂の植物を動かす力有ることを說くものあり、妙曲を奏せる中は光線に對して其葉を展ぶると同じ作用をなし、其調子の破るゝか又は息むときは微震して其葉を縮むるとの事なり、勿論其植物は感覺强き種類のものに限る

▲ユーコン川　は海より七百哩乃至八百哩のところにて河幅二十哩に及ぶ處有り

▲婦人喫煙車　と云ふ特別の設けある、列車は露國の鐵道のみならん

▲巴里より他國へ「仕立てたる洋服」を輸出すること毎年六千万圓

▲富源を有ゆる手段にて開發せしめ居れる英國は、イングランドにて其土地一エーカー毎に一年二十圓强の產物を出す割合となり、スコットランドにては一年二十圓弱、全土鑛物を以て滿されたるウエールスにては毎年一エーカー四十圓の富を生ず

▲東部及び南部サイベリアには採金に從事せる四万の鑛夫有り



四部亞弗利加土人の墳墓

雹害豫防の新發見

大砲を以てす

此に摘出する所は佛國雜誌レビュー、デ、デユーモン紙上に出でたるサボルタ伯の所說なり、氏は雹球の大さに就き驚くべき實例を示せり、即ち一昨々年十月ビゼルタに於て佛國軍艦の上

に降下せるものは乘組員の語る所によれば殆ど二十一封度の重量ありしと云ふ、而して暴雹の降下するは暑中よりも寧ろ冷氣の時に多く、又佛國にありては北方に少なくして南方に多く或地方に於ては降雹の爲め農作物全然枯死すること珍らしからずと云ふ、スチリヤは特に雹害の甚だしき地方なるが、初めて大砲の發火によりて鬱積せる雹雲を破碎するの試驗を行ひたるに其成績頗る良好なりしを以て今や大陸諸國の重なる農業地に於てはカノン、ステーション即ち大砲設置場なるものを設け以て暴雹に對し農作物を保護することゝなれりと云ふ。



詞藻

上海

佐々克堂 友房

四海兵戈幾日休。乘槎絕域儘淹留。戰餘未服新臺地。
敗後猶憐古帝州。萬里天涯逢舊雨。一堂燈火話曾遊。
明晨我又向西去。惆悵春中江上樓。

香港

極目天涯不見山。雄心直欲壓南蠻。船頭横槊題詩處。
呂宋瓜哇指顧間。

錫蘭島

善男善女幾千群。云是今朝拜釋尊。憐汝空知崇佛骨。
本來忘却國家恩。

漢泥寺

去年入函山。放浪久不還。今年遊萬里。踏破白雲關。
崎嶇有逕路。巉岩不易攀。憑弔漢泥寺。地淨隔塵寰。
伊昔牟尼佛。濟度極萬艱。湖畔山氣冷。屋後水潺々。
菩提樹林夜。月明照孱顏。却憶塔澤路。磬微亂松間。

自註、予太愛函嶺塔澤山水、年々必游、遊則忘歸、此地宛然函山之風致、且塔澤有古寺、故結及之、

埃及

孤帆萬里破波行。健鶻橫空四望平。三角塔尖何處在。鵬雲決背海樓城。

伯林過維廉老帝宮前

勳苦包羞六十年。馬肥人健向無前。盟秦約楚誰容喙。伐趙征韓孰比肩。建武門高臨外郭。凱旋塔聳在中天。當時偉業君知否。老帝宮邊月似烟。

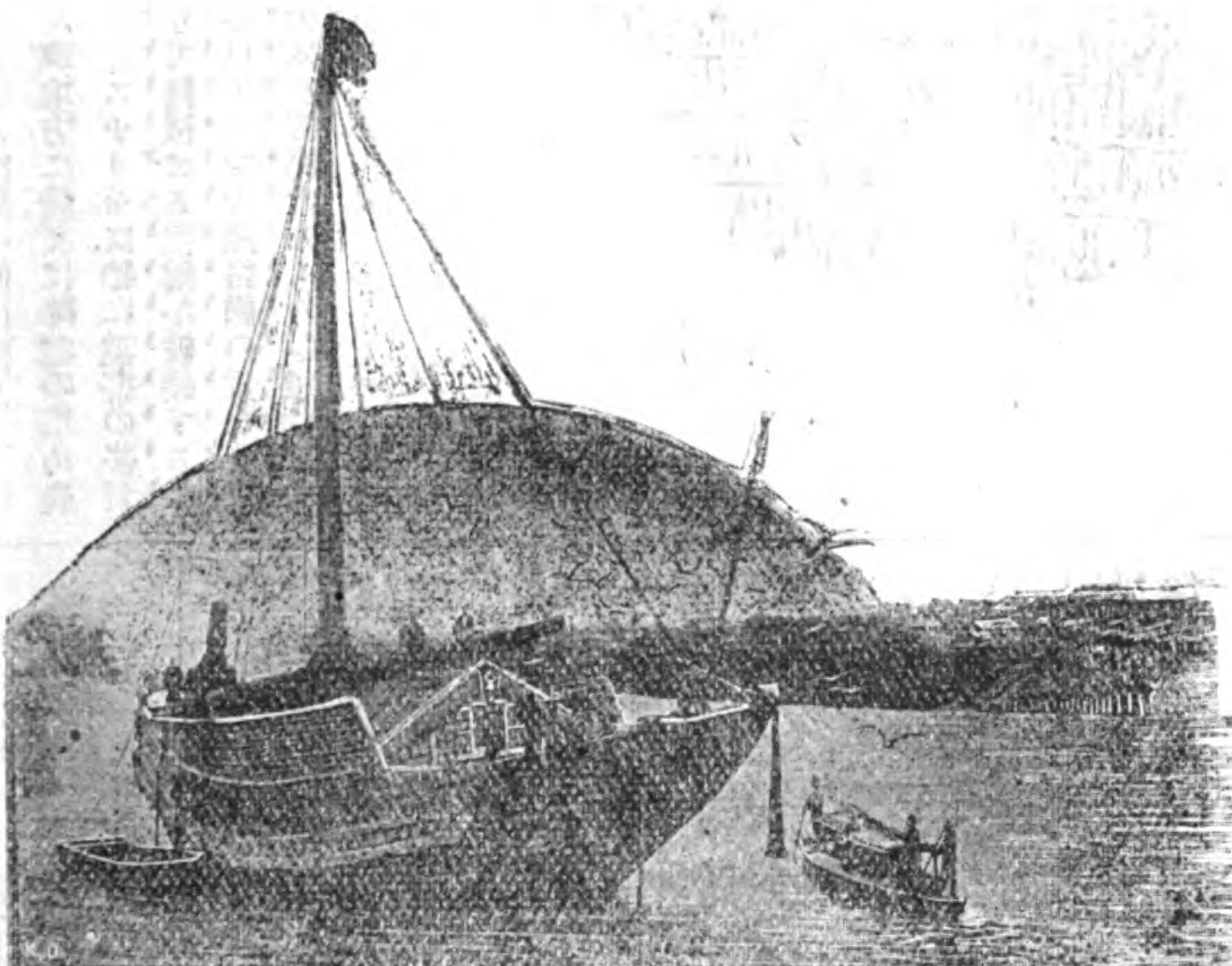
不蘭顚不爾時亞黨洒飲會

結社青年意氣豪。夙將身命比鴻毛。中原若有風雲變。欲試平生百鍊刀。

自註、獨國風俗尚武、大學學生、相結爲黨、月時約爲決鬪、流血淋漓、雄猛無比、而禮法具在、又黨中開宴飲酒、鯨飲數斗、而未甞亂、亦可以觀其國風矣。

弗烈力大王離宮

稱霸中原意氣揚。餘威依舊百年長。豈無行客思當日。猶有居民說大王。尚武好文南面主。拓疆興國北方强。英雄又是讀書子。故殿于今存學堂。



伯林觀兵式六月一日

皇帝朝出闕。觀兵伯林城。貔貅幾千隊。萬馬肅無聲。誰家好健兒。鞍上凛英姿。何處瑤臺女。嬋娟開蛾眉。健兒與美女。談笑擧玉巵。劍戟映天日。雄風拂大旗。金鼓數聲動。六軍一齊馳。

自註、觀兵式時、許女子陪觀。與將校歡接、且擧杯相祝、是爲獨國特殊風俗、蓋振作士氣之意也、

以上數首、克堂觀風詩史所載也、詩史輯歐米漫遊中諸作、雖無魂麗眩目者、寫實境、寓感慨、與尋常詩人、自異其選、春畝山人題云、詩史一卷、命名之義、取諸吳季之風觀、其志尚所在、可以見矣、非徒侈遊觀弄藻

翰也、洵然、作者往年以戰袍日記、名聲藉甚、有雲龍風虎之慨。今日老骨崚嶒、覇氣猶存、豈唯文字之末技哉、

觀風萬里米歐間、黨李怨牛何復關、一片豪心依舊在、不妨霜鬢對紅顏、

馬耳塞港　　藤島胯岳 丁穉

砲壘碁峙比金城。巨艦如山扼港横。殺氣凜然銷未得。厚顏何物說文明。

巴黎

珍珠眩目競豪奢。羅帶樓臺百萬家。夜氣濛々籠彩暈。滿城燈影霧中花。

前首痛罵刺人、後首寫景綺麗、如出別手、

訪青柳峽南席上賦似次韻　　有泉宏川 正武

衡門臨水柳條長。恰似柴桑處士鄉。堪羨北窓高臥處。不知人世有炎涼。

舊朋相遇架談長。畢竟他鄉似故鄉。四面青山風颯々。簾波漾蕩笑聲涼。

唱嗟應酬、難得此自在、

大塚村觀蓮花　　村松蘆州 志孝

一路長堤冒曉行。蘆川橋畔宿鴉驚。水烟相合遙田濶。旭日未升風露清。坐見搖々驚蕊影。徐聞拂々拆苞聲。荷花荷葉幾千頃。擬向斯間了我生。

平淡穩雅、專主實境、似易更難、今代作此種者、以山田新川翁為最、

銷夏雜詠 課題應募四十五首選錄五首

(甲)　　石川蓼處

避暑林樹下。蹄輪不肯來。穿渠通碧水。脫屐護青苔。何者附炎熱。我心如冷灰。池塘疑有雪。一朶白蓮開。

一結奇警、涼味沁骨

(乙)　　松山錦川

身住晃山頂。暫忘三伏炎。峰攀青玉案。瀑挂水晶簾。竹院園棋靜。湖樓硏鱠纖。金波何瀲灩。東嶺上涼蟾。

中聯巧穩、不覺險韻、

(丙)　　淺田春水

銷暑住何處。小西湖畔家。晨參天女廟。暮駐美人車。涼颯搖珠箔。清漣醮錦葩。東臺明月上。照徹玉無瑕。

曰美人、曰天女、曰玉無瑕、何等寓意、木强漢不能解、

(丁)　　關青山

滿城人苦熱。我獨飽清風。景物須臾變。陰晴不可窮。野雷轟度嶺。驟雨霽懸虹。一碧天如拭。氷蟾玉鏡同。

後半清瑩、涼味可掬。

（戊）　中山聳空

十里離城市。若若一路通。過溪尋竹院。移榻臥松風。
屋後青山聳。階前白霧濛。晩來天似拭。林抄月玲瓏。

結末與前首約略相同、然清穩可誦、

牽牛花　課題應募五十一首 選錄五首

（甲）　関　青山

賦性本嫌炎。朱門誰媚寵。野人籬落花。閒淡自然好。

寄托最高、

（乙）　佐藤碧城

曉露滴臙脂。粧成婀娜姿。多情京兆筆。爲妾畫蛾眉。

嬌艶無比

（丙）　今井錦洞

昨夜群仙宴。人間更不知。擲杯天上落。總是碧瑠璃。

奇巧可驚。

（丁）　加藤鶴水

點綴粧籬落。曉風殘月時。畫樓人在夢。開謝不曾知。

措詞婉約

（戊）　山田孤山

露檻裁紅錦。涼臺剪紫雲。玉纖爭捧蓋。卯飲美人醺。

巧麗鮮綺

詩課題

◎秋海棠　七言絶句○九月十五日締切
○用紙郵便はがき

右は下谷區谷中三崎町町田柳塘宛投稿の事

良夜集　（風韻社詠草）

○　中西松琴

いつくしみ飼へる小鳥も放ちやりて山に入らんと或日思ひき

このゆふべ君をおくりて橋に立てば眞上にしろし天の川ぎり

靄のうちにくしきひかりのかゞやきて菩薩あれます白蓮のはな

小すゞりに草の葉末の露うけてほしのうた書く七月七日

戀歌を書きちらしけん小扇のぬしいまいづち秋のかぜ吹く。

我妹子にからかさかりて野をゆけばさゆり一もと雨にうなづく。

○　　佐藤大蛾

やまひありて二荒あらしを馬で行く細尾峠の朝空きよし。

○　　門野三栗

妹が家は霞にかくれて夏木立ひとりし行けば栗の花ちる。

嫁き行く人見おくりて泣くは誰あを葉わか葉のさゆらぐところ。

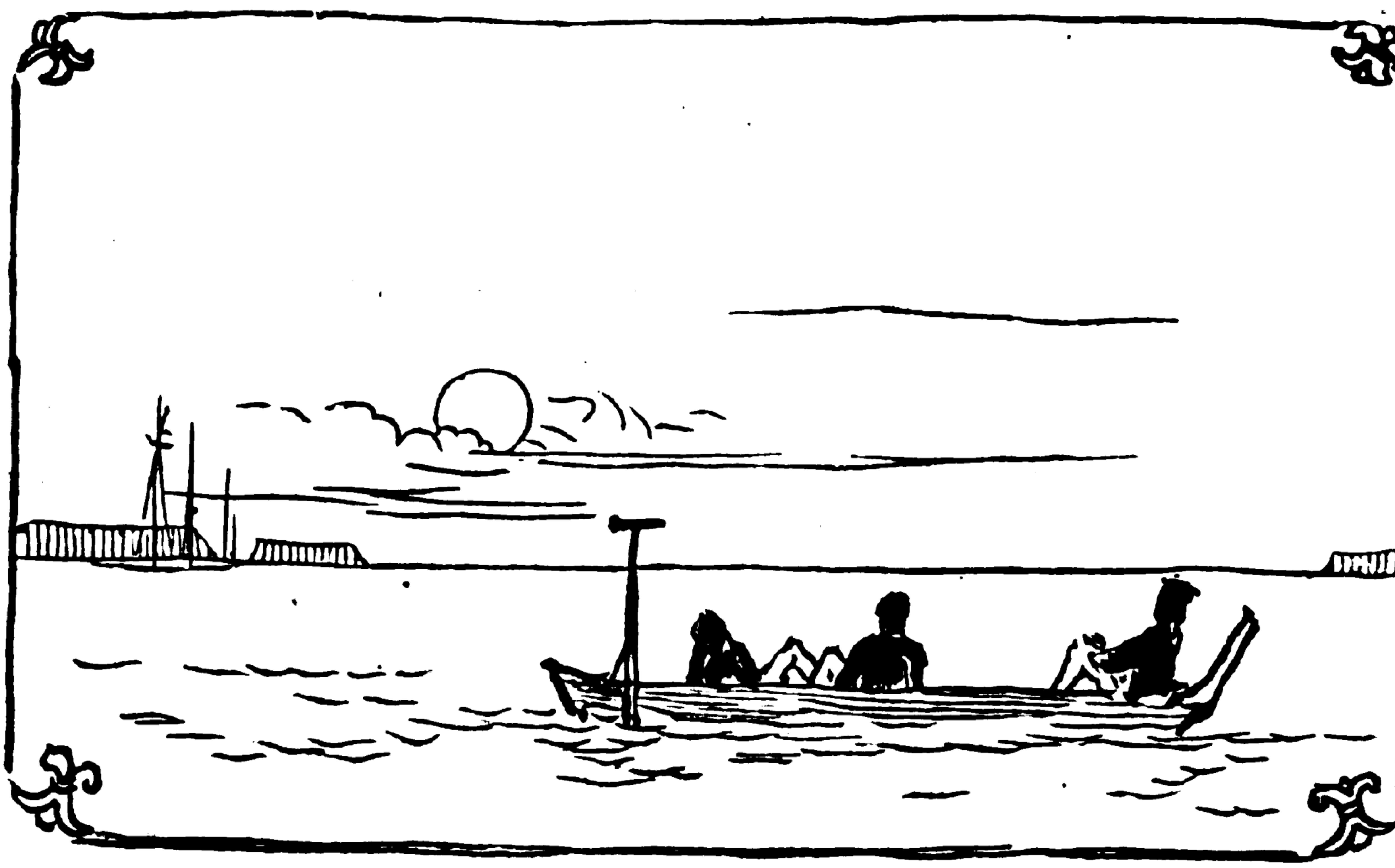
かけおちの夫婦酒うる村はづれかくてたのしく世を過すかな。

○　　臼井學耕

そゝり立つ岩山ねろを水おちて石ころ〳〵に月のくだくる。

母ぎみのはかなくゆきしあかときを天のはる〳〵月うすれたり。

たらちめのひつぎ送るとこし友



に母なき友も三人まじれり。

青葉くらき後瀬の山のふもとべにかへらぬ母をはふる今日はも。

思ひいたみ旅籠のあけを泣き伏せしあゝそのゆめのまことなりしよ。

○　　小池武俊

うぶすなの森のやしろのたそがれに馬引きながら歌たてまつる。

わきも子が水鏡して物おもふせとの小川にかきつばた咲く。

乙女子が戀のうらみに身をなげしその橋くちて藤の花咲く。

いかめしき神のやしろは荒れ果てゝ藤のはな咲く藤の森かもゝ

○　　中西正夫

人みなの日ごと夜ごとにおかしたる心の罪にむくいなき世か。

さらば君まさきくとのみいひす

てゝ空をあふげば月に雲あり。

家のため身をいたはれのみことばはうれしかりけりかなしかりけり。

○　伊藤呉風

ゆけど〳〵山また山のみちばたに名なし小草の花のましろき。

○　清水晶月

よみぢへとあらそふ神をなぎたふすくすしの業のくすしくもあるか。

○　鈴木露村

雛僧の箒かた手に立てる見ゆやゝ蜂すだく菩提樹のかげ。

○　一柳直彦

世を容れず世に容れられず山寺に米とぐゆふべ寒き風吹く。

○　足立琴洲

夕がほはけぶりのうちにくれにけり蚊遣たきつゝつま待つらんか。

○　佐藤梅園

妹が家は川のむかひよ橋おちて呼べど答へず梅雨のそら。

○　宮武恒樹

山かげの瀧おつるところ岩ありて不動たゝせりその岩の上に。

○　森鬱堂

我妹子に蚊幮をたゝませねやながら曉月夜見ればすゞしも。

○　伊藤輝子

忘れじよみ空の月を指さして二人の爲めに照るといひし子。

○　山本貞子

さみだれの雨はれそめてあか〳〵と夕日の窓に柘榴花ちる。

○　諸富幸子

うつくしきをとめゑがきし繪葉書のとゞきし時よわれ病みてありし。

○　風間光子

軍よりかへりし兄と二人して植ゑし虎の尾はな咲きにけり。

○　河邊登勢子

ゆふぐれの雨を涼しみいとはやも虫きて鳴くよ燈火のもと。

菅笠の旅人ふたりゆふだちの雨にぬれゆく岡ごえのみち。

○　佐伯菊子

白薔薇のかき根に立ちて駒鳥のさへづりきゝつ君が家の門

○　渡邊光風

いさごぢの水わくところ家ありて小蜂むらがる撫子のはな。

夕やみの里川つゝみ露づきて草むら〳〵にほたるとび立つ。

庭のもに大がめいけて水みてゝ浮藻うかべて金魚はなてた。

年久にやむ身ねざめて夜もすがら蕗の葉たゝく雨を聞くかな。

風わたる柳のかげにみづ屋いてゝみやこをとめの夜を涼むかな。

俳句

四方太選

廻燈籠

幽靈も出て來て廻燈籠哉　天風

花魁と禿と廻燈籠哉　皎雪

瓜くうて見て居る廻燈籠哉　伸堂

覗きゆく草の戸越や走馬燈　五空

灯の消えし廻燈籠や明け易き　嚴子

破れから灯見ゆる廻燈籠哉　木禪

灯の消ゆる廻燈籠や天の川　輪月

花に狂ふ廻燈籠の胡蝶哉　一堂

捲き上げる掾の簾や走馬燈　青子

茶を飲んで廻燈籠に端居哉　快雨

葱咲く小庭の風や走馬燈　北岫

ともすれば逆さに廻燈籠哉　鬼水

骸骨が踊つて廻燈籠かな　霞松

手を掛けて廻燈籠を廻しけり　稻青

軒並ぶ揚屋に廻燈籠哉　削玉

蠟燭をつぎ替ふ廻燈籠哉　吐霓

絶え〳〵に廻燈籠の灯影哉　仝

宵の雨廻燈籠を下ろしけり　虛靜

晝は風に夜は灯に廻燈籠哉　仝

暗うなる廻燈籠やきり〳〵ず　洋々

走馬燈七夕近くなりにけり　仝

嫁入りの狐が廻燈籠哉　生巢

三皇五帝夏の世へ廻燈籠哉　仝

有漏路より無漏路に廻燈籠哉　柳家

傾城の見て居る廻燈籠かな　仝

透見ゆる廻燈籠や葭襖　啞子

灯を入れる廻燈籠や釣葱　松濱

夕顔の軒にも廻燈籠哉　耕村

あぢきなき廻燈籠や晝の雨　仝

人

暗うなる廻燈籠や火取虫　松濱

地

甘酒の屋臺に廻燈籠哉　啞子

天

椽に置く廻燈籠や籠枕　耕村



花火　九月十三日マデ

柿　十月十三日マデ

○○○○次號より改めて三才當選者には其○○○○○○○○○○○○○○○○號雜誌一冊づゝ贈呈することゝす

貧者行

森田義郎

我家は。まづしくあれば。なく鹿乃。おきふす部屋乃。板びさ

し。やれたるもとに。うるはしみ。思へる妹は。開く花の。ゑまひさびしく。いをもれず。身もたなしらに。やすみなく。マチのはこばり。うつし世の。なりをしたすく。そこもへば。胸こそいたく。ますらをの。いけるしるしも。あらずし思ほゆ。

反　謌

ゑみつくりマチの箱はるあやにしき汝がほしさかりの妹だ身にして。



雑録

天才の戀

旅中　青柳有美

〔序〕

野に鋤を取る土百性すら、一たび戀の心を激ませば、玆に三十一文字の句を謌へて、胸間抑へ難きの苦悶を漏らし、しばしながらも、世に所謂詩人の容を受くるに非ずや。然らば、生れながらの詩人にして、天來の鋭敏なる性情を有するもの、豈に、戀愛の大激動に觸れて、感興至大、其琴線を高く振はしめざることなからんや。故に、古來、世に名ある天才は、その詩興を多く戀愛に得たり。之を聞く、昔鎌倉の代、詩人舜舟なるものあり、其筆を取りて紙に向はんとするや、必ず先づ尺八を一奏す。而して、詩興忽然として雲の如くに浮かび、以て巧に書くを得たりと。此くの如くにして天才の士は、初めに能く戀の神の默示に受け感興の動くところありて、玆に漸く詩あるを得るものなり。げにや、戀なくんば天才の感激あることなく、故に又詩あることなく、歌あることなし。戀は天才の

最大教師なり。あゝ戀や偉なりといふべし矣。

されど天才の戀と常人の戀と、また自らにして異るところなくんばあらず。例へば人の家と豚の小屋との、相違ふものあるが如し。然らば何をか天才の戀に特徴なるものなりといふ？曰く早熟なり。曰く狂熱なり。曰く移氣なり。曰く多情なり。曰く空漠なり。乞ふ暫く具に之を説かしめよ。

〔第一段　早熟〕

ダンテが、かのビヤトリチエを垣間見しより、始めて戀の心を動かせしことの、まさに其九歳の秋にありしは、能く人口に膾炙するところなれど、ツルゲネーフの言るところによれば、非凡の天才は六歳にして尚ほ能く戀するを得べしとなり。この言や僞りなるが如くにして實は然らず。前世紀の初めに出でたる伊太利の彫塑師カノヷアの如きは、早く既に五歳の比に於て、初戀の夢に耽れり。而してバイロンの戀は、人も知る如く、實に八歳の時を以て始まる。彼れが其處女作ともいふべき作をものして、所謂詩人の生涯に入るべき門を開きしは僅に十二歳にして、その從姉マーガレットを戀し、これに一詩を贈りたる時にあり。バールンスは、稍々遲きものなりと稱せらるれども、なほ十五歳にして戀の味を知り、佛蘭西の樂人ベリオは十二歳にして初戀の心を起し、ルーソーも同じく十二歳の頃、ゴートンなる一女兒に懸想せり。彼れ其當時のことを「懺悔錄」のうちに記して曰く『孃にして若し我れに命ずるに火中に飛び込むの一事を以てするも、我れ必ずや唯々として其命を奉じたるべし』と。此くの如くにてし、戀の早熟は、アルフエリーも言へりし如く、實に天才の一大特徴なり。殊に藝術に志ある天才の特徴なり。

然らば、何故に天才の戀は、常人の戀の如くならずしてしかく早熟するか。蓋し天才は、其智能に於て早熟するものなれば、又其感情に於ても早熟すべければなり。夫れ智と情とは、かの平凡なる一種の心理學者が滔々として述ぶる如く、互に逆比例の發達をなすものに非ず。智といひ情といひ意といふも、素とこれ三種別躰のものに非ずして、共に一つの心より發せしなり。されば、智に於て戀に於て非凡の力量ある心は、又情に於て非凡の力なかるべからず。これを家屋に就て譬ふるも、獨り家根のみの重且つ大にして、これを支ふる柱の細かるべき所因なし。獨り柱の太くして之れに應ずべき屋根の、また輕かるべき所因なし。家根重大

なれば柱太く、柱太ければ屋根又隨て重大なり。豫言者として偉大なるマホメツトは、將軍とし政治家とし詩人とし戀人として又偉大なるものなりしに非ずや。而ふして詩人として勝れたるバイロンは、能く三軍の間に雄飛して、良將帥の技量を示せしに非らずや。是に於てか以爲らく、智能の發達せるものは、また其感情も發達せざるべからずと。殊に藝術の天才は、その注意力の趣くところ、主として「美」にあり。故に天地間のうち若し一點一劃の「美」を具ふるものあるも、世の凡才が容易に之を認識し難き若年の時に於て早く既にこれに心を動かし、能くその價値を知る。而して、古るき希臘のミソロヂーにもある如く、「戀」の神は全くの盲目にして、常に「美」の小兒に手引きせらるものなれば、戀の心の起る所因は、先づ對物の「美」に動さるゝにあり。即ち、戀とは其初め先づ「美」を感得して而して後に起るを法とするものにして、「美」を知るところ、「戀」常にこれに從ふ。

然るに見よ女は是れ造化の最も美なるものにして、萬有の粹美に非ずや。生れながらにして「美」の非凡なる認識力を有する藝術の天才が造化のうちにありて美妙極まり無き斯の女を觀、幼年にして早く注意をこれに惹かれ、まづ其「美」を認識して、忽ち戀の心を動かすこと、豈に偶然ならんや。是に於てか以爲らく、天才の戀の早熟は、幼にして早く美を認識するの力を有し、忽ちこれに感激する故なり而して女は、天地の至美至麗なる者なるを以て、その美を認識せらるゝことも、又隨て最も容易なり。茲に即ち天才の戀の早熟起る。

〔第二　狂熱〕

史乘の大偉人にして、戀に狂熱せるものなしとは、ベーコンの言なれども、天才にして戀に熱狂せざるものなきも、又是れ古今の通法なり。ダンテが娟かねビヤトリチエの戀に一生を獻げし如きは、言はずもがな。惡魔の化生なりといいたく女人を罵りしショウペンハウエルさへ尙ほ且つ美はしき一人の女優に三千磅を贈るの遺言をなせしといふに非ずや。シユウベルト、ベートーフエンなど、世にも名高き樂師の、契られ難き戀に其心を悶き苦めし如きも、人よく之を知る。殊に甚しきは、バールンスとハイチとなり。世にはペトラークの如く、ハイチの詩を以て、たゞ徒らなる空想に驅られ、幻に似たる戀を歌へるものなりとなす輩あれども、これは大方の謬にて、まことは從妹モリーが其富めるに誇り、貧しき我が詩人に嫁ぐを悅ばず、閥閱ある家に嫁かん

ことを希ひ、すげなくもハイチを反ね拒みしより、終生遂に療され難きの傷を受け、これに激せられ、之れに狂して、我が心の苦み痛むを歌へるなり。わゝハイチや一見浮薄破倫なるが如くにして、其實死に至るまでモリーに熱し、モリーの影に責められしなり。わゝハイチや此の痛苦を轉ぜんとして世に多くの識を得たり。パールンスは、實兄ギルバートなるものゝ記するところによれば、絶えず見目美はしき何れかの女人の擒となりて、狂ひ煩ひ泣き叫べる樣まことに眼も當てられず、其神身の激動、天下叉多く類を見ざるほどなりしと。以て、天才の士が、如何に戀に熱狂するものなるかを知るべし。

夫れ、大偉人は手腕の人なり、意志と理性との人なり。故に「數」と「時間」との觀念餘りに明瞭にして、因果の關係を知り、利害得失の輕重を覺ること、餘りに機敏なり。是に於てか、空中の樓閣にして、何等の得るところなかるべしと思はるゝ斯の戀の如きに迷ふて、これに深入りし、これに血の道を擧げて熱狂すること能はざるなり。しかも尚ほカイザルの女王クレオパトラに狂へるありて『英雄色を好む』の諺の、全く空しからざるを示すに非ずや。『英雄色を好む』とは、これ蓋し、智能の發達せるものは、叉其感情に於ても非凡のものあるを意味するなり。されば、世に所謂大偉人なるものは、もと是れ戀に熱狂するの資質なきものに非ずして、たゞ其戀に熱狂する資質を以て、これを手腕の方面に注ぎしのみ。假令へば、馬に去勢を行ひしが如し。馬やこれに因り其の生殖力を一轉して運搬力となすなり。是に於てか、古へより今に至るまで、世に所謂聖者偉人と稱せらるゝ儕の、叉皆な此くの如く、戀の心を轉ぜし跡あるを見る。神の子基督と佛陀悉達との如き、誠に其好適例ならずや。若し基督ならざるものをして、マグダラのマリヤと他のマリヤたちに交はらしめなば、果して如何。悉達ならざるものをして、ヤソダラ姫に契らしめなば、果して如何。故にベーコンの言の如きも、即ち大偉人とは、戀の心を轉じて之を手腕に注ぐものたるを指せるに過ぎず。

而して天才は大にこれと其趣を異にす。天才は想像の息子なり。感情の人なり。されば、かの佛像師が、賤しき多くの木片を携へ寄せ、これを種々の形容に刻みあげて、色彩と金銀の箔とを施し、しかも自らこれに頂禮歸命して有難がる如く、天才は己が天賦の豊裕富濃なる想像力により、自ら種々の幻影を作りて、あり

もせぬ種々くさ〴〵の美質長所を當の目的物なる我が戀人に歸し、その持たざるものをも尚ほ持てるが如くに思ひ、如來尊像の脊に負はせ給ふ如き燦爛たる榮光を以て、之れが周圍を取巻かしめ、獨り免許の難有味を加へ、自ら飾りたてたる想像の美に自らうれしがりて、その女をば此上もなき佳人の如くに思ひなし、以て一種の假象を拜崇するに至る。是に於てか、勢ひこれに熱狂せざるべからざること、世間の滔々たる凡才が、そのありのまゝの眼を以て、ありのまゝに觀たる女人に於けるが如くなし能はざるや必せり。等しく是れ同一の戀人なるも、凡才には一の美を以て臨み、天才には十倍の美を以て現はる。その、之れに對して熱中するの度の、自らにして異るものある、問はずして知るべきならずや。加ふるに。天才の特徴とも觀るべきは、カーライルもいへりし如く、その眞摯なるところにあり。されば、滔々たる凡才の如く、事を生半可に處する能はざるの性情ありて、暫くの後たとへ冷却し、又これを放棄することありとするも、一旦鋤を取れば決して後を顧ることなく、行きつまりの所までは、全心全力を擧げて思ひを進め、また事を計るなり。是れ天才の士が、戀のことの如きにありても、熱狂逐げずんば止むなきの慨ある所因なり。ギゾーいへることあり『凡才とは、糸のもつれたるを見るも、自ら之を直ふせんとするの心なく、平然として觀過し去るも、英雄とは、糸のもつれたるを見れば、そのまゝ之を棄て置くに忍びず、直に手を動かして之をほどき整ふるに非ずんば、遂に止む能はざるが如き人物なり』と。移して以て、天才の戀に熱狂する所因を説明するに足るべし。

此くの如くにして、天才とは、戀に熱狂するものなるが故に、その狂熱の迸るところ、自ら詩歌を爲し、世界は即ち其惠みによりて潤ほさる。げにや、天下に詩あり歌あり、しかも其秀逸なるものは、この藝術の天才が、しかく戀に熱狂するの賜物なり。又戀愛の眞味と其福音とは、この詩歌の餘徳によりて、地に住む子等の間に宣傳せられ、その甚だ外道に陷り易きものなる戀愛をして、絶えず神聖麗潔の觀あるものたらしむ。天才や、まことに戀愛の秀でたる法敎師なりと言はん哉。

（以下次號）

私生兒

上

佛蘭西　モウパッサン作
文學士　中目生　譯

正午の鐘は鳴り、學校の門は開き、悪戯盛りの兒童等は、我を先にと爭うて出た。されど彼等は、常例の樣に、散り分かれて、晝食に歸らうと爲ず、二三歩行ては止まり、止まりては又た歩き出だし、あるは四五人群をなし何かひそ／＼私語き合うて居る。外ではない、今朝ブランシヨットの息子シモンが始めて學校に來たからである。小兒等は是迄、吾家で度々ブランシヨットの噂を聞いて居た。婦女共は彼婦人ブランシヨットに對して、陽には相當の禮儀を盡して居つたけれども、陰では彼婦人に對して酷く輕蔑の意を表して居つた爲めに、其子兒等も知らず／＼の間に影響を受けて居つたのである。

然し小兒等は未だシモンの事は知らなんだ。是といふも、シモンが餘り出歩きせず、街に出て、馳回はるとか、河端て遊ぶとか言ふことがなかつたので。夫れで小兒等も餘り彼を愛さなかつたのである。今や十四五歳になる餓鬼大將は如何にも物知顔に口を開いて話した、「お前はシモンを知つとるだらうなー、あれは私生兒だよ」この言葉は面白半分不思儀半分で此等の悪童共に歡迎せられたのである。

今シモンは學校の門を出て來た。彼は七歳か八歳位である。彼の顔色は少し青味を帶び、身裝は奇麗ではあるが、何處ともなく内氣でもじ／＼して居る。彼は母の家に歸らうとすると、前言つた小兒等は先程から私語き合ひ、悪戯をたくらんで居る樣な、嫌な殘酷な目付きをして居つたが到々彼を取卷いてしまつた。彼は驚いて迷惑相に小兒等の中央に立ち、どんな目に逢ふ事やら自分には分らない樣子である。すると此秘密を發いた悪童は自分の成功をほこり顔、

「お前の名は何といふ」

「シモンよ」

「何のシモンだ」

彼は窮してシモン　シモンとのみ返答するのである。悪童はすかさず叫び出した、

「人の名といふものは、何のシモンと續かなけりやいかないんだ。シモンと許じや人の名になりやしないのじやないか」

彼れは泣きたくなり、今度で三度目ではあるが、復た

「私はシモンといふのだよ」と返答するの外なかつた、小兒等は笑ひ出した。惡童ば得意になり聲張りあげて

「どーだ私生兒だらう」

暫か程は靜まつて音も無かつた。小兒等は父親のない子、此非常なる、有り得べからざる恐ろしき事實を聞いて、吃驚した。彼等は此世の物では有り得べからざる現象の如くに思うて、一齊にシモンに視線を向けた。彼等は是迄、何故に自分共の母親が「ブランショット」を輕蔑するか分らなかつたが、今になつて始めて分つたのである。

シモンは此間倒れぬ樣にと一本の樹に身を倚せた。彼は取返しの付かぬ災害に遇うた樣に落膽して立て居つた。彼は辯解さうと勉めたけれども、父親のないといふ此恐ろしき事實を何と答へやうか、何と僞つて宜いやら、どうしても思付ないのである。到々彼は顏色土の樣になつていきなりかう言つた

「私は爺樣があるよ」

「ぢや何處に居るンか」

シモンは默つた。彼は何處に父親が居るか知らない。小兒等は復どつといふた。此田舍育ちの小兒等はどつちかというたら動物に近く、恰も鷄の決鬪なぞで、其中の一羽が手を負へば、外の者は死ぬ迄追ひさいなむ樣な、殘忍極まる慾望を懷いて居る。

すると。シモンはその傍に隣家の後家の小兒を見出したすると是れも彼と同じ樣に、何時も母とのみ住居して居るものである。

「お前さんも爺樣が無いんだね—」

すると「私あるよ」

「何處に」

問はれて小兒は大得意

「私の爺樣はな、お墓に居らしやるよ」

賞賛の聲は惡童等の間に傳はつた。彼等は我黨の一人の父か墓に居る事を以て名譽とし、此事實は父なし子の元氣を挫くには屈竟の手段であると思うた。此等の惡童等は、彼等の親共が大概は惡黨で、醉倒れで、盜人で、女房に對しては亂暴であるにも關らず、我身を嫡子でもあるかの樣に思ひなし、段々と寄りつ集まりて、此私生兒を推つぶさうとする勢力である。

すると、彼等の一人は嘲弄的に彼に向ひ舌を出して叫んだ、

「父なし、父なし」

シモンはもう堪らぬ。兩手を以て敵の頭髮を摑み、力ま

かせに敵の足を蹴つたが、無殘にも反對に自分の頰をひどく嚙みつかれた。大騷動である。二人の決鬪者は遂に分けられたが。

シモンは多勢の惡童共の拍手の中になぐられ、肉を裂かれ、倒された。彼か起き上り、殆んど無意識に、手で泥まみれの上衣を拂うた時、或者が

「お前の爺樣に言うて御覽」

此に至りて、彼は穴にでも入たき樣な感情を起した。敵は彼よりは強い。彼等は彼をなじつた。けれども彼は彼等の言葉に答ふることが出來ぬ。是も父親のないといふ事實が眞實であれば仕方がない。氣丈夫に、彼はせき來る涙を暫か程は抑えんとした。彼は絕え入らんばかりの思をした。遂に彼は聲を立てず、身を震はして、さめ〲と泣き出した。然るに敵は非常の悅びである。野蠻人か其與に入つた時と些も變らず、互に手を連ね、彼の回はりに輪を作り、「父なし兒」「父なし兒」と調子を附けて躍り出した。

然るに、シモンは俄に泣止んだ。彼は大に憤慨した。彼の足元には小石があつたが、其を拾ひあげ、有らん限りの力を以て、敵に向て投げつけた。二三人は石に的りて泣きながら逃げ失せた。彼はすさまじき勢で向つたから、敵は非常に恐怖した。彼等はちり〲ばら



（歐洲貧民窟の兒童）

ばら逃げ失せた。多勢の臆病者が一人の絶望の極に達した決死の者に向ふ時は、常に此通りである

跡に私生兒は獨り殘りて居たが、彼等は村端の方へと歩を向けた。彼は何事をか追想して心の中に大決心を起したのである。即ち身投をして死なうとしたのである。

彼は實に八日許前に、一人の乞食が文なしに成つて、身投して死んだ事を思ひ出したのである。シモンは其死骸を引き上げた時に見て居たのである。實に其やつれはてたる男が身には不潔の衣物をまとひ、容顏は醜かつたが、其沈着な風、青白い頰、長い鬚、開いた眼には如何にも心の平和を示し、小兒の幼心をいたく動かしたのである。一人は「もー死んだ」といひ、又一人は「もー今ぢや幸福な者だ」と言うた。シモンも亦此乞食の樣に身投をしやうとしたのである。乞食は金が無かつたから、彼は父親がないから、

斯て彼は川の縁近く迄來つて、水の緩る〳〵流れるのを眺めた。魚は幾つとなく透き通る樣な流れの中を泳きまわり、時々は水面に躍り出て、水面を縫うて居る小虫などを捕へることもある。彼は是を見て居る中に、涙も遂に乾いた。魚の遊ふ樣は餘程彼の氣に入つたものと見える。然し風が颯と吹いて來て、周圍の樹の枝を暫くの間鳴らしては遙か彼方に消え失せる度毎に、「私はとうさんがないから身投げするのだ」といふ考は一層鋭く彼の胸に起つたのである。

今日は餘程暑い日である。天氣はほがらかである。程よい日光に芝草は暖まり、水面は鏡の樣に輝いて居て、シモンは泣き盡した後の事とて、何となく心が穩に、ぼんやりとして、草の上に日光に照らされて、眠りたくつて堪らなくなつた。

すると一匹の小さな蛙が足元から飛び出した。彼は捕へ樣としたが、逃げてしまつた。彼は追うたが三度迄も續いて捕へ損ねたが、到々彼は後足の端をつかまへた。それから此小動物が逃げやうとして焦心る樣を見て、微笑を漏らした。蛙は足を縮め力をこめて一息にそれを延ばし、棒の樣に堅くなした。それから眼を眞圓くなし、前脚の蹼を以て、手で空を切る樣なまねをした。是を見て小兒は木片に糸を附けて、引けば小さな兵隊が動く樣に出來て居る玩弄物を思ひ出した。それから家の事を思ひ、夫から母樣の事を思ふと、非常に悲くなつて、又泣き出した。彼の手足は震え出した。彼は跪いて眠る前にする樣に、祈りを始めた。が、全身

を押つぶす樣な壓力で、烈しくせき來る涙にむせんで、祈を終迄續けることが出來なかつた。彼は何を考へる事も、周圍を見廻はすことも出來ない。唯さめ〲と泣くのみである。

突然彼は肩の上に重い手を掛けられ、大きな聲で問ひかけられた

「小僧さんどうしてお前は左樣悲しいのか」

シモンは振り向いた。丈の高い、鬚の生へた、黒い髮の職人が柔しくも彼れを注視めて居つた

シモンは目や咽に一ぱい涙を溜めて

「私はとーさんがないからつて、私を打ちましたよ」

男は笑ひながら

「何だえ、誰だつて爺樣が一人はあるだらうが」

小兒は苦痛を忍んで

「私は無いんだもの」

其處で職人は眞面目になつた。彼はブランショットの子だといふ事が分つた。又自分は近頃此地に來た者であるけれども、其話は一通りは聞いて居つた。

「おい、心配するなよ。私と一處にかーさんの處へ歸らうぢやないか。其中にとーさんが出來るだらう」

男は小兒の手を引いて、二人は歩み出した。男は獨りで微笑んだ。それも其筈、聞けばブランショットは此邊では美人の中に數へられて居る位であれば彼も其家に行くのは嫌では無かつたのである。彼は恐らく心の中では思うたらう、若い時に人に穢された程であれば未だ色香は衰へないであらうと。

彼等は遂に一つの清潔な白塗の家の前に達した。小兒は「此處よと」言うて直ぐ

「かーさん」

と叫んだ。一人の婦人が顯はれた。職人は俄に微笑を止めた。今は此青白い婦人と話す者は無く、又婦人は一度男を内に入れた爲めに、恥を晒らしてからは、其戶口を嚴重に守るといふことを彼は知つて居つた。彼は恐る〲帽子を手に持つて言うた

「あのお主婦、あなたのぼつちやんを連れて來ましたよ、も少しで川にはまる處でした」

シモンは母の頸にすがりつき、泣きながら

かーさん私は身投しやうと思うたのよ、

おとーさんがないからつて打たれましたから

若き婦人の顏は一時に朱を流した、口惜しさは骨髓迄も徹し、小兒を確乎と抱きしめた。小兒の上に涙は雨と流れかゝつた。男は痛く心を打たれ、去るに去られ

ず、立止まつた。すると、シモンは彼に向ひ
「お前さん私の爺様になツておくれ、ねー」と言うた。
是れに對して、誰も口を開く者はなく、靜まり返ッて音もしない。
フランショットは默つた儘、恥らひて、双の手を胸に當て、壁に倚りかゝッた。小兒は何の答もない者だから復言うた
「お前さん、嫌なら私は身投げするよ」
男は戯れと思ひ笑ひながら
「よいとも〳〵」
「お前さん名は何う言ふの。他家の子供に聞かれたら言ふから、教へておくれ」
フィリップ」と男は答へた。
シモンは此名を能く記憶せんとて、暫く無言に考へた
それから安心して手を伸し、
「もー大丈夫だ、フィリップさん、あなた私の爺様だねー」
職人は小兒を抱き起し、兩の頰に押當てゝ、それから急いて大股に逃げ去つた。(接後)

社會教育の機關として寄席の配置

鹽原の山中にて　零翁

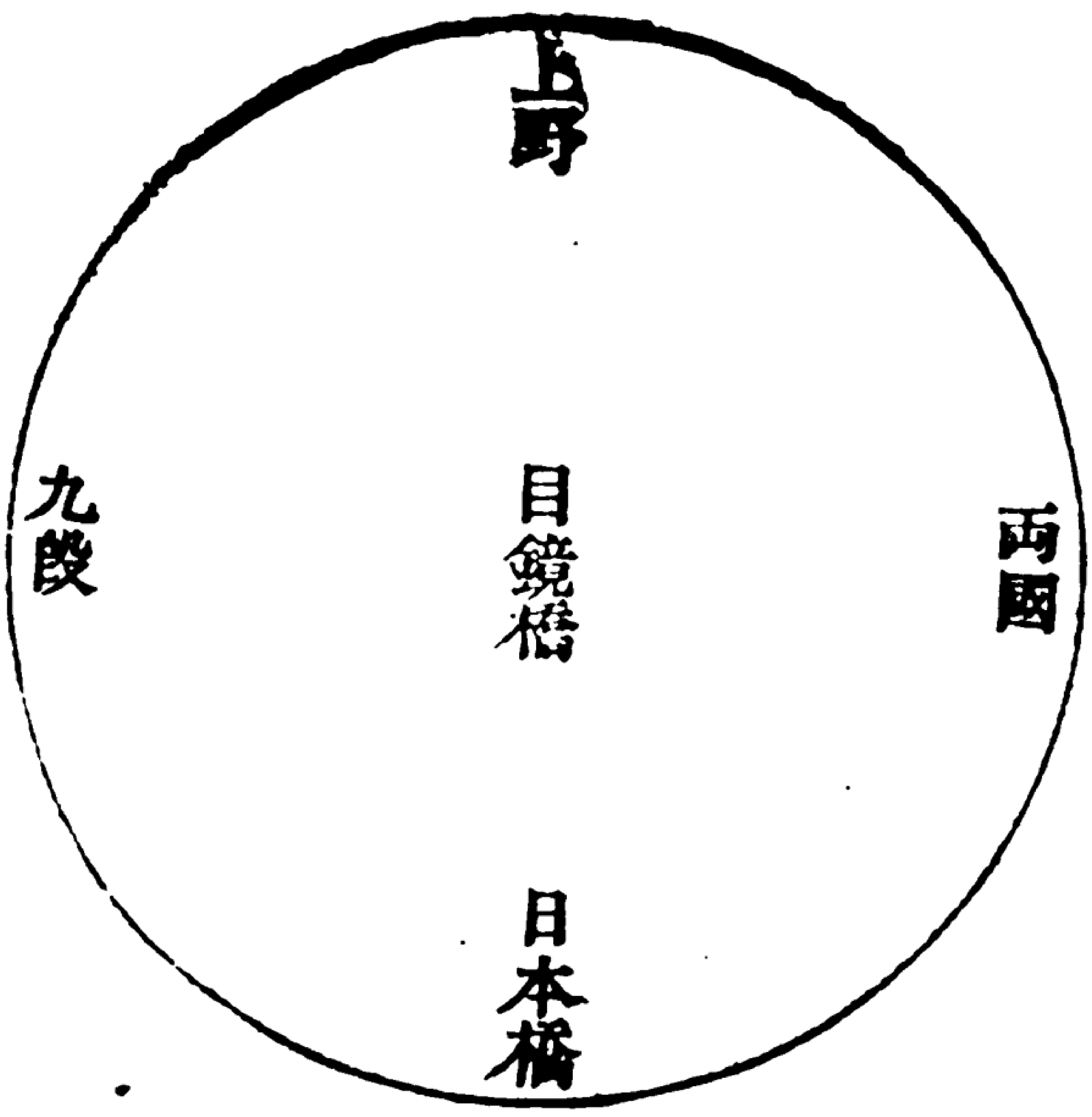
市民、特に年少の市民を娯樂の側より教育する機關は何が有るか、歐羅巴の一骨董店にも劣れる唯一ツしかなき博物館、獅子一疋すら居らぬ動物園、植半の生洲より數の少き水族館、ソレカラ簡易圖書館、通俗講談會場、音樂館、運動場これらは悉く無くてはならぬものであつて而も皆無である。只有るは演劇と見世物小屋と寄席計りで、ソレモ不健全なる感化を與へる分量多きに過ぎ、改良を要するものゝみである、今此三種の中最も平民的娯樂として歡迎せられ且つ其數の多き寄席に就て暫く語らうと思ふ。

山中消夏のつれ〳〵、試みに東京の寄席なるものが如何なる方面に數多く分配されて居るかを研究したが、本月より代る寄席の案内や其他二三の材料で調べた結果市内全躰に百二十七の寄席があることを發見した、勿論警視廳の統計では三十二年末に百五十三の寄席が現はれて居る、其後増すとも減ずることでは無ひ、併

し此二十七の差は或は休席或は名計りにて實際毎日毎夜開塲せるものは百二十七或は三十を出でないのである。

此百二十七の寄席は市內に満遍なく一樣に配置されて居るかと云ふに決してソーデはない、お役所は麹町に新聞社は京橋にとそれ〳〵其の大多數が纏つて居る樣に、寄席にも其集まりがある、

試みに神田の目鏡を中心として九段の坂上までを半徑とし、東京地圖の上に圓を描ひて見る此百二十七の寄席其四十三個までは此圖中に包括せらるゝ、而も此圓形中の約四分の一は丸の內となるから他の四分の三の圓中に包括せらるゝ、ザット附分量で東京全市面積の八分一中に寄席全數の四分の一強を包括するのである。



則ち神田の全區と本鄉下谷淺草日本橋麹町小石川の一部分の間に集まれる寄席其塲所と其名を擧ぐれば

立花亭	神田通新石町	落義
和泉亭	仝和泉町	義浪
宇田川亭	仝	講
聚樂亭	仝小川町	講
市塲亭	仝美土代町	浪
小柳亭	仝小柳町	講
常本亭	仝平永町	講源
日本亭	仝五軒町	落義
升田亭	仝三崎町	講
若竹亭	本鄉東竹町	義落
千歳亭	仝春木町	落浪
菊岡亭	仝根津清水町	義浪
本牧亭	下谷廣小路	講
寶集亭	仝竹町	講
白梅亭	神田連雀町	落講
小松亭	仝和泉町	浪
小川亭	仝小川町	義
新聲館	仝表神保町	義源
染川亭	仝今川橋	講
松本亭	仝今川橋	浪源
松ヶ枝亭	仝お玉ヶ池	浪
川竹亭	仝表神保町	義落
三市亭	仝三崎町	浪義
岩本亭	本鄉四丁目	講
新市塲亭	仝菊坂町	浪
吹拔亭	下谷池の端仲町	義浪
鈴本亭	仝廣小路	落
若松亭	仝竹町	浪

久本亭	全竹町	落義	松月亭	淺草向柳原	講
三福亭	淺草新福井町	浪	立花家	日本橋米澤町	落義
福本亭	日本橋兩國	講	木原亭	全通一丁目	落
常盤亭	全馬喰町	講	大路次亭	全葺屋町	落
伊勢本亭	全瀨戸物町	義落	末廣亭	全人形町	落
龜扇亭	仝蠣殼町	講	豐久亭	仝蠣殼町	講
宮松亭	仝茅場町	義落	富士木亭	麴町九段	義落
初音亭	小石川初音町	義落			

義(義太夫)落(落語)講(講談)浪(浪花節)源(源氏節)

東京の寄席中其覇權を握れる所謂「睦五軒」と稱する最有力なる日本橋の宮松亭、神田の立花亭、本郷の若竹亭、兩國の新柳亭（市區改正にて取拂はれ未だ新築せず此表中にはなし）淺草の東橋亭、其四軒迄は此圏中に在り、且つ建築規模の最大なる若竹、川竹、新麗館、宮松、日本、久本、立花等の寄席も悉く此圏中にあり、從つて客足の最も多き寄席も此中に包含せらる、則ち東京に於ける寄席の中心である

此中心は亦一方に如何なるものゝ中心であるか、忽ち左の結果が現はれて來る

東京の寄席は商業の中心よりも學校下宿屋の中心に多し

東京の寄席は勞働者細民の中心よりも學生の中心に多し

市內の下宿屋は最近の統計一千六百三十一軒其中一千〇八十六軒まで、神田、本郷、麴町、日本橋、小石川、下谷、淺草で受持て居る、

市內の學校全じく目鏡を中心として圏中に收めらるゝもの

帝國大學	高等學校	高等商業學校
高等師範	全女子師範	全附屬高等女學校
法學院	明治法律學校	和佛法律學校
專修學校	開成中學	城北中學
錦城中學	神田中學	順天中學
大成中學	濟生學舍	物理學校
東京商業學校	航海學校	外國語學校
國民英學會	京華中學	國學院
理財學校	國語傳習所	獨逸協會中學
裁縫學校	主計學校	政治學校
體育學校	至誠學院	齒科醫院
簿記學校	經濟學校	曉星學校
正則英語學校	國語傳習所	槐陰學館
跡見女學校	大八洲學校	青年夜學校
東京府高等女學校		

右は特に寄席の數と同數丈けを算へたのみ、マダ〳〵學校の方は數多きことにて市內諸學校の半數以上學生

の數から云へば、都下五萬の學生、其の三万五千までは尠くとも此圏中に生活して居るのである
學生と寄席の關係は此神田本郷の方面に留まらず、徒にも其類例を示して居る、則ち市內學生の多きは神田本郷に次て芝區で、下宿屋の數も本郷の四百四十一軒神田の三百四十軒に次ては芝の二百廿六軒が最も多き數である、此學生と下宿屋の本郷神田に次げる芝區は寄席の數も亦一區に十六個所を有して神田區が一區に十八を有するに次ぐの結果となつて居る、
年少學生の娛樂機關として一日も早く寄席の改良を促がし併せて他に娛樂の新方面を供給するは目下の最大急務であることはこれまで書き來つた上は最早多言を要せぬことであろう、

岳頂百嘯

藍川居士

◎富士は東海第一の高山なり、然れども我一日の勞を以て、之を脚底に致すべし、若し十年廿年拮据修養の功を積まば、天地の大も之を方寸の中に收むること何の難きことあらん、而して我能はずと云ふものは、修養の功足らざればなり。

◎僕曾て甲州に遊び、笹子御坂等岳腰の諸小嶺を過ぐるに、足疲れ胸悸す、而して岳頂に登るに比較的疲勞少し、こは初めの用意異なればなり、之を侮れば蟻垤も千丈、兵法に曰く、小敵と見て侮ることなかれと、世に處して事に當る亦然り、

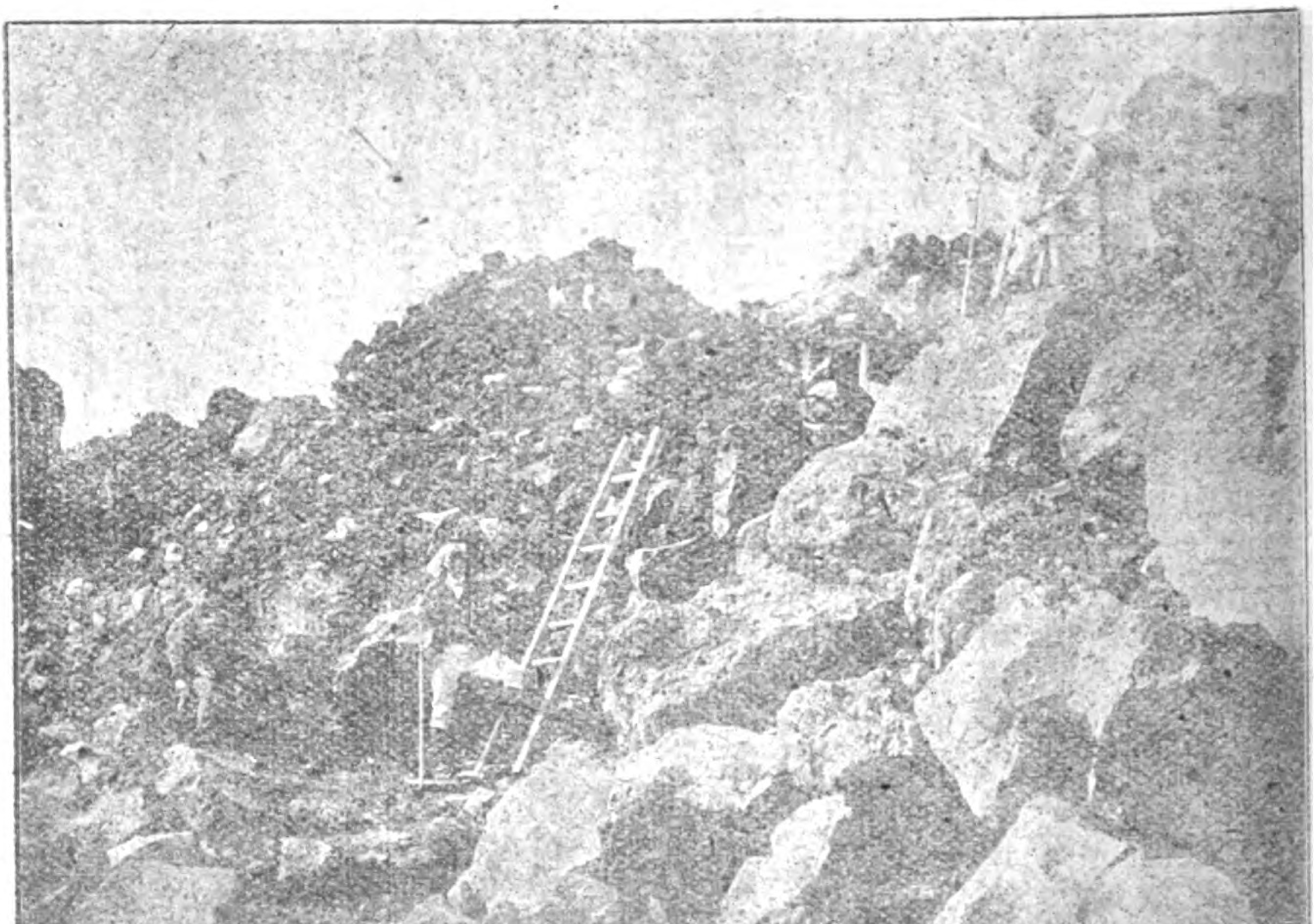
◎富士は三州に蟠踞して、其高サ三千七百八十五米突、筑波は其三分の一に及ばず、而して世人一口に富士筑波と併稱す、筑波豈其敵ならんや、蓋し筑波は平野曠茫、四周山無き處にあるがためなり、人の世に處する其位地宜きを得れば、駑鈍の材亦騏驥と併行す、

◎岳頂に踞して太古不融の雪を嚙み、浩々たる天風に嘯く時は、功名富貴財利女色等、人間一切の紛々擾々たるもの絲毫も念頭に繫ること無し、彼の世を憤り人を怨みて齷齪止まざるもの、須らく岳頂に登りて胸中の塵を掃ふべし、

◎四海の富を有ちて萬乘の尊に居る、人間の快樂之に過ぐること無し、然れども秦皇漢武は蓬萊方丈を慕ふて、夢寢之を忘れず、終に其志を果さずして死す、僕匹夫を以て蓬萊の神山に登り、秦皇漢武の欲して得ざる快樂を得たり、亦南面の尊に傲るべし、

◎古來富岳を詠ずる詩歌に傑作無し、人間の才未だ神仙の靈境を寫すに足らざるなり、石丈山の一絕人口に膾炙すれども、紈素と云ひ柄と云ひ白扇と云ふもの、拙劣なる地口に過ぎず、

◎青松白沙の邊、金屋に阿嬌を藏し、青簾畫舫の中玉壺に醇酒を盛り、以て銷暑の策を得たりとする者は、未だ共に登岳の快を語る能はず、かゝる奴輩は一時の暑を忘るゝが如きも、心腸日に腐敗して、天下の大事に任ずること能はず、然れども今日得意と稱するものは滔々として皆是なり、國力の委靡振はざる亦宜ならずや、



富士の頂上

◎野中氏の寒中滯岳は人の稱して狂となし好事と爲す所、然れども氏が幾多の困難を犯して、妻子身命をも顧みざる氣慨は賞すべし、況んや其學理上より打算して、高山測候の已むべからざるを說くをや、氏の志にして成就せば、學術經濟等吾人の利益幾何ぞや、

◎野中氏の事業は到底一身の心力を以て成功すべきものにあらず、幾多の資財と幾多の助手とを要すべし、故に富豪紳士は其財を義捐し學生壯士は其助手たるべし、然れども帳中賤妓に戲れ燈下骨牌を鬪はす我邦の紳士書生に之を望むは到底無益ならん、

◎堂々たる官制を以て組織し、幾十萬の資財を費したる、中央氣象臺の天氣豫報は、當らぬもの十中八九、岳麓の土百姓が雲行きを見て、陰晴を豫言するに及ばざること遠し、

◎野中氏曰く、今日氣象の原因として不明なるもの多き所以は、全く其發作する空氣上部の有様を探究し得ざるにありと、こは一般氣象學者の確認する所なれば、高山觀測の必要は野中氏を待たずして知るべし、

◎南米のエル、ミスチーは富士より高きこと七千尺、佛國のモンブランは富士より高きこと四千尺、而して共に觀象臺を設置す、然れば我富士山に氣象臺を設置することは國家事業としても之を完成すべきなり、何ぞ獨り野中氏の手に委かして止まんや、

◎明治二十五年三四月の頃、一外人は積雪を踏で五合目まで登り、剛力がこれより上は登り難しと辭して歸りしに、單身險を冒して攀ぢ登り、岳頂まで達せしや否や確かならざれども、歸途は負傷せし躰なりと云ふ、これ野中氏に先つこと三年、外人が何事にも素早きこと此の如し、

◎今日でも登岳者は一種の迷信者を除くの外は、大抵外國人、書生連にて、華族紳士などは絶無なり、先年黒田櫻谷侯が登りし如き異數と云ふべし、侯が同族中にありて傑出の評ある、此一事を以ても知るべし、

◎天風巖角に吼え、雷電脚下を繞り、雲烟蓬勃、變幻窮り無き時に、岳頂に在つて科頭箕踞、瞑想一番すれば、山河草木一切成佛の觀あり、

◎哲學者が頭を書卷堆裡に沒して、十年瞑想を凝らして解決を得ざる問題も、岳頂に至らば豁然悟る所あるべし、歴史家が英雄の事迹を論じ、武田は奸なり上杉は猛なり今川は愚なり、北條は迂なり、徳川は雄なりと、萬言の評を費せしものも、岳頂より俯瞰すれば、掌大の地に蠢々たりしを憐みて、啞然大笑すべし、

◎殊に研究の材料多き者は氣象學者、星學者、地質學者、宗教學者、造化は此名山を作りて、豫め吾人書生の試驗場となせり、學生たる者螢雪の餘暇必ず一たび岳頂に到れ、

◎司馬遷は名山大川に遊びて文章の氣を養ふと、富岳の頂に長嘯するもの豈唯文章の氣を養ふのみならんや、

思潮

工場取締に就て

「萬朝」記者

工場取締に就ての論議やふやく大ならんとし、遂に力を被傭者に同情を濺げる萬朝は曰く

我國工場が肺病の養成所たり傳播所たるは今更の事に非ず、又鐘淵紡績會社の事のみにもあらず、現に彼砲兵工廠の如きすら多くの肺病患者を出せるは、吾人の久しく聞知せる所也、我當局が其會社よりの屆出を待て、而して後ち初めて其搜索、其取締に着手するが如きは、迂の極也、而して又不親切の極也

且つ夫れ工場取締の急なるは、獨り衛生の上のみならず、又其工場設備の危險なるに在り、去年愛知の某機織工場に於て三十人の女工が一時に燒死したるが如きは、其一例也、彼等は不時の災異に對して何の保護をも與へられず、何の準備をも設けられず、彼等の境遇は常に薄氷の上に在ると同じからずや、否な獨り工場の危險なるのみならず、亦其賊虐の甚しきに在り、多くの女工が其苦痛に堪へずして、屢ば逃亡を企て、甚しきは即ち自殺を企つるに至る者少からざるとは、先頃本紙に記載せる信州諏訪の工女の慘状に徴して知るべし、此慘状や實に諏訪一地方に限れるものに非ずして、全國の工場大抵是れならざるはなし、唯だ彼等が金なく力なく教育なきが爲めに、之を天下に公にするを能はずして泣寢入るが故に、世人の注意を惹かざるのみ、而して吾人が尤も看過し難きは、十三四歳以下の少年少女を誘拐して、十二時間以上の過激なる勞働に服せしむるに在り、其結果や彼等の多數は久しからずして夭折するか、然らざるも不具廢疾とならざる者は殆と稀也、故に歐州諸國に於ては、幼年者の使用には皆な極めて嚴重なる制裁を設けざるはなし而も我國に於ては、殆と何の制裁も何の取締もなく、各工場主をして公然事實的殺人を行はしめつゝある也、是れ當局の尤も注意せざる可らざるの點也

慈善家は貧民の食を得るを妨害すべからず

「東京朝日」　博士　田口卯吉氏

こは前論に反しやゝ同情を製造主に寄せ勞働時間の減少を非としたるもの曰く

余輩は已むを得されば巨大なる救貧院を建設して天下の貧民と云ふ貧民は凡て其の中に救養せんことを望む、然れとも貧民にして自ら其業に衣食することは更に大に望む所なり、何となれば此の場合に於ては此の人は實に貧民にあらずして獨立獨行の人なればなり、

余輩は大なる製造所を以て大なる救貧所よりは有効なるものと見做すものなり、余輩は製造所に於て就業せる婦女少童に一人の貧民なきことを保護するものなり、彼の婦女が乳飲兒を背負ひ四五歳の小兒を傍に置きながら「マッチ」製造に從事するを見よ、又七八歳の兒女が其の傍にありて母氏の勞働を補助せるを見よ、誰れか惻隱の情を發せざらんや、

然るに此の場合に於て惻隱の情を發するものゝ中には、往々婦女をし

て八時間以上勞働せしむるは慘酷なり、八歳以下の小童をして就業せしむるは無情なり、宜しく之を嚴禁すべし」

との結論を發するものあり、然らば則ち此の慈善家は此の婦女小童に對して自ら貨幣を給與するか若くは製造主をして賃銀を增與せしむるまでの政策を執るかと云ふに、決して然らざるなり、唯々單に其の勞働時間の長きを惱み之を禁じたるに止まることなり、

此の如き政策は果して眞に慈善的なるや否や、余輩は彼の婦女小童は決して好んで勞働するものにあらざるを知るなり、

彼等が勞働に從事するは必ず必ず已むを得ざるもののあるを知るなり、彼女の家族中には必ず長き病に苦めるものあらん、然らざれば彼女は近頃其夫に死別れ、數多の遺孤を養ふ能はずして遂に至りしならん、彼女が製造所に入りて賃銀を得るに至りしは、彼の女に執りては實に地獄に佛なりしなり、彼の女は十分に勉強して多額の賃銀を得て其衣食の設に供せんことを希望すべし、然るに慈善家は之を禁じて曰く八時間以上勞働するは憫然なり宜しく之を避すべし、賃銀は得ずとも可なり」

と云ふに至りては非常の迷惑を感ずるなるべし、勞働時間を減縮すれば其の賃銀の減少するは經濟世界の通理なり、世間或ひは勞働時間を減縮するも其の賃銀は依然舊の如くなるべしと想像するものあり、歐米の勞働者が常に八時間勞働を呼號する所以のもの皆此の妄想より發せざるなきなり、彼等は「同一の賃銀なれば時間の減縮せんことを希望するなり、彼等は同一の時間なれば賃銀の增加せんことを希望するなり、然れども賃銀の高低は經濟の理に基くものなれば、人力を以て左右し得べきものにあらず、勞働せざれば賃銀を得べからざるは經濟の理なり、之と同く小時間の勞働は小賃銀を得べきものたるも亦經濟の理なり、如何ぞ此の憫むべき婦女が多く勞働して巨額の賃銀を得んとするを遮りて之をして飢餓に瀕せしめて可ならんや、

蓋し眞正の救貧策は婦女小童をして其の職を得せしむるの他に一策なきなり、彼等が集合して其の業に就くを見るときは之を憫むは人情の常なりと雖も、彼等の其の職を得ざるは一層彼等の困窮する所なることを思はざるべからず、彼等に對して同情を寄せながら、却て之をして貧困に苦しましむるは無情の甚しきものなり、

疑ふなかれ、經濟世界には一奇法なきなり、製造主と勞働者とは自然に調和するものなり、人力を以て之に干涉するは實に兩者を苦むるものにして而して其の痛苦の度は婦女小童に於て最も甚しからざるを得ざるなり、蓋し日本今日の現狀に於ては余輩は製造主は勞働者より困難せりと云ふことを憚らざるなり、紡績會社は如何、殆んど休業せるものにあらずや、鐵道會社は如何、殆んど破產せんとするものあるにあらずや、其の他如何なる會社と雖も、凡て困難せざるものなきなり、然り而して賃銀の狀況を調査せよ、近年の騰貴は實に著しきものあるにあらずや、此の時に當りて萬一勞働時間を制限するが如きことあらば、余輩は紡績、鐵道其他の會社は非常の困難を蒙りて、而して結局勞働者も其餘弊を免れざることを信ずるものなり、是れ決して勞働保護の方法にあらざればなり、

故に眞正の救貧法は賃銀をして騰貴せしむるに如くなきなり、時間を短縮するが如きは徒に製產を混亂するに過ぎざるのみ、製造主も勞働者も共に迷惑するものなり、貧民に對して同情を寄するもの、宜しく眞正の救貧法の那邊にあるかを知れ、

黨人の修養

「二十世紀」

志賀重昂氏

各政黨の黨報及び機關新聞は徒らに其黨の從屬者に過ぎずして、遂に其の黨員を指導し訓練し教育し以て其の品性を高め其の識力を開發する能はず各政黨員の遊說員は地方黨員に對し「御縣の南部は反對黨の所有に歸するを以て、幸に諸君の盡力に依り、南部にさへ黨勢を擴張するを得ば、御縣は擧げて吾黨の所有に歸すべし、何卒滿腔の御盡力を御賴み申す」などゝ、言葉巧みに懇親會の席上に演說するのみにして、遂に來會の黨員を指導し訓練し教育せんとするの抱負もなく亦た其の品性を高め識力を開發せ　とするの念慮もあるなし、要するに遊說者は地方黨員の阿諛者にあらずんば煽動者に屬し遂に之れが教師となるもの甚だ寥々たり、各政黨の智能も識力も依然として十數年前に異らず些も進步化醇の兆候なきもの何すれぞ怪むに足らんや。既に然り、此の如き智能と識力とを以て、假令政黨內閣を樹立するとなすも、畢竟何にをか爲さんとするものぞ、政黨員動もすれば輙ち「藩閥政府の役人共何にをか爲し得んや」と呼號し、而かも政府の官吏や智能に於て識力に於て今の滔々たる政黨員に優過するあるを知らずや、憲政黨內閣の組織さるゝや黨員の官吏たらんことを希望せしもの甚だ多し、而かも百中の七十は府縣知事たらんことを欲し、殘る三十は內務省、遞信省、農商務省の官吏たらんことを希ひ外務省の如きは强ゐて任官せよと勸告するも之れに應ずるものなし、是れ外務省に官吏たるものは少くも二國以上の外國語を自在に使用せざるべからざるを以てのみ、而して其各省に任官したるものとても、行政上の智識、技術上の智識共に從來の役人に如かざるもの多かりしは事實なり、是れ要するに各政黨の黨報及び機關新聞は其の黨員の教師となるの抱負なく、遊說員も亦た教師たるの抱負なく、而して黨員も亦た自から其の足らざるを悟りて修養するの心懸けもなく、日新の學問、日新の智能を博するの方便もなく、希望もなく、依然として十餘年前の品位と識力とに沈溺するを以てのみ、此の如くして國民の信望を採り國民の畏敬を博せんとするも木に緣りて魚を需むるが如きのみ、



子弟を東京に出す勿れ

「太陽」

文部大臣　菊地大麓氏

山形に於ける聯合教育大會席上中學校に就てと題せる演說中の一節に曰く

それからモウ一つ幸ひな機會でありますからして地方の父兄に申したいと思ふのは少年を東京へ出すことでありまする然るべき監督者があつてさうして東京へ出すならば宜しうございまするけれども然るべき監督者もなく唯東京へ子弟を押放つて出すと云ふことは是はモウ殆んど百の中九十九迄は其子弟を誤るものであると私は考へまする殊に婦人を東京へ出すと云ふやうな父兄もありまするけれどもさう云ふことは實に危險極ることでありまする外國あたりに於ては未成年者を然るべき監督者のない所に押放つて出すと云ふやう

なことは決してないことです此事は日本の父兄は一向恐れずやるやうで父子弟も出るときには決してさう云ふことはない十分志の堅い積りで出て行きますけれども中京の如き都會に出ると云ふと誘因が非常に多いので終に其ために墮落して仕舞ふと云ふことは先づ百の中九十九迄と云つても決して多過ぎることでなからうと思ひますそれ故に私は地方からして東京へ子弟を出すと云ふことは然るべき監督者がなければ決してするべきことでないと云ふことを斷言するのであります

常識養成の欠乏

「教育時論」　記者

世間に立ちて、事務に從事せんとするものは、最も常識に富まんことを要す。一種專門の業に從ふものと雖も、相當の程度までは普遍的知識を有せざるべからず、然るに方今の教育は、常識を養ふには不適當にして、餘りに專門的に過ぐるが如く、即ち年々學校を出づる、多數の學生は、多くは極めて一方に偏したる趣味を有する、いはゞ不具的人物にして、その專門の知識に對しては、頗る優秀なるものありと雖も、その知識たる極めて狹隘なるものにして、專門外の方面に於ては一個の國民として、一人前の知識を有せざるもの多しといふも、蓋し過言にあらざるべし。

而して、此の如きは、亦その專門的知識に於いても、多大の進歩を期すべからざるものにして、殊に應用を主眼とする科目の如きに至りては、到底十分なる成効を望み難し、分業も極端になれば、却て分業の利益を失ふものなれば、相當程度の普遍的知識の養成は、これを忽諸に付すべからざるなり。熟々方今の有様を觀察するに、中學校の教育は、未だ完全なる中等社會の人物を養成するに適せず、大學の教育は、深邃なりと雖も、餘りに學者風に傾き過ぎたり。今日學校教育を卒へたる人物は、社會に出で他の方面の人物と交際するに適せず、不具なる頭腦を以て、徒に世間を管見する結果、愉快なる生活を遂ぐること能はざるに至る弊も尠からざるなり。想ふに或る事業を爲すに必要なる人物は、一部の極めて狹隘なる知識に深き學者にあらずして、廣く多方面の知識を有する人物なるべし。吾等は今後國民教育が國民の生活に必要なる常識を養成するを怠らず、尚一世の標準を進めて漸々國民の常識を高むる方法を講ぜざるべからざる必要あるを信ずるなり。

大器の世に容れられざる所以

「社會」　記者

第一、實際に容れられざる者。大器に必ずしも世に容られざることなきも、往々にして實際社會が容れざりしものあり、其理想、信仰の高き到底當時の社會と調和し得ざるが爲めなり。

第二、黨派上より容れられざる者。果して當時の社會と其人と調和せざりしや否やは、未定問題にして、唯反對者の爲めに排斥せらる。夫れ唯反對者なり、必ずしも社會と認むべからず。

第三、社會が特に排斥したる者、輿論之を非とし、殆んど其見地を均ふして排斥し、其地位を空ふするに至れる者なり、之を大別して(一)は社會の輿論に惑ひて個人が代表的に排除する如き、(二)は社會の意志を代表せる國家が排斥する之れ法律的なり(三)は國際關係より排斥せられしもの、其他種々あるも重もなるは斯の如けん。

第一には基督、ソクラテース等を例すべく、第二には菅原道眞、井伊直弼、大久保利通等を例すべく、第三の(一)には、小なるも星亨氏或は適

例ならんか、(二)には犯罪者を入るべし(三)には、ナポレオンの如き例とすべし。

吾人の玆に注目すべきは、社會が過者と不及者とを好まずして平均な好むの傾向あることなり、高樹風に當ること多し大器は其當座に於ては好遇せられざる者なり。而して社會制裁なる者も、往々にして此大器を誤解し若くは之を破却し去る事實あり、故に大器は屢々世に容れられざるの事實あるを認めざるべからず。

夫れ眞個の大器を容れざるの社會は、不明、誤解、嫉妬の多き社會なり、未だ理想とすべからず、又一部者流には神の如く尊敬せらるゝ博徒の親分肌の如きも其屢々世に害毒を流す者を跋扈せしむる如き社會は則ち制裁なき社會なり、未だ理想とすべからず、又之を上下より見之を左右より眺むるも茫として解し得ざる如き傑物に對つて不明の爲めに惡しさまに言做し、之をして其力を十分に施すことを得ざらしむる社會は則ち狹少の社會なり。未だ理想とすべからず。

平民の銷夏

「萬朝」　内村鑑三氏

人生は平均三十三四年、長きも百歳に充たず、而して一年は三百六十五日而して夏は其四分の一を占む、故に若し夏は之を避暑に消費して働かぬと定むれは是人生の四分の一を無益に消費するに等し、而も斯人生を濫費するの徒は今の世には甚だ多し。

曰く貴族、曰く紳商、曰く博士、曰く文學者、曰く牧師と宣教師、彼等は皆な甚だしく暑を恐るゝものにして人生の四分の一を避暑場に消費する者なり、彼等が夏を怕るゝは惡魔を怕るゝよりも甚だし、彼等は夏と聞けば何事を措いても山か海かへ逃げ隠るなり。



然れども夏は彼等が怕るゝが如き有害物に非ず、視よ、植物は凡て夏期に於て成長する者なることを、動物の身体も亦然らん乎、夏期の炎熱は確かに動物の躰軀に利益あり、生命は熱にあり、熱を受くるは身体に大に利益なくんばあらず。

かの夏を恐るゝ者を見よ、彼等の多くは冬に至るも多く働らかざるなり、彼等は屢ば避暑場に在て病に罹り、家に歸てより亦醫師に貢を拂ふて止ます、逗子・葉山に於て赤痢に罹りし者多く、須磨、舞子に於て肺病の黴菌に接せし者も尠しとせず、天然の追窮する所となりて、其罰する所となる。

試に思へ、若し日本國の三千餘万の農夫が悉く暑を避けんがために業を廢するならば誰か翌年を支ふるの米穀を産せん、若し一千万の漁夫が暑を恐れて海に漁せざるならば誰か懶族羣の胃の腑に供するに海中の美味を以てせむ、避暑は是れ特別の人が特別の場合に於てのみ爲すべきことなり、今の紳士と稱せらるゝ者が避暑を以て一種の義務の如くに信ずるは、彼等が未だ天然、人生兩ながらを能く解せざるに因る也。

慰めよ、暑中家に在て働く平民よ、汝等は却て天意に適ふ者なり、かの貴族、紳商、宣教師の輩を羨む勿れ、亦彼等を眞似る勿れ、天の職に從

事する是れ休養なり、我等は夏期たりと雖も避暑場に在て僚族と生涯を共にするを要せざるなり。

女子と按摩術

「東京市教育時報」　江原素六氏

小石川邊に文次と云ふ道學者がありまして或豪家の夫婦は深く此の先生を信じてなりましたその豪家に一人の娘が有まして學問裁縫はさらなり茶の湯琴三味線等凡そ女一人前のことは大かた相備へてなりますどうか良縁あらば御世話を願ひたいと申ました文次先生は貴下の御娘子は女子に必用なる芸即ち按摩術をまだ御學びなさらぬと申されたといふことが有ます。

凡そ婦女たるもの或は父母或は舅姑或は夫或は子女の病氣を看護することがありますその時にあたり或は摩擦をいたし又は採み或は敲くことなど苟も按摩の心掛けあらば其看病せらる人は――無上の感覺を起しまして平素餘り中の宜しくなき舅姑も病氣の時には嫁の採み擦りの心地よきよりして其間に云ふに日はれぬ和の情の勃興するものでありますこの時には小笠原流を以て藥の瓶を取扱ふごときは寧ろ寸功はありませぬ

（女子佼藝學校圖案品評會演說の一節）

黒住教の綱領

「人民」　塚越停春氏

塚越氏中國漫遊中同教を研究し其教義を左の如く一括せり

誠を取り外すな。

（生々主眼）活物を捉へよ、陽氣になれ、

（離我主眼）我を離れよ、自然に任かせよ、

（養心法）心は大磐石の如くおし鎮め、

（養氣法）氣分は朝日の如く勇ましくせよ、

（我を離るゝ細目）無欲に成れ、無念に成れ、足ることを知れ、天の御作を大切に勤めよ、阿房になれ、慢心を去れ、人智を去て天に任せよ、取越苦勞をすな、憶病を去れ、嘘をつくな、

（活物を捉へるの細目）善人の罪を作るな、何事も活し上手に成れ、難有がたし、陰氣を去れ、御分心を傷めな、邪■に泥むな、心の角をとれ、怠らず御陽氣をすへよ、下腹で息せよ

（我を離るゝの要言）不足が起たら裸で生れた昔を思へよ、

（活物を捉へるの要言）毎朝〳〵生れ變た心地で日拜せよ、

（神拜の要言）憶病と疑ひが去れば御蔭は顯はれぬぞ、

（活物を捉へるの總括）活物は息する物と言事にて人間は勿論鳥畜類に至る迄天照の神の御神德が二六時中に鼻と口より通ひ給ふ故生きて居らるゝ何と有難く尊い事では御座らぬか

（我を離るゝの總括）迷へば寬寄ると申て、人の心が迷ふ時は其の虛へつけ込んで、惡寬が寄集りて樣々の因果たゝりを致す、油斷はならぬぞ

工女は酌婦密賣婦よりも風俗を壞亂す

「倫理界」　記者

全雜誌記者東京附近の某縣警察署長を訪ひ風俗上の事に就き其地都合の實狀なるものを聞き取りし中の一節なり

當地などで黴毒傳播の媒介として最も恐るべきは此等の娼賣婦ではなく、機織場の女工である。彼等は全く無知であつて、病毒の恐るべきことも知らず、又醫者にかゝつて之を直すことも面倒がる。故にかゝつても其まゝ打捨てゝ居て益々烈しくなる。警察が其れに干渉して健康診斷をやる譯にも行かないから、どうも仕方がない。而して彼等の風儀の惡いことは、實に言語同斷である。その醜體は決して淫賣婦の比でない。警察でも大に之を憂て、色々手を盡して制する工夫をして居るけれども、餘り干渉をすると雇主が苦情を言ひ出す。其れは何故であるかといふと、女工が最も樂として居る所のものは、自由に情夫をこしらへて獸慾を恣にすることが出來るといふ事である。彼等が工場に於て勵で働くのは、此の樂のある爲めである。工場に行て見ると、朝から晩まで、聞くに忍びないやうな不潔な話をして、其れを樂で働いて居る。若し此の樂を奪ふて仕舞ふと彼等は勵で働かなくなる、そこで彼等の淫靡な風俗と雇主の利益とは少からぬ關係を持つて居るのである、だから若し警察が女工の風儀を矯正せんとして、餘り干渉すると雇主が苦情を言出すことになるのである。どうも之には閉口して居る。斯る有樣であるから、彼等は盛んに黴毒を傳播させる。故に當地では、黴毒傳播の媒介者は女工であると言つても宜いのである。雇主の公共心がモー少し發達して呉れなければ、之を防ぐことは出來ぬ。又た風俗の點から言つても、一番困るのは女工である。彼等は耻も何も知らないものであるから、醜體見るに忍びず聞くに堪えざるやうな所行を何處でも構はずやる。風俗の點からいつても酌婦は女工と較ぶれば、餘程増しである。彼等は家の中で隱密に惡い事をやつて居るけれども、今日では外部に醜體を示すやうなことはしない。だが女工に至ては、決してさうでないから困る。



評論

社會時言

外國に於ける日本人の品位

紅水

公使館員又は留學生計りの在留せる國にては大なる失態は聞かざるも、我が勞働者又は無錢學生の多數入り込める米國、特に太平洋沿岸の米國にては、日本人の品位聲價は日々に失墜しつゝあり、會社の募集に應じて目に丁字無き地方の農民、開港場を流れ渡り日本を喰詰めて出掛けたる浮浪の輩、學校の試驗には合格せず國許の父兄には見離されて自暴腹に飛び出したる書生などが大多數を占めて、日本人を代表したるなれば、それも其筈の事なり、

試みに彼等の有樣を見れば、脊丈け揃はぬ名許りの洋服を着けて、頭に帽子を被らず足に下駄を穿ちて、桑港の大道を濶歩するもの、或は物品を買ふに下袴の扣鈕を脱づして胴巻きを取り出し、先方の白人の婦人をして目を掩ふて走らしむるものなど、如何に最負目を以てするも人をして辯護の辭無からしむ、本邦勞働者の新參者は服裝其他に於て或る程度までは其外見は慥に支那人よりも不躰裁なるなり、彼等が白人の多數よりして侮蔑を受くるは又止むを得ずと云ふべし、現に桑港に於て日本人の多數は夜行するに呼子の笛を携へ白人勞働者の石を抛げ或は他の迫害に備ふを見る、これ蓋し彼等卑劣なる白人勞働者が自己の職を奪はるゝを怨む餘り商賣敵きよりするものと云へども、亦日本人自ら品位を保たざるにあるは又爭ふべからざるなり、

近頃布哇に於て本邦淑女の凌辱されたる事件有り、實にこれ我が國辱の大なるもの、當局者は十分其責の歸するところを明にし、かゝる暴狀を再びせざらしむることに力むべし、聞く本邦駐在米國公使の如きも大に日本の爲に本國に對し警告するところありしと、素よりこれ至當の事なり、

只吾人はかゝる事件に遭逢せしと同時に外國出稼の本邦人が今後本國の爲に是非或程度までの品位を保たんことを望む、本邦婦人凌辱事件の如き敢て今回に始まりたるに非ず、昨春ペストの流行時桑港より東部に旅行せんとせる本邦貴婦人の同一凌辱を受けたることゝあ

り、桑港邦人の一問題となりたるも、時偶ま支那事件の爲めに大なる反響を本國には傳へられずして止めり、品位有り教育ある紳士淑女が由來太平洋沿岸の米國にて不快の事情　逢へること一再して止まらず、吾人は今回の事件を機として大に彼等下等白人の無恥暴慢の擧動を懲らしむると同時に、一面在米本邦人に對し、何等かの方法に依り其品位躰面を傷けざる様取捗らんことを警告するものなり、

新聞時觀

社會の風潮は確に一轉換の時機に向へり、特に吾人の祝すべく喜ぶべき氣運を迎へつゝあり、則ち社會制裁力のやゝ增加せんとせることとなり、國民理想のやゝ高上ならんとすることとなり、公義心のやゝ進步せることとなり、宗教を呼ぶ聲のやゝ高まれることとなり、而して特に注目すべきは新聞紙記事のやゝ面目を一新しつゝあることとなり、

(一)、極端なる嘲罵の文字減少す　社會に相當の地位資格を有せるものに向ても、之を呼ぶに敬言を用ひたること無く、一種の綽號を附して恰も道中雲助の言葉の如かりしもの漸次少くなり、個人を攻撃するにも猛々しき極端の嘲罵文字を用ゆること減少せり、

(一)、三面記事の筆鋒多くは懲戒的となれり　軟派記者の艶[illegible]と警察種とは已前の如く淫を誨へ惡を導くの筆法たらず、幾分懲戒的となれり、特に萬朝報の理想團組織以來意を三面記事に用ゆるの嚴正なる、全く以前と其觀を異にせり、同記者が前月「軟派記者の本領」と題して掲げたるもの近來同社の方針を見るべし其一節に曰く

今軟派記者の依つて生れ來れる系統を尋ねんに、萎靡沈滯せる舊時代の遺物にして、明治の新時代に難有迷惑なる置土産として殘されたる、戯作者、及び戯文家なるものあり、之に聊か新時代的粉飾を施せるもの即ち日本の新聞紙發生時期に於ける軟派記者なり。其存在の意義たる、蓋し一面に於て小六かしき理屈を並べ立て、讀者の肩を凝らしむる代りに、他の一面に於ては卑近なる市井の出來事を面白可笑しく書き立てゝ、讀者の頤を解くの設備なかるべからずと云ふにありしのみ。即ち新聞紙は兩面に向へる高座にして、一面に於ては堂々たる學士論客をして高談雄辯を揮はしめ、他の一面に於ては講釋師落語家をして輕口冗談を縱まゝにせしめ、以て大受大當りを取らんとの設備に相違なかりしなり　草創の際に於ては、斯る馬鹿げたる眞似をなすの餘儀なき事情もありしならん、然れども新聞紙事業の較進步せる稍整頓せる今日に於て、猶ほ三面の所謂艶種雜報なるものを主眼として讀者に媚ぶる新聞紙あり、世間は依然軟派記者を目して講釋師、落語家一流の半可通となし、軟派記者自身

も亦此指目を甘受して自ら品位を低うする者多きに到つては、吾人默せんと欲するも得べからざるなり。

軟派記者の歴史を説き、人類を闊潤なる理想に向て進歩せしむる新聞記者の天職より軟派記者を觀察して曰く、

而して此絶大なる事業は、種々の便宜に於てエラキ硬派記者よりは遙ろ詰らなき軟派記者の手腕に頼るの場合多きが如し。何となれば、堂々たる硬派記者が折角の大議論も、不幸にして大衆俚耳に入らず、奴隷道徳の柵中に豚の如き惰眠を貪りつゝある彼等を醒かすこと能はざるに。軟派記者が卑近なる市井の出來事を通して彼等に接し、正面的に側面的に或は慰撫を與へ或は激勵を與ふる勞力は、却つて着々効果を奏するを見るに依つてなり。故に軟派記者の任務たる必ずしも硬派記者より重大なりとは云はざれども、硬派記者エラクして軟派記者詰らなきの理由は何れの片隅にも存在せざるなり。

此主張あり、三面記事の弊害は初めて除去し得られん、

(一)、風潮を作れる三種の新聞記事　去年以來社會的記事を以て世の風潮を作れるもの三種有り

(1)毎日新聞の廢娼運動
(2)讀賣新聞の公德問題
(3)萬朝報の理想團

これなり、此他報知の雇人親睦會、時事の貧兒慈善旅行、二六の勞働者懇親會、日本の青年會糾合等有るも、世の風潮を作れりと云ふ程にあらず、勿論毎日の廢娼運動と云ひ讀賣の公德問題と云ふも、毎日讀賣のみの主張に非ず、各社共同此氣運を作り出せしものと雖、其中心又は先導たりしは爭ふべからず、萬朝報の理想團に至ては日猶淺しと雖、彼の茶代廢止運動の如き確に理想團が喜ぶべき一大成功の途に上るべきを豫報せり、

(一)、萬朝報の茶代廢止會　此事たる五六年前より心有る人々に依て唱へられ、吾人も亦熱心これを主張したるの一人なり、之を唱ふるものゝ微力なりし事、之を發表するの機關備はらざりし事、時機未だ到らざりし事、種々の源因にて何の効果無くして終れり、而して今や朝報紙上各地方旅館より其同盟を申込み來るもの陸續たるの時期に接するを得、吾人偏へに同社の熱心なる盡力に向て謝せざらんとするも能はざるなり、

以上は都下新聞界近時の小觀なり、勿論モグリ専門の下等新聞五六は其例外と知るべし

工場取締規程と牛馬

虐待取締

農商務大臣が牛馬の使役に關して取締りの訓令を發したると、警視廳が工場法の制定をなさんとするに至れ

るは共に吾人の喜びに堪へざるところとなす、鐘淵紡績會社の工女に肺病續發せるを以て之を調べたる結果同會社及び其他の機業工場にて

（一）十一二三歳の小女を十二時間引きつゞけて勞働せしむること

（二）中には朝六時より翌朝六時まで二十四時間僅に三四時間の睡眠を與へて勞働せしむること

（三）利益上綿の飛散を恐れて窓を密閉し此長時間不潔の空氣中に勞働せしむること

（四）少女が勞働過多の爲に身心の疲勞にて神經衰弱し極めて小量の食物より食ふ能はざる事

（五）病氣に肺病肋膜炎最も多き事

（六）天井低き八疊敷に十數人雜居せること

（七）病室に傳染病患者同室せしむること

等虐待見るに堪へざるの次第を發見せりと云ふ而して是れらは職工監督上の壓制虐待や、風紀の紊亂を別にしての事なり願くは一日も早く取締法の出でゝ勵行せられんことを望む、因みに某紡績會社の寄宿舍獻立表なるものを參考として左に示す

	四月一日	二日	三日	四日	五日	六日	七日
朝食	香物	香物	香物	香物	香物	香物	香物
午食	芋	蓮 日	刺水菜	高野豆腐	豌豆	豆干	里芋 蓮
夕食	葱と揚豆腐	干切大根	豌豆鮓	麸と油揚	唐菜と豌豆	[illegible]	蓮 刻昆布

此等は最良の部にして中には一箇月中一度も魚肉すら食せしめざるものあり一日の食料總額は大抵六錢五厘より七錢五厘位なりと

小仕掛けの日本

歐洲より木版刷り錦繪五萬枚の注文有りしことあり、僅に數人より無き手刷りの職工、晝夜勉強して猶年餘の日子を要するが爲め其注文に應ずる能はず

米國より簾端に用ゐる忍草を十萬株注文を受けしことあり、東京の盆栽師連全部を驅け廻はりて僅に三千株を集む

仕掛けの不十分にして規模の小さき我國各種の事物皆此類なり

米國桑港に日本佛教の傳道師を送り効果以外に擧がれり、シカゴよりニューヨルクより同じく傳道師の派遣を要求し來る、而して派遣すべき恰當の傳道師已に盡く

他日朝鮮開け、支那開け、我國の學者、敎育家、宗敎家、工業家、商業家乃至有ゆる事物其需要に向て果してかゝる有樣を以て供給し得るか

あゝ是れ猶日々帝國主義を說く國民なり

此國民は世界に向て無限に供給しつゝあるものゝ今日唯

一つの醜業婦有り

モルモン宗

東から來た一夫多妻のモルモン宗が排斥すべきものならば、西から來た一妻多夫の喇嘛敎も歡迎すべからず、基督敎から岐れて一婦一夫の習慣最も嚴格なる米國の中心に特發したる多妻宗と、佛敎から岐れて一夫多妻の習慣最も甚しき亞細亞に孤立せる多夫宗と、偶然同時に日本に落合ふとは奇なる現象と云ふべし

モルモン宗に對する取締りを云々するものあり、吾人は望むかゝる取締りを考ふるの餘地あらば先づ天理蓮門を初め神佛各宗に於けるモルモン以上の大弊害を流しつゝあるものを嚴禁すべしと、彼内地神佛各宗の大部分が維持し流布せる淫祠に比してモルモン宗の如きは寧ろ立派なるものなり

風紀と政黨の秘密

曾ては泥坊拿捕の必要と云ふことが遊廓存置の有力なる論據たりし時代ありし、今の警視總監は政黨の秘密を探る必要上都下待合の取締りを緩にすと傳へらる、果して現今政黨の秘密なるものは一國首府の風紀までも犧牲に供して探索すべき程のものなるにや、日本は露西亞の如き國柄と異なり、少しは物の大小輕重を考ふるが必要ならん

教育時論

大學敎授の缺乏

警醒子

高等學校も增設しなければならぬ、大學も增設しなければならぬ、增設は實に刻下の急務である。がしかし、いざ增設といふ段になると、まづ第一に經費にさしつかへる、經費の足らないのは、何とか無理算段をしてじも都合をつけるとして、さてその上で、何とも遣繰りのつかないものがある。

たゞ僅に一ッの帝國大學でさへ、島田博士が死なれてから、適當なる支那哲學の講座の擔任者を得ることが出來ないで、すッたもンだの結局が、重野博士を祭り込ンでは見たものゝ、どうも面白くなくッて、ついこの頃「依願免官」となり、また後釜の詮儀に困ッて居るといふ始末、これで京都大學にも文科が設けられ、九洲大學、東北大學と、漸次設立されるやうになッたら、どこをどうして敎授を得ることが出來やうか。

たゞ文科ばかりでない、法科でも醫科でも工科でも理科でも、教授その人を得るといふことは、今現に難事として困ッて居るのであるから、これから後は、定めてと思ひやられる。困ッた上げ句が、實力のこれに適はないものに、無闇に博士といふ學位を授けて一時教授の椅子を與へ、一時の急を遁れやうとするが、早晩鍍金の剝げるのは、言ふまでもないことである。

帝國大學といへば、我國學術最高の府であつて、その教授といへば、學者としての名譽實にこの上もないことである。然るに、學識德望優に大學の教授たるに足る人が、自ら進んで民間の事業に從ひ、絶えて講座を担任やうしとしないのは、畢竟餘りに冷遇さるゝからだといふことである。成程畢生大學教授として、常に米屋新屋に頭の上がらないのは、甚だ氣の利いた話とは言はれない。それでも教授といへば、少ないながらも一定の俸給律はあるが、講師などゝ來ては、郵便配達夫よりも少ないお手當を、有り難くもなく頂戴仕ッて居るものもあるのださうだ。これが第一流の學者を待つの法だらうか。

第一流の學者と言ッても、實に少數なものであつて、おまけに老朽の境に近いものもある。追々後繼者を養成しなければ、いざといふ時にまごつくのは知れきッて居る。成程近頃は、文部省留學生と稱するものゝ數は、決して少いとは言へない、しかし、大學を飛び出した丈で二年や三年、歐米の地を踏ンだからッて、何程の効があらうとも考へられぬ、ビールの飲みやうや、コスメつかせることを覺えた丈で、一種のハイカラアとなつて歸る位が關の山。だから、必ずしも大學出身のものと限らないで、學才と身體とが、能く將來に爲すあるに足ると見込みのついたものを、どし／＼選拔して、三四年間給費で圖書館へでも籠城させ、衣食のために私立學校を驅け廻るやうなことをさせないで、氣樂にその研究を續けさせ、その上五六年間も、米國なり歐洲なりへ出かけさせ、その中で成績の最も佳良なものを大學の教授とし、以下その手腕に從ッて、高等師範や高等學校や、その他の專門學校に振り向けるやうにして、この缺を補ひ、且つその待遇を十分にして、ます／＼研學の餘裕を與へ、着々第一流の學者の後繼者を養成しなければなるまい。

學校增設の前の難關は、經費の缺乏よりは寧ろ教授の拂底である。この難關を切り拔ける方策は、學者の優遇、學者の養成、この二ッの外にはまあ無からう。

育英の樂

育英は天下の一樂である、しかも今の先生といふもの、果して能くこれを樂しむ程の殊勝な考を持ッて居るだらうか。自己の力の足らないのには氣がつかないで、位地の進まないのを苦に病ンだり、自己の誠實でないのを棚にあげて、月給の少ないのに愚痴を溢したりするものが、十中の八九を占めて居ると聞いては、彼等の樂しむところの樂が、どの位の程度であるかは、略想像が出來ないでもない。品性を陶冶し、識見を助長し、以てその人物を大ならしめてこゝに始めて育英の名能く實と相適ひ、眞に天下の一樂たるを妨げない。若し單に字を



教へ事を覺えしめ、試驗の成績によッてその人物を判斷するやうでは、これたゞ一個機械の働きに過ぎないから、もとより育英とも言へないし、樂とも言へない。

我等は今の敎育界から、此くの如き機械を除き去ッて、自己の天職は育英である、天職を全うするは、樂これより大なるなしといふ覺悟あるものを擇ンで、これに代らせたいと思ッて居る。

夏期講習會

我等は、去年の今月の本誌の上で夏期講習會といふものゝ、効過如何を論じたことがあッたが、今年になッても、別段その考を改める程の事實が表はれて來ない。即ち我等

は、依然として講習會無効を叫びつゝけるのである。彼等の多くは、東京見物が七分、證明書欲しさが三分であッて、眞面目に學術を講習しやうといふやうな、そンな殊勝な考を持ッて居るものはまあ少ない。だから講義に難解のところがあれば、自分の腦味噌の御座ッて居るのを棚へ上げて、講師の學識の測量をしたり、或は縱令高論卓説を吐いても、肩書のない人だと、頭から聞かうとしなかッたり、僅々二週間といふ短時日の辛抱さへ出來ないで、講習をそッちのけにして、ぶらり〱と遊び廻ッたり、誠に以て呑氣千萬なものである。去年も今年も又來年も、年々歲々夏期講習會は、斯くの如くにして終りを告げるのである、東京のそれも、地方のそれも。

元氣の充實

容易く出來ることであッて、そして思ふ存分生徒を收容されるものなら、學校設備の完全は至極結構で、我等の甚だ喜ぶところである。何立方尺について何人の割合で建て、一學級の生徒五十人を超過してはならぬ、便所の如きも、何人について幾個所以上なければならぬ、光線はしか〱、机腰掛はかく〱、萬事萬端機械責めに責められるところから、入學志願者が山を爲して居ても、たゞその幾部分をしか收容することが出來ないために、あたら時節の一學期なり一學年なりを、爲すこともなく無駄に暮し、その間にいろ〱と惡いことも見聞さし、習ひ覺えて、後には金箔つきの墮落書生となり了るものが多いのは、國家將來のため決して喜ばしいことゝは言はれまい。

學校設備の完全でなければならぬといふことは、勿論言ふまでもないことであるが、現在の狀態に於ては、一人にても多くの生徒を收容し、一人にても爲すなくして暮すものゝ數を減ずる方法を講ずることが、設備の完成よりもずッと急務である。元氣さへ内に充實して居れば、縱令外觀がどうあらうとも、熱誠以て事に當れば、縱令道具だてが不揃でも、敢て毫も意に介するに足らないではないか。我等は、當局官廳が、餘りしつこく設備規則を振廻はさゞらんことを望み、教師諸氏が、熱誠を以て生徒を教導誘掖せられんことを冀ふものである。

美と德と

美といふことは、必ずしも道德的なものではない、勿

論道德的でないからつて、それで美の價値がないとは言へぬ。しかし、人には美を見て快を感ずる情があると共に、德を喜ぶ情も亦なか〳〵旺なものである。故に若し直に人心の奥底を衝いて、感動措く能はざらしめ、以て世の風敎に幾何かの貢献をなさうといふ考があるならば、美の情と德の情との二ッを滿足させる底の心懸がなければならぬ。然るに今の文藝界に於ける作家の性情、及び作物の出來ばえを察するに、どうも美に厚くして德に薄く、暗黑を語るものが多くして光明を歌ふものが少ないやうで、誠に憤慨に堪へないのである。

作家は原稿を賣ッて食はうといふ心願、書肆はそれを出版してもうけやうといふ希望、作家と書肆との間には、たゞ食はうもうけやうの外には何の考もないので、從ッて賣れさうなものを出版しやう、賣れさうなものを書かうに餘念がない。その謂はゆる賣れさうなものといふのは、どンなものであるかといふに、成るべく人間の弱點を描寫し、人生の暗黑面を傳へたものをいふのであッて、男子の讀みものとして、女子の讀みものとして、家庭の讀みものとして、學生の讀みものとして、最も多く賣れ行くものはそれである。

賣れ行きが善いから利益も多い、利益が多いから原稿料も澤山出す、原稿料が澤山だから作家は恐悦がる、恐悦がるので筆の運びも善い、筆の運びが善いから速に多く作り出す、多く作り出すから多く出版する、多く出版するから汎く世の中に行き渡る。嗚呼、斯くの如くにして世の腐敗墮落は滔々として底止するところもわからなく、救濟の手の下しやうがなくなッたのである。

宗敎界の腐敗し墮落したのは、宗敎家が宗敎を食ひものにしたからである。敎育界の腐敗し墮落したのは、敎育家が敎育を食ひものにしたからである。文藝家が文藝を食ひものにすることと今日のやうでは、文藝界の前途頗る痛心すべきではあるまいか。否その現狀既に甚だ慼むべきものである。

要するに、作家、衣食の道を他に求め、徐に考慮を廻らして、美と德との二面を併せ有し、能く人の美情と德情とを滿足させる丈の大作、……長篇とは言はぬ、を出さうと勵ンで貰ひたい。

嗚呼東京學士會院

東京學士會院は、我國の老儒碩學の淵叢である。我國

學海の燈明臺たるべきところである。學問上の新問題は、いつでもこゝで解決されなければならぬ筈のところである。然るに、過去幾年間に於ける彼が行動はどうであッたらう、我等の知ッて居るところでは、毎月一回の公開演説と、毎月一回の雜誌發刊との外には、何事をも爲し來らなかッではないか。その演説といふものも、二百人以上の聽衆を集める程の力のあッたことはなく、その雜誌といふものも、四六版形三四十頁のものであッて、内容も外形も、共に日本雜誌界最小のものを、毎月僅に二百部を限りて印刷せられるのである。如何なる高論卓説でも、演説と雜誌とで、合せて四百人以上の耳目に觸れることが六ケしいやうでは、老儒碩學の淵叢も、また慘たるものではないか。殊に今やその唯一の機關雜誌さへ維持することが出來なくなッて、これを廢刊したと聞いては、眞に哀れッぽくなッてしまはざるを得ない。

嗚呼、東京學士會院、老儒碩學の淵叢、名は甚だ美しいが、實はこれ老朽學者の姨捨山、耄碌爺の陳列場、その今日ある、もとより怪しむに足らないのである。我等は、かゝる無能の會院を存し、かゝる無爲の會員を置いて、幾何にても、國家の支出を多からしめることの、甚だ愚なるを知るものである。これをたゝきつぶすに、何の遠慮がいらう、何を躊躇することがあらう。

◉ちりづか（明治三十四年七月廿四日から八月廿三日まで）（全）

◉教育召集法　尋常小學の教育は、兵役と同じく、國家が國民に強制したるものだから、單に卒業といふ形式の證明を與へる丈にとゞめず、兵役に於ける點呼法と同じやうに、時々これを召集し、その成績の良否、記臆の有無等を檢して、これを確認するは、必要のことであるといふので、この春開會の全國聯合教育會で、これを調査することを議決し、それからこのかた、帝國教育會では、委員を擧げて、それ〲調査を遂げ、この程漸く結了したので、各地教育會の意見を聞かうがために、その草案を送ったさうだ。即ち、

一、教育召集は義務教育終了者を召集し其心身を修養し公德私德を實行せしせしめんことを期するものとす

二、教育召集方法は左の要項に依るものとす

一、土地の情況に應じ毎年一回十日以上又は毎月一回一日以上召集すること

　但學校に在學する者は本文の限りにあらざること

一、毎日の時間は大約二時間以上とすること

一、義務教育に關する各種の教科を補修すること

一、場所は夜間又は休業日に於て小學校を用ふること

一、學齡中は强迫制を取ること

一、教師は當該小學校教員中に就きて之を命すること

一、費用は市町村の負擔とすること

三、本案は文部大臣に建議し勅令として發布せられんことを求むること

● **大學入學者** 　今年の各高等學校大學豫科卒業生の總數は、七百四十名だが、東京京都兩帝國大學に入學志願書を差出したるものゝ學科別は、

學科	東京大學	京都大學	合計
法科	二二五	五一	二七六
醫科	一一〇	三三	一四三
工科	一三〇	六二	一九二
文科	七四	:	七四
理科	二八	二	三〇
農科	二五	:	二五
合計	五九二	一四八	七四〇

● **新工學博士** 　八日八日、博士會の推薦で、新工學博士が十五名出來た。

● **高等教育會議々長** は、濱尾新氏に内定したそうだ。

● **東京市教育會々長** には、江原素六氏が當選した。

● **高等教育會議々員** 　公立中學校長、及び公立高等女學校長互選の結果、

百二點	東京府第一中學校長	勝浦鞆雄
百點	宮城縣第一中學校長	下條幸次郎
廿四點	東京府第一高等女學校長	伊藤貞勝

の三氏が當選した。

● **鳩山博士** 　エール大學から、名譽博士の學位受領のため渡來する鳩山博士は、來る四日、夫人同伴出發するのださうだ。さうして、博士が同大學で講義する科目は、日本民法と佛國民法との比較論ともいふべきものであるとの事だ。因に記すが、鳩山博士の外に、同大學から學位贈與の通知を受けたものは、田尻稻次郎、山川健次郎の二氏ださうだが、二氏共に渡來しないといふので、學位は授與されないのださうだ。

● **櫻井理學博士の名譽** 　理科大學教授理學博士櫻井錠二氏は、英國に於ける各大學の組織教授方法等調査のため、英國派遣を命せられ、去る六月六日倫敦着、同十日グラスゴー大學の視察を兼ね、我帝國大學の代表者として、その紀念祝賀式に參列し、祝文を朗讀せられたところが、非常の好評を博したさうだ。その際同大學では、博士にエル、エル、デ（名譽法學博士）の稱號を授與したが、參觀人四五千人、滿堂喝采してこれを祝したさうだ。この學位を有するものは、歐米人中でも頗る儒に限り、東洋人では櫻井氏一人であッて、古來英國のこの學位は、非常な名譽として尊重されて居るといふことだ。

宗教評論

法師を戒む

沼東

逆待は途に獨立を生ず。程久しく度外視せられたる正義も長へに自滅する能はず、今や漸く其萠芽を發し來り、世は幾分か改善の途に向ひつゝあるに似たり。彼の社會主義の興起の如き、理想團の組織の如き、大學傳導の成功の如き、少なくとも國民は一般に、或種の宗教心を養ひ來れるや疑ひなきなり。此れ正しく多年

萎微として振はざりし、我佛教徒の奮勵鼓吹す可き好機會ならざる乎。若し宗教を以て世道人心の支配を任とするとせば、佛教は即ち本邦に於ける最多數を占むるの宗教ならざるか、唯に數字の上よりするも、以て其責任の大を知る可き也。

昔者パリサイの徒あり、區々たる小事を咎めて、最も重大なる罪惡を看過し、身小禮に安じて、却て大節を過るを意とせざりき。當時識者之を誹つて曰く、是れ孑々を濾して、駱駝を呑むものなりと。今の風紀矯正を論ずるもの、稍もすれば之に類似するなきか。朝野政客の汚行、縉紳富豪の失德、教師生徒の醜聞に於ては、吾人既にこれを聞き飽きたり。而して惟り形而上の事物を主とし、德を布き、風教を扶植し、德義の振張を以て、公然其專務とする數萬の僧侶が、其本分を忘れ、職責を拋ち、妾を寵し、酒を放にし、青樓に登り、宴樂に耽り、圓頂黑衣のまゝに、靦として惡道に流轉しつゝあるに對ては、杳として、殆んどこれが制裁打擊を見るなからんとす。知らず、僧侶は社會以外のものなるか、抑も亦彼等の腐敗、最早救ふ可からざるに依る乎。

曩にはサア、チヤールス、ジルク、不淨の罪を犯して、身を政界に起す能はず、無冠の帝王パアネルが、內行の醜露はれてより、威勢頓に地に墮ちぬ。道德を以て政客を責むるの風、漸く本邦に於ても行はれんとせり。收賄は文明の花なりと叫びたる、現代のビツクマン星亨も、遂に兇刄の下に仆るゝの世となりぬ。其果餘りに鄙野に近しと雖も、此れを外にして、議員の賄賂、官人の汚行、女學生の失德、會社の內幕の如き、社會の議論漸くにして、個人身上の德義、私行に波及し、其制裁力の、稍增加し來れるは、或意味に於て、啻に國民理想の進歩なりと云はざる可からず。正義復興の端緒として、鼓吹せざる可からざるなり。尤も責めらるゝものゝ、必らずしも非ならざるが如く、責むるものも亦、必らずしも是なりとは云ふ可からず。或は心にもなき正義の言をば、言葉巧に云ひなして、外聞を飾るもあらん。或は名を正義に借り、公德の奬勵を前置きとして、妄りに人の內行を暴くもあらん。或は直を以て、訐とする痴漢もあらん　理由もなき汚名を受けて、一方ならざる迷惑を受くるもあらむ。賴みなき社會の風潮に諛び、永遠の利を失ふを慮らず、女學生の弊風とし云へば、針小の事をも棒大に言ひ做し、さるにても心遣りなる、罪なき父兄をし

て、遂に女子教育を輕んずるの弊に陷らしむ。如此きは、利巧なる今の新聞記者に於て、屢々見受くる所なり。苟も身を新聞記者に置き、社會の指導者、教育者として自認するものに於て、斯かる非文明的擧動に出づるに於ては、最早沙汰の限りと云ふ可し。されどもとは、僅に楯の半面を觀たるのみ。失望す可からず。自棄す可からず。今の世は僅に進步の世なり、最多くの希望ある世たる可き也。

世は既に或種の希望を抱き。或種の宗教心を有す、風紀改善の期、國民奮勵の機、正に此の時に存するなり。而して此れを遂げんには、先づ其職責を有する宗教家よりして奮起せざる可からず。鼓吹せざる可からず。日本國民の眞心を以て、今の僧侶の如きを忍容し、其臭行を意とせず、其汚穢陋劣を顧ず、之れをして天下の粟を坐食せしめ、之をして先人の墳墓を汚さしめ、之をして他の詰責を受くるの患なく、安心立命の教義を司らしむるに於ては、志士の熱涙も、義人の熱血も、恨むらくは遂に其功なきを如何せんや。官人の惡責む可し、豪商の奸咎む可し、政客の不德筆誅せざる可からず、墮落書生を戒む可し、女學生の事も論ず可し、されども猶ほ此に十數万の僞善者、淫猥野鄙の法師ばらあり、責任最も多く、腐敗最も甚しき彼等に對つて、責めず、戒めずんば、日本道德の空氣は、長へに清淨なる能はざるなり。さりながら誤解する勿れ。吾人が今こゝに如此の言をなすもの、佛教を忌むの故にもあらず、無宗教徒たるの故にもあらず、乃至基督教徒たるの故にもあらず、畢竟するに、日本國民たればなり。風紀改善の好機逸す可からざればなり。而して僧侶の、最も多の責任を有するを信ずればなり、事少しく奇矯に渉るが如きも、此れ風俗、德義、氣節の問題にして、政治、社交、教育に關すること頗る重大なれば也。

試に此れを史に徵し見よ、アイオニヤの海は、古今異なる事なきも、往時に在りては、希臘の文學を發起せしめ、今日に在りては一のホーマルをも生ずる能はず。羅馬、風土氣候、二千年來大變化あるを聞かず、而も古代の羅馬人は、磊落にして、勇敢なりしに、今代の羅馬人は、狡猾にして、卑怯なりと聞く。本邦の氣候、風土、古來三千年間、依然として溫和秀麗なり。唯惟り其國民の理想に於て、而かく高尙なる能はず、維新の潮流以來、一度武士道の衰へてより、更らに新理想の起て代るなし。若夫れ今日の儘にして過ぎ

行かんか、恐らくは、希臘羅馬の亞流を汲まむのみ。然るに幸なる哉、時運は向ひ來れり、理想刷新の時機は來れり。腐敗に飽きたる國民は、一種の宗教心を呼び起せり。此機誠に風紀刷新の期、國民奮勵の時、而して其要路に當れる僧侶の、猛省鼓吹せざる可からざるの秋なり。事若し此に出でんか、此れ自ら國勢進歩の所以にして、併せて佛教再興の所以なりと知れ。

毎月通信

△緬甸僧來らんとす　喇嘛來りモルモン來るの今日、今又緬甸の僧正ダホイ寺院のダムマロナと云へる人、日本に來て世界に於ける佛教の興復策を相談したき由申し來り候宗教界の今年は種々の珍客に消されすべき歟、

△櫻府佛教會堂　去年桑港の佛教會堂はカリホルニヤ政廳の公許を得候が、本年七月全くサクラメントの佛教會堂も公認教と相成り土地家屋の所有權、學校病院の設立、印刷出版の特許、汽車汽船の割引、稅關の無稅等種々の便宜を與へらるゝことゝ相成り候、これにて

△日本佛教の教線　は東は布哇各島、桑港、フレスノ、サクラメント、西は新嘉坡、北は浦鹽斯德まで、兎に角擴張せられ候、東本願寺のニユーヨルクへ支院設立はいかゞ相成りしや、是非共設立の運びと相成候樣禱り候、若手出來候はゞ成功は疑ひ無かるべしと存じ候

△海外にての出版　佛教徒の手になるもの布哇ホノルヽの同胞（邦文月刊）桑港の米國佛教（邦文月刊）ライトチフドハルマ（英文隔月）に御坐候

△米國　は兎に角何種の宗教に對しても寛大にて異宗教の宣傳には最も好都合の土地柄に候、日本佛教衰へたりと雖、マダ〳〵モルモン宗丈け位ひの資格は可有之候

△モルモン　と云へば今度彼の宣教師が日本へ渡來するに就き、ユタ、モルモン宗の本部にてユタ州在留の日本人は盛んなる歡送會を開き出し、物好きも程の有つたものに御坐候

△太陽の人物月旦　記者は、基督教界の人物として政治家に島田三郎片岡健吉江原素六の三氏、學者に植村正久小崎弘道横井時雄内村鑑三の四氏、雄辯家に宮川經輝海老名彈正二氏、事業家に本多庸一押川方義二氏を列擧し、一人の宗教家無しと斷言致し候

△基督教界の人物　若しこれにて盡きたりとせば、マダ〳〵佛教界の人物より品位も數量も見劣りせられ候、只基督教界も佛教界も知名なる人に一人の宗教家無しとの斷案は正鵠を得たるらしく候

△通俗佛教新聞　の類に萬朝の理想團を危險なりとして、基督教徒やユニテリアンの人々が多いから佛教徒は這入るべからずとか、國家主義と衝突するから這入るべからずとか言ひ觸らすは、諸佛教徒の偏狹さ加減如何にも淺間しく感ぜられ候、彼等には到底宗教者の敵は無宗教者にあり社會の罪惡にあり、ソレニ對しては聯合軍を作りて當らねばならぬ事の分らぬものと相見え候

以上



文壇時言

文壇の迫害とは何ぞや

春湖

『明星』の主筆與謝野鐵幹氏、このごろ好んでよく迫害の文字を用ゆ。さきに「日本を去るの歌」を作るや「迫害や急なり、居るべからず」といひ、近刊の全誌上、「文藝雜俎」に於て『帝國文學』記者に酬ゆるのうち、また美妙、綠雨及び淚六の三家を援いて自家と同じく文壇の迫害を蒙れりといひぬ。あゝ迫害、迫害は果してしかく氏の身を厄するものか。そも〳〵また氏の所謂迫害とは何ぞや。

吾人の見る所を以てすれば、氏は迫害の意義を或る他の意義に解してこれを用ゆるに似たり。しかれども、迫害の眞義は決して氏が用ゆるが如き意義に於て用ゆべきものにあらず。請ふ、そのしかる所以を陳べて、氏及び氏に倣うてこの語を口にするものゝために、いさゝか告ぐる所あらんとす。

（一）

初に於て先づ問ふべきは、氏は當の敵すなはち現代の文壇より迫害を加へらるべき程しかく大なる人物なるかといふことこれ也。過去の事例について見るに、當の敵すなはち其の社會より迫害を加へらるべきものはその人物、遙に當の敵に勝れたるもの也。識材に於て偉大なるか、もしくは思想に於て超越したるか、いづれにもせよ、その人と當の社會と、相同化せんには、その間はなはだ隔絶して、その人を容れんには當の社會あまりに低く、當の社會に容れられんにはその人遙に高きもの也。鐵幹氏は果してかくの如き偉人なるか、吾人はいまだ氏と一面の識なし、隨うて氏が現代に容れられざる程しかく大なる人物なるか否かを知らず。しかれども、その作物に於て觀たる詩人としての氏は、決して文壇に容れられざる程の人物とは信ずる能はざる也。けだし氏や、詩人としては文壇に於て一頭地を抽出するもの、ことに舊來の和歌を打破して新派の機運を喚起したるが如き、その功はなはだ稱するに足るものあり。しかれども、これあるを以て、氏は文壇の迫害を値すべき人物なりといふこと能はず。何となれば、これらの功、これらの才あるものは、現代の文壇に於て倘求むるに數多あり。氏にしてもし、迫害を加へらるべしとせば、これらの人々は夙に氏に先だつて加へられざるべからざれば也。しかれども、現

代の文壇は、かくの如きものに向つて迫害を加ふべきほど、しかく幼稚にしてかつ愚昧なるものにあらず、その功その才の如きはかへつてふかく顯揚して、諛に過ぐるを怪ましむるまでに惜氣なく褒辭を與ふるもの也。氏は、よく文壇を目して「中傷沙汰」に充つといふ。しかり、文壇の一部にこの惡德を敢てするものあるは事實也。吾人もまたこれを認む。しかれども、そはたゞ一部のみ、文壇を擧げて悉くしかるにあらず。今日の文壇いかに進歩の過程にありといふとも、豈氏が如きに向つて中傷を加ふるものならんや。さはいへ、これらの徒、もし氏に向つて害を加へたりとせんか、そは中傷也、迫害にあらず。中傷と迫害とは全く異なれる也。それ、人を中傷するものはそのまゝに打ち棄てゝおのづから悔悟せしむるか、もしくは痛激なる打擊を與へてふたゝびかくの如き惡德を演じ能はざらしむるまでに、その病犬根性を懲し盡すべきのみ。これをこれなさず、辭を迫害に藉りて暗に他の憐を乞ふの擧に出でんとするは、その心情はなはだ卑怯なるにあらずや。眞に迫害を被れるの人は決してかくの如く卑怯の心情あらざりし也。かつそれこれを事實に見るに、氏の價値は漸く文壇の認識する所となりて、『明星』の如き、稿を寄せて氏の志を扶くるものあり、新詩社基本金の如き、募に應じて金員を贈るものすこぶる多きにあらずや。この際に於て、氏たるもの何を苦んでか迫害を唱へてみづから欺かんとはする。吾人は氏が迫害なる文字を用ゆるに先だつて、自家がこれに値せらるべき程の人物なるか否かを省みざりしを憾む。

（二）

氏すでに迫害を加へらるべきほどの人にあらず。しかれども、氏にして、もしそのいふが如く迫害を加へられたりとせば、その迫害はいかなるものなりしか。拒ぐ能はず敗る能はず、忍んでこれに屈せざるべからざるほどしかく强大なるものなりしか。次で問ふべきはこれ也。それ迫害は害のもつとも大なるもの也。被迫害者の達識逸才を以て勝つ能はず遁る能はざるもの、たとへば團躰の如き有權者の意志の如き、社會上に於て强盛なる勢力、暴力もしくは權威を有するもの也。それ勝ちもしくは遁れ能ふものは害にあらず、況んや迫害をや。しからば、氏の加へられたりといふ所の迫害はいかなるものなりしか。吾人は前にいへるが如く氏と交遊なきを以てその私事を知ること能はず、しか

れども詩人として加へられたる文事上の害、——しかり、その害に至つては、かの著者明かならず、發行所また實にその所なしといふ『文壇照魔鏡』の一あるを知る。しからば、氏の所謂迫害とはこれを指していへるものなるか。もし果してしかりとせば、吾人は氏の所謂迫害といふの意義の、はなはだくだらなくして、かつ極めて女々しき愚痴に似たるを驚かざる能はず。『文壇照魔鏡』何ものぞ、自家にして一の疚しき所だになくば手にすら觸るゝに足らざる野卑なる作物、その執筆者として氏が人に語れりといふ某の如き、氏の地位を以て見れば遙に〱下れる一末輩にあらずや。しかるに、これを相手どりて漫に迫害呼ばはりをなす、吾人は氏の御器量のためにはなはだ採らざる所也。かつそれ、氏はこれに對して訴を起すこと一再、その結果は不幸にも敗れたりといふとも、自家の權利の伸張し能ふまではすでに伸張し盡して一旦局を結びたるもの、而して眼識ある文家諸氏の如き、かの狡奴の所爲を惡んで大に氏に同情を寄せつゝあるにあらずや。この際に於て倘ほ窮地にありといふ。吾人は恐る、氏にしてかくの如くんば、かの狡奴をして『照魔鏡』述作の目的を達したるを喜ぶに至らしめんことを。

（三）

終に泝んで問ふべきは、迫害の主人公は迫害を加へられたることを口にし得るものなるかといふことこれ也。氏すでに迫害を加へらるべきほどの器にあらず、またその迫害といふもの眞に迫害なるにあらず、しかれども、もし氏にして迫害を加へられたりとせば、氏はみづからこれを口にして決して憚らざるものなるか。思ふに、迫害なる文字は局外よりして命じたる稱三者の語にして、被害者それみづからの發したる言にあらず。孔子は陳蔡の間に苦められたり、クリストもパリサイ人のために禍を受けたり。しかれども孔子もクリストも、いまだ甞て迫害なる語を發したることあらざりき。孔子を以てクリストを以て迫害に逢へりといふは後に至つて名づけたる第三者の批判也。けだし孔子の如くクリストの如く德、天下後世を曠ふするものは、これらの言をなして敵者を怨むが如きさもしき志、存せざりし也。しかるに、鐵幹氏に至つてはしからず。みづから迫害を稱して憚る所なく時としては暗に誇るが如き風すらあり。この點に於て、氏は古の殉道者とその揆を異にす。殉道者小にして氏大なるがためにしかるか、そも〱また殉道者愚にして氏賢なる

がためか。何ぞその均しく迫害を蒙るの人にして而してそのなす所の異なるしかく甚しきや。しかれども、飜て氏の迫害如何を問へば、すなはちさきにいへるが如くその事實全くあることなき也。こゝに至つて、氏は殉道者の實なくして殉道者と同じき批判を受けんとするもの、すなはち自家を以て殉道者に擬するもの也。しかれども、これ尙ほ可也。迫害なる語の裏には褒貶の意味含むに至つて、氏がこれを口にするは如何。けだし、迫害なる語はさきにいへるが如く第三者の言也。すでに第三者の言也、故を以て、その裏には被害加害兩者に對する是非の判斷を含めり。すなはち稱して迫害といふ、害は惡事也、これを行ふものは惡人也、知るべし、第三者の迫害をいふの意、これを加ふるを以て惡とし加へらるゝを以て非惡(善)としたることを。しかるに氏はこの第三者の言を以て自家の上に判斷を下したり。これ自家を以て自家を判斷するもの、すなはち自家を以て自家を褒むるもの、同時にまた自家を以て自家の當對を貶するもの也。こゝに至つて、氏のみづから迫害を稱ふるは、自家を以て自家を讃賞するものとなる。自家の自讃は人に愧づる所也、しかも、氏は人の愧づる所をなして憚らざるものにあらずや。

(四)

要するに、迫害なる語を用ゐ得べき場合は、第一、迫害を加へらるべきものは當の社會より遙に超越したる器材なること、第二、迫害を加ふるものは加へらるゝものより社會上に於て強盛なる勢力もしくは權力を有するものなること、第三、迫害なる語は被害者のみづから口にすべきものにあらざること也。而して鐵幹氏の所謂迫害なるものを以てこれを照らすに悉くこの場合に外れたり。これ豈眞に迫害ならざるを以てにあらずや。氏は自家の外、さらに美妙、綠雨及び涙六の三家を擧げて同じく文壇の迫害を蒙れるものとなせり。吾人はこれらの諸氏が果して迫害を蒙れるの人なるか否かを知らず、また鐵幹氏の如くみづから迫害を口にせりや否やを知らず、しかれども、諸氏の蒙る所の迫害もし鐵幹氏のいふが如き意義なりとせば、吾人は諸氏の鐵幹氏とともに迫害の眞意義を誤てるものなることを斷言するに憚らざる也。記し終つてたま／＼去月發刊の『文藝界』第一號を見る、その「會告」に「本誌は五月五日創刊可致之處本會發起以來種々の中傷迫害に遇ひ心ならずも大に延引致候」の語あり。雜誌發刊の

遲延を以てその動機迫害にありといふ。もとより『明星』一派の口吻にかぶれてこゝに及びしならんといへども、迫害の濫用もこゝに至つてまことに噴飯の外なしといふべし。

文壇六號・活字

文選小僧

▲六號活字といつたからつて、文士までが小さくつて、コセついて、そして印刷職工に厭がられるといふ謎ではないのだ、えゝこう、もつと氣を大きくもちねえ……ほい、これは花川戸の親方の臺辭だつた

▲田園生活が流行ると思つたら、そろ／＼美的生活といふのがはやり出した、早速こゝを引拂つて心中の道行とでかけるかな、さて、裸躰論は、何處で賣つて

るのがいゝかしら……

▲柳浪の時代はすでに去れりだ、『鏡のうらみ』で顔がおかめになるッ



て、へん、名詮自稱の馬琴が聞いて呆れらあ。第一さ、主人公の……と評しかゝると、大友が目をむいて、やい／＼お龜を惡くいふときかれえぞ

▲柳浪といへば、君、是を見玉へ、淺草の珍世界にもない珍物だぜ、と赤新聞へ包んだのを出すのを見ると、長くッて血も肉もない怪物のミイラ、是は何だ？と聞けば、『自暴自殺』の引き延しさ

▲江見水蔭氏といふ文士が『大地獄』といふ素人芝居を演つて、銅山の有様をそッくり其儘、如何計らひませうや、と足尾から飛んで來ての御注進、鑛業市兵衛、過日切ッたばかりの髷の痕を撫でゝ、なあに棄て置け／＼、ても、代議士までが加はつて、とちちりちんと囃子方を勤めて居ります

▲緑亭川柳の地獄だよりに、言文一致のおかげで狂句までが流行り出したはいゝが、此頃のは焦熱地獄で冷汗の出るやうなものばかり、俺の方には子規も鐵幹も出ないのか知らぬ、和橘ちとしッかり頼むぜ

▲新刊の『鰹と雛』を御隱居眼鏡越に披いて、どふも昔が戀しいでげす

てな、此頃の小說はむつかしくいふと、えゝとあのそれ……交番のお方、何とかいふんてげすな、と聞けば巡査は振顧つて、なほん風俗壞亂かれ

▲「飛流一たび決せずして馬丁が口角より飛ぶ餘沫の如く、老鶴庭に下らずして野鷄床の間に如何はしきものを塗付けたるが如くに響く」こりや一體何のこッた、禪の考案よりもわからない

▲「明治の世、文豪と自稱するもの幾千人ある」と讀んで、ひやッ！と西洋人膽を抜かしたが、さきを見ると「其全部の滅亡さへなしとも限らず」とあるので、やつと起き上り、これてこそ大股に歩るけるわえ

▲玄關番の大家一山百文字舍先生へ申上ける、先生に「詩人になる法」を傳授して「ギヨーテのローレライ、ロセッチのインメモリアム抔と特別智識を少々振り蒔き」といはれたが、成程ロセッチはそッちのものであらうがギヨーテは僕の方の課目であるのを先生が樹違ひなされたものと見える、僕の方の迷惑少なからざるにつき至急正誤なして戴きたい

（小說學校の一生徒より）

▲やい／＼雷公、貴樣は此頃怪しからぬ事を初めたな、俺の方の事を素ッぱぬいたら承知なしねえぞ、さう心得ろ、此惡戯者め（風の神）

雜　評

烟草の烟

西藏とモルモン

喫烟談客

△ラマ僧が來た後でモルモン宗とは實に面白い取合せだ、ラマの本國西藏では兄弟共同で一婦を娶り、モルモンは一夫數婦の制度を主張して居るから妙ぢや、

△ちよッと聞くと、どッちも感心しないが、日本現在の社會から見ると實に羨ましい、

△現在我邦社會の常態は、先日松本君平の誹毀事件に下した裁判宣告の通り、妓を買ふは醜事にあらずで、紳士となるには却つて必要なる資格の一に數へられて居る、

△妓を買ふたり、妾を置いたりするのは、ラマでもモルモンでも眉を蹙めて逃げ出す醜事である、

△伊藤博文が六十面をさげて、女狂ひの止まない處を、モルモンに歸依させやうと云ッても到底駄目だ、彼は決して第一の妻、第二の妻と、五人や六人で滿足するものでは無い、一年經ないうちに蛇度宗門から放逐されるやうな事をするに違ひない、

△儒教主義の者はモルモンを排斥する權利は無い、彼等が聖人として崇めて居る堯は、娥皇女英二人の娘に、舜といふ一人の夫を持たせたではないか、して見れば舜は純然たるモルモン主義の人で、それを認許して堯も同じくだ、

△娥皇と女英は、どッちが本妻、どッちが妾といふ區

別が無く、同等の權利を持て居たらしい、こゝらは眞にモルモン宗だ、

△西藏の風俗も、一ッ羨ましいのは、大丈夫が身命を賭して事業を企てた時に、妻子の愛にひかされてへこたれるといふ事が少い、自分はどうなッても、兄か弟が後の妻子を引受るから安心なものだ、

△いくら大丈夫でも妻子の愛にからまれないものは少ない、伊庭想太郎でも、今頃は妻子の前途を思ひ出して、暗い處で泣て居るだらう、これが西藏なら少しも氣懸りにはならない、

社會主義

△社會主義といふものが段々流行ッて來たが、階級打破、貧富平均も或る程度までは賛成だが、餘り突飛な議論は止して貰いたい、

△日本の國民たる以上は、其國躰と相容れないやうな、過激な議論はしないと彼等は云ッて居るが、人の思想は段々嵩じて來るので、いつまでも其程度に安んじて居ない、

△此頃石川安次郎といふ男が、『警世』雜誌で、地主廢止論を主張して居る、其結論に左の如き二個の法律を發布すべしと云ッて居る、

第一　自今以後自ら耕作せざる田畑を所有するを禁ず

第二　自今以後自ら住せざる市街宅地を所有するを禁ず

△これは純然たる社會黨、共産黨の考へて、治安妨害の甚しいものだ、尤も意味が漠然で馬鹿氣て居るから實際毒にも藥にもなるまいが、これを棄てゝ置くと、一般書生仲間へ思想傳播の恐れがある、

△自ら耕作するとは、所有主自身で鋤鍬を取ることか、すると親父が健康人に勝れて、七段も八段も所有して居たのを、相續人が多病で一二段しか耕作出來ないときは、後の五六段は取上げてしまうのか、それでは糊口の術に困ッて乞食でもしなければならぬ、

△又は雇人を大勢召使て、自分は懐ろ手をして居ても、自ら耕作すると云ふのか、すると今の大地主は此法律が出る否や、小作人を殘らず雇人の名義にしてしまうと、却ッて主從の關係になッて、小作人泣かせになるだらう、こんな愚にも付かない議論だから、どうでも好いが、兎に角社會共産の傾向あるのは困ッたもんだ、

△僕も小作人が現在困難して居るのを見て、救助の方

法を考へて居るが、これには小作條例のしッかりしたものを作るより外に方法は無い、社會主義の研究も至極結構だが、石川のやうな馬鹿者が飛び出すには閉口だ、

讀者の文壇

秋風一過

虹弦窟主

▲春の風がふわりと吹きやでれりとなる、秋風がそよりと來りやしやんとなる、我輩はどうしても秋は好きだや、なに春畝君は侯爵大勳位でないかと、さうさ侯爵大勳位なる程よかろふ、たが五圓と扇子一本とで醜者の淫賣買つて、物議を招く樣なことはどこまでも我輩は嫌いだかられ、

▲此混沌たる渾圓球上と云へば大した樣だが、兎に角今の腐敗世界にさ、温かい平和の春風が吹く前に、我輩はどうしても爽快な秋風の一過するのを望んで居つたのは決して一日でない、

▲然るにだ、こゝに廿世紀第一年の初めからかけて、ぼつ／＼此金風のそよめきだした樣な氣がして我輩は嬉しくてたまらないが、これは我輩一個の感想であろふが、宗教問題、教育問題、更らに社會問題、人道問題、大凡の天下の嚮向は、皆此社會改善と云ふ方面に向てきた樣に思ふがどうであろふか、これは廿世紀の劈頭に於ける最大最重問題として、前世紀が殘して置いた最大遺物であつて、今徐ろに其解決の緒にかゝりかけ

たのではあるまいか、

▲最新の出來事て、此點から我輩の第一に着目せねばならぬのは、萬朝報社一派の首唱した理想團の發表であろふ、涙香が第一の主意書は、彼れが其前に萬朝報に連載した新聞紙の道德と共に、最も面白く讀んだ、特に星氏の遭難事件が、丁度其論文を掲載して居る間であつたので、直ちに取つて自家論議の一例として、公明に星氏を論じたのには我輩頗る感服したのであつた、

▲併し、其已前の萬朝報を回想して見れば、涙香の云ふ如く、確かに一個の主張ある、一種の特色を持て居つた新聞であることは我輩も夙に認めては居る、又其主張其特色を永く變へないことも知つて居る、が、

▲理想團の宣言に云へる如く、はた新聞紙の道德に於て滿天下の新聞紙を罵倒して、眞の大新聞は我獨りと力味し其意氣込に對して、果して其實を盡さるであろふか、又其資格があろふか、主張と云つたり特色と云つたり、云ひうべくんばだ、雲介の喧嘩を買ひたがる、盜賊の財を取りたがる、亦これ一個の主張一種の特色であるからな、

▲がだ、誰れやらが云つた、惡にも強ければ又善にも強い、それならばそれで、どうかどし／＼しつかりやつて貰ひ度い、畢竟成否は人にあるのだかられ、

▲本誌の前號に揭げられた、境野黃洋君の政治家の信念は實に面白く讀んだ、穩健なる思想の下より、正しき判斷を下して、彼れ星亨をして千識に生きしめたのは、確かに平々たる群議の上に超出して居る、

▲シーザーの殺さるゝや、アントニー希世の辯を振つて羅馬の市民をして呆然たらしめた、死屍に瀕つとか何とか云つて八釜敷い間に立て、大膽に彼れを辯護して、其眞を發揮した處は、確かにシーザーに於けるアントニーと云はねばならぬ、固より其心事の如何は雲泥ではあるが、

▲おゝ黄洋をしてただ、かのアントニーの辯を有せしめて、かの星亨の棺前に立たしめよだ、小さき道徳の誤れる標準に依て、かの星が死を快とせる群小儕輩の肝や如何に寒からん、我輩は信ずる、助平爺が吊文よりも、老いたる酋友の吊詞よりも、乃至三百の壯士が喧囂せるわめき聲よりも、星や如何に土中に安かに眠つたであろふか、

▲此頃中村春雨の無花果を讀んだ、沈滯して居る文壇に一段の活氣を添へて、確かに近來の傑作と云はねばならぬ、が、僕はこれに依て更らに一種の感想にうたれた事がある、それは外ではない、かの一篇に依て表はされてある宗教想が、果して其教の眞を捕へ得たとするものならばだ、僕は實に此不完全なる在來の宗教想の陳腐にして、實世界の現世相と相抵捂するの甚しきには今更ながら慨歎たらざるをえない、

▲抜き去られた釘の痕の、柱に留めざる樣に、一たび懺悔された罪は赦さるゝものなりと信じて、そこに神の惠みの大なるを感謝して、献身的の勇氣を振ひ起しておきながら、そこに現世相の、初めに我豫期した、即ち一つの想像的現境を作つて置いた、それと矛盾したからと云つて、又懊惱煩悶もがきにもがかねばならぬとは何事だ、

▲もとより、これが人世の常態で、その苦悶の行徑を巧叙したと云ふので、此小説の價値も認めらるゝのであろふが、さりとて、それはあまりに狹隘ではないか、不完全ではないか、

▲かくの如く疑ひの起り易い事柄を、疑ふなと無理に押し付けて、一面世相の豫測し難い神秘の藏は開くべき鍵を與へないで、徒疑ふな信ぜよとは何たる難題であろふか、

▲併しながら、厮之助は正しき人である、彼れは正しき人であるから、煩悶し懊惱し、而して自分の罪深く信仰薄きを慨いた、が、これを更らに地位を變して、厮之助の位地にエミヤ夫人をして立たしめよ、植木監督をして立たしめよ、此一篇の小説に於て、神の如く輝く二人の靈も、果たして厮之助の如く迷はずに居れたであろふか、我輩は此汚濁の世界に、せめてかくの如く穩健にして崇高なる宗教小説の出たのと、又漸次社會が其方面に傾いて來て、已か罪、思出の記などがゝ歡迎さるのは、深く喜ぶのであるが、更らに崇高清健なる新宗教に依て、一代の人心を指導する樣な小説の出ることを希望して止まないのだ、

▲史を讀んで孝謙帝の朝の處に至ては、いつも卷を掩ふて喟然たらざるを得ない、道鏡を寵した孝謙帝は何であつたろふが、寵されてそれを利用した、道鏡は奸であろふが傑物と云はねばならぬ、廟堂の上紫衣の風を振り靡はして、淸磨といふ剛骨男子の出るまで、百官をして色なからしめた、萬機を操して平氣でやつた彼れは確かに其機量があつたのに相違ない、我輩はこれを思ふ毎に我黨の萬師の言を思出すことを禁じえない、道鏡だつてやたらに惡者の樣に云ふが、兎に角大臣で眞正に威張つたのはあいつ一人だ、今の坊主はなんだい、大臣か知事の下駄嘗めつて喜んでゐやがる、と

短文

——我國の公園に就て

投稿諸君に謝す

前々號本囘の豫告を我國の公園に就てと出し置きながら、前號誤つて他の題を出だし、諸君の叱責を受け、且つ諸君を惑はしめたること少しとせず、全く編輯の誤り、今後は大に注意をなすべきに就き伏て今回の寛恕を請ふ。

（短文係　社末　H、T）

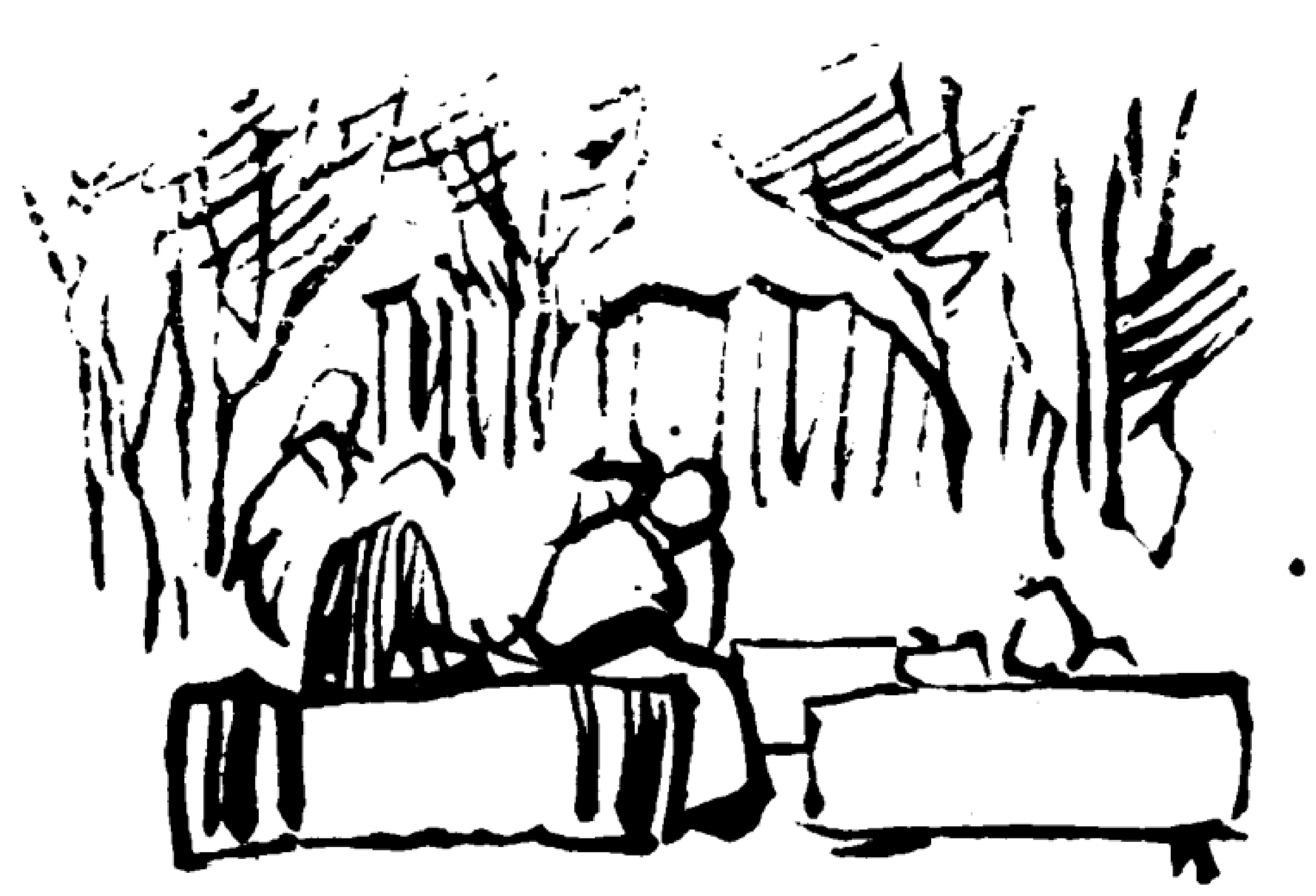
▲記者足下並びに讀者諸君　日本は全土を擧げて天與の公園に非ずや、到る處松青く砂白く、山紫に水明かなり、鳥は樂しく歌ひ、花は咲つて

問ふ、何を苦んで公園國内に更に小公園を設けんとするか

記者足下並びに讀者諸君　吾人は此樂むべき郷土をエドウインアーノルドの歌ひけん如く、世界の公園として、此公園國全體に手入せんことを望む、荒野の如き無味なる對岸の亞米利加より一年一度の遊山には悉く日本に來り樂み得らるゝ樣の設備あらんことを望む、四時煤煙の裡に苦められ或は殺風景なる山川に生活せる龍動や其他の歐洲人士をして喜んで日本に觀光し來り得らるゝ樣の仕掛けしなさんことを望む、則ち他無し、ホテルの配置なり、交通機關の完備なり、

記者足下並びに讀者諸君　右の理由を以て吾人は絶對的に世人の所謂る公園なるものに反對す、何等の痴漢ぞ白晝更に燭を求めんとはする、何等の阿呆ぞ頭上更に頭を加へんとはする、公園は公園無くして生息し能はざる下等國に生れたる國民の必要品なり（早稻田片野生）

▲我國の公園は概して視覺的一種の玩弄物にして眼に映して直に立派であるとさへ云へは其公園を造りし人の滿足にして、亦見物者の心得も一般是位である、併し乍ら僕等の考ふる所では公園なる眞意義は目を樂しませにつならぬが、寧ろ公園は精神を爽快にせしむるを以て重きを置くものと信す、さすれば此意義を充實せしむるには先つ公園の中央にクリケットフートボールベースボールロンテニス等に供する一運動場を設置し、次に亦優美なる一屋を設けて少くも月二三回ムーンライト及びデーライト（新鮮なる空氣を吸うには毎朝未明に若くはなく有ゆる罪惡を防ぐにも夜間に於て警戒するより好きはなし）にミユジツクバンドを起し、集り來る公衆をして大に運動活潑の氣象を惹起せしめ、亦た大國民的品性を高からしむるこそ、市設公園の任ならん、併し悲ひ哉未た我國の公園通にて此計畫なし、近來外國には此種の改良に頗る多きを見るに至れり、（在新松嶽迂夫）



▲我國の公園は皆神社佛閣に關係がある、之れは神社佛閣がなければ、公園には適せぬわけではない、神社佛閣の所在地が公園と爲すに、最も適するからであろう、即ち衆人の集りやすきと、都合に地の廣濶にして清潔なると、又樹木園池の風致が、直ちに以て公園としやすきゆゑであろふ、去かし之れが爲めに、其地の繁華は來すだろうが、神社佛閣の神聖を汚し、又衆人の風紀を亂すやうな事もでき、そうして公園として誠に不完全のものとなつてしまう、只だ衆人の娛樂に供するところを以て公園であるとしたならば、京都の新京極や大阪の千日前の如きは固より公園と云はればならぬ、普通俗人の目から見たならば、上野公園よりも淺草公園の方が面白からうが、公園としては最も劣等といはればならぬ、淺草公園的の眼を以てしては、迚も歐米の公園の如き規模の雄大にして、設備の完全なるのを望むとが出來ない、今後我國の公園は何れも大に改良せねばならぬ、こんど出來る日比谷の公園の如きは、無風流の拙者には園内各區の名目が少し面白く感じないが、名などは兎も角も公園全体の設計が出來上つて、果して模範公園となすに足るか、眞に理想的の公園となるか、或は又折角出來上つても、毫も神社佛閣に關係の地でないから、俗塵に厭はれたる都人士の爲めに歡迎せらる、であろうか、どうか、之れは一寸考へものた（一癖生）

▲我國の公園は西洋の話しをきくと、どうも小さくて比較にならないや

うだ東京でも上野や、淺草又は芝山内の如きは兎も角も、公園といふ名の附いてゐるものゝ内で猫の額の樣なのがいくつもある、一私人の庭園としても遙るに大きな、もつと立派なのがあるのだ、此頃洋行歸りの先生が斯ういふをないふた、我國のは「こうゑん」ではない、「こゑん」(小園)だどうもいきづまつてちいさい、西洋のはほんとうに「こうゑん」(廣園)で、ひろ〳〵として眞に廣延なものだといつた、洵にそうであろうと思ふ(一瓣生)

▲僅か數千万圓の錢に窮して手古摺る樣な貧乏國で、人並に公園の設計など、チヤンチヤラ可笑しや、東京市會へ、チットお餘りで、施行してやろうか(ロスチヤイルド家の番頭)

▲音樂堂無く、共同ベンチ無く、運動場無く、運動機械無く、電氣燈無く、噴水無く、馬車路無く、競馬道無く、花無く、美人無く、而して猶、公園と稱し得るか(青山生)

▲我國の公園は淡純無興にして遊ぶに足る可きもの甚だ少し、今少し風景を深妙に爲したきものである、殊に都會のみに設く可き筈に非らざれば偷地方の町村なれ凡て人士の往復來集する處に設置して人々の心を慰み得ることを期せざる可からず、之に由て惡處に遊び風俗人心の腐敗を救防すること少なからず(碌々庵)

▲前號に住居の比較をしたから今度は公園の比較をお目にかけ樣と存ずる

歐米の公園	我國の公園
野原的	箱庭的
平地にして樹木少し	凸凹多くして樹木多し
馬車を驅りて散歩する丈けの廣さあり	人力車を驅りても僅か數分間にて一週し得
走つて運動する公園	坐して眺むる公園
音樂堂無き公園無し	音樂堂有る公園なし
夜は白鬼の出沒する程賑かなり	夜はお化の出る程寂むし

(芝、白金生)

▲日本人は只小言を吐く人民なり、毫も樂天の分子無し、暗黑の方面のみを見て光明の方面を知らず、貴社の短文每號小言ばかりなるを以ても知るべし、公園に就ても定めて小言ならん、日比谷公園の設計は小言の爲めに中止となりたり、京都東山の公園計畫も又小言の爲めに中絕されんとす、吾曹は徒らに小言の爲めに實行の遲くならんよりも少々の欠點はかまはずドシ〳〵實行の[illegible]らんことを望むものなり(京都鴨涯生)

▲上野公園計りやゝ公園としての價値がある、淺草下谷芝皆名計りのものにて公園と名くへからず、上野公園も其廣さに於ては遺憾多し、谷中より飛鳥山までを打開き、西は不忍池を擁して本郷大學までを公園内に引きくるめて種々の設備をなさば、大に世界に誇るの公園たらしむるを得ん(K、H)

▲市の中にあるから莊園だいや掃除が行屆かぬから荒園だ(ち、む)

▲日比谷公園の設計はロンドンのハイドパークに比べると四十倍規摸が小ひとのことである、これでも東洋の英國と威張りちらす都民の設計であろーか、どの面下げて亞細亞のリーダーであるの、最文明國であるのとホザクか、其心根が知れない(碧山)

▲僕は夜芝の增上寺山内を散歩する毎に其暗きに閉口する、歐米の公園はかやうに暗きものであろうか(高輪生)

課題

我國五十年後の宗敎に就て(九月十五日まで)

我國の交通機關に就て(十月十五日まで)

前月の出版界

●歐米小觀　大橋乙羽遺著　日本橋區本町　博文館發行

乙羽氏七七日の忌辰を以て頒行せられたる此書は氏の「歐米小觀」を中心として是に岸上氏の「大橋乙羽君」、諸名家哀悼の詩歌「柳風鵲風集」、及び西遊中家へ寄せたる繪端書の製版、不析氏の戯畫燕の旅行を加へたるもの也、此筆此技術再び見る能はずと思へば此書空しく亡き人を忍ぶよすがとなりて眞に哀惜の情に堪えず（四十錢）

●實業家奇聞錄　麴町區有樂町三丁目　實業の日本社發行

嘗て雜誌『實業之日本』に連載して江湖の喝采を博したる逸話を集めたるもの也、たゞに其事柄の面白くして消閑の具に適したるのみならず、これを他方面より見るも實業家立志の由來、成功の苦心、商略の機智若くは其人の裏面を窺ひ知ることを得て讀者に益を與ふること多し（三十錢）

●學生渡米案內　片山潛著　勞働新聞社發行

勞働者學生等の北米西海岸に渡航するもの次第に多く、中にはワザ／＼國の恥を曝らしに行くものもあり、中には準備の不整頓よりして中途に目的を挫敗するものあり、此書はこれらの勞働者學生に向て各種の心得と案內を指示したるもの、卷末必要なる英語の會話を假名にて記るしたるか如き彼等には一方ならぬ便宜なるべし（十五錢）

●修養談　松村介石著　警醒社書店發行

松村介石氏が修心談なり、處世術なり、以て氏の懷抱を見るべく、以て氏の立脚地を見るべし、當代青年の意氣頹敗し沮喪せる今日、此の如き著述は大に世を益するところあるべし、特に青年學生諸君に一讀を勸む（廿五錢）

●日本袖珍地圖　東部全圖　春陽堂發行

日本出來の地圖と云へは杜撰なものに限るとは思ふべからず、此圖は我國東部の袖珍地圖にして附するに沿道の名勝案內を以てす、印刷明瞭にして誤謬尠く近來の好地圖なり、我國製圖業の進歩大に見るべし、躰裁は例に依て澁つたものなり、只北海道東部のところにてオコツク海のオツコク海になれるが如き目障はりなり再販の時の修正を望む（五十錢）

●怪傑星亭　仙洞隱士著　京橋區山下町　日東館發行

東新聞記者なりといふ仙洞隱士の編なり、記して著といふと雖も隱士が筆を執りたるは卷頭の數葉にして其他は悉く都下及び地方新聞の記事を糊と鋏とを以て排列したるに過ぎざれば寧ろ編とするを以て正しとす、然れども編纂の方法は甚だ宜しきを得て星及び伊庭の性行平生は勿論、是に對する全國新聞記者の所論をも極めて秩序よく排列したり、後の星及び伊庭を論ぜんとするもの若くは、二人者がいかに解せられたるかを知らんとするものゝためには好個の材料たるべし、たゞ其都下新聞の所論に對する隱士の批評に至つてはあらずもがなと思はれたり（三十錢）

●小百合集　吉野臥城著　京橋區釆女町　警醒社發行

吉野臥城といふ青年詩人の所作を蒐めたるもの也、形式に於ては別に時流を抜けりとも思はれざれど內容に至つては採るべきものなきにあら

ず、其貧者弱者に同情し[illegible]、偽愛國者を罵る處、[illegible]イズムの流を酌むが如く思はるれども調ダルネスにして此矯激の思想を歌ふに適せず寧ろ抒事的なるを以て疵少しとすべきか、さはれ氏は前途多望なる詩人也幸に精進して更に第二の詩集を公にするに至らんことを望む（十五錢）

●銀河　小島烏水作　内外出版協會發行

冬の富士、法師蟬、機台、日本人の風流と植物保護、測論家著者の美文を集めたるもの附するに成美子の繪を以てす行文流暢體裁優美好個の小品文集なり（定價金二十五錢）

●心券　東敬治著　文明堂發賣

著者は山田[illegible]斷に於ける儒林の名門に生れ現時我國に於ける王學の泰斗と稱せらる心券は著者が幼時よりの實驗談に精神の修養に關する經歷を服藏無く述べたるもの讀むものをして感奮せしむること尠からず（二十錢）

●出門一笑　浩々歌客著　大阪　文淵堂發行

難波の文士角田浩々歌客の筆になれる小品文數十篇を合册したるものなり、擬翠山莊、風頭語、賣花翁、涼宵、寒月、三千里、水の月、小西湖畔、老僕と我、天使、紅梅翁、野花、泉、靜夜、あさがほ、秋心、晴靄、隣の庭、ひたき鳥、筆輕快の筆、夏期の讀物とするに適せり（價金參拾錢）

彙　報

●刑事人類學萬國會議　第五回刑事人類學萬國會議は本月九日より十四日迄和蘭國アムステルダムに開會す宿題の重なるものは左の如し

一　犯罪人の解剖的及び生理的特徴
二　刑人心理學及び刑事精神病理學犯罪人と精神病者
三　刑事人類學及び其法醫學の應用
四　刑事社會學犯罪の經濟的原因
五　刑事人類學と刑事人種學

●板垣伯と消費組合　豫てより板垣伯の首唱に係る貧民消費組合は今回先づ芝新網町の貧民窟より始め漸次部下各貧民窟に及ぼす筈にて米穀、味噌、醬油、薪、炭等の日用消費品を殆ど原價同樣に賣捌き利潤あれば之を積立置きて貧民共用の質屋をも開かしむる資本の一となす計畫なり

●濠洲移民　濠洲クヰンスランド州行の移民は是迄毎航廿五名以内に限られしが今後毎航五十名以内は差許す旨此程外務省より各移民會社に訓令したり

●生命保險の狀況　昨年度に於ける本邦生命保險會社（內國、共濟、有隣、眞宗、仁壽、愛國、九州、護國、朝日、帝國、日本）十一會社の營業報告に依り保險契約高收入保險料死亡支拂保險金其他營業費等の統計を示せば左の如し

新契約高	三四、〇一三、五七一圓
死亡支拂保險金	一、三四〇、八二八
解約保險金	一八、八五四、一七七
年末保險金	一三三、九〇五、三二八
收入保險料	四、八一二、四六七
營業費	一、四一七、九九六

又昨年度同十一會社の利益配當金を揭ぐれば

內國 八 朱　共濟 六 朱　有隣 七 朱
眞宗 七 朱　仁壽 八 朱　愛國 八 朱
九州 四 朱　護國 無　朝日 無
帝國 一割二朱　日本 一割

而して各社に就き解約の多寡を調査するに最も多きは朝日、護國、九州にして有隣、仁壽、之に次ぎ又營業費割合の多きは朝日を第一位として有隣、護國、九州を以て第二位とす

●牛馬虐待取締の訓令　今度農商務大臣は各地方長官に對し左の如き訓令を發したり、

從來牛馬の飼育及使役の方法を見るに駕馭調教其當を失し往々苛酷に流れ疾病の有無を問はず妄に之を使用し或は體力の如何を察せず過度の使役に供し或は發育及資質を妨ぐべき取扱を爲し之が爲め動物本來の長性を損じ發育を害するもの尠しとせず今や牛馬の改良は漸次其歩を進めんとする時期に際し尚是等の弊習を存するは大に遺憾とする所なり依て各地方の實況に照し適宜取締方法を設け之が改善の實を擧げんことを期すべし

●慈善旅行　時事新聞社の第二回慈善旅行は男女合せて百十七人の貧兒におの〳〵四日間其費用は義捐金總計一千四十五圓餘の內五百七圓を費し監督を基督教徒に托し又佛教の福田會育兒院は院兒四十五名に保姆五名附添ひ櫻井青山學校長等が監督の下に去月三日より野州鹽原溫泉松屋別莊に三週間の入浴をなし兩者共好成結なりしと

●臺灣の學校　臺灣全島に於ける官公立學校及び其職員生徒最近の統計左の如し

學校名稱	校數	教員	生徒	卒業生
國語學校	一	二八	一六六	三六
同附屬學校	三	二七	七三六	五七
師範學校	三	二四	一九七	…
同附屬學校	一	二	九七	…
國語傳習所	二	四	一二一	一〇
同分教場	六	二	四二二	…
小學校	一一七	三五二	一四、五六六	八一
公學校	一〇	四四	九四六	三〇
合計	一四三	四〇三	一七、二三〇	二〇四

●高等教育會期日　いよ〳〵十月二十日頃開會せらるべきが特選議員の選定も本月中旬までには決定すべしと

●文部省留學生　今回の派遣留學生は凡そ三十名ほどにして本月中旬に發表せらるべし

●中學卒業生の漢學　中學卒業生の漢文素養の下落益甚し本年の高等學校入學試驗に實に左の如き奇答あり「兒童研究」に依る

イ、綱常
ロ、尸位素餐
ハ、折衝樽俎

の字音并に解釋を問ふ

此答案中最も甚しきもの二三を擧ぐれば

綱常に就ての答案

(一)綱常「ツナトキ」(人ノ名ナリ)
(二)綱常「コージョー」(測量スル綱ト尺金ノコトナリ)
(三)綱常(護衛兵ナリ)
(四)綱常「ガウジヤウ」(意地張リテ人ノイフコトヲキカヌコトナリ)
(五)綱常(アダチ)

折衝樽俎に就ての答案

一）樽所ニテサワグコトナリ。
二）樽ト俎チコワスコトナリ
三）宴會ナドノ席ニテ亂暴スルコトナリ。
四）折ノ衝樽レ俎　連衡（衡と誤）ヲ止メテ俎（楚と同じと考へたるか）ニ從ひ樽を遊と誤れるか）ノコトナリ

●佛教寺院の公認　米國カリホルニヤ政廳は七月十五日ブッヂスト、チヤアチ、オブ、サクラメントとして公認特許狀を下附し其傳道事業として土地家屋の所有權、學校、病院の建設、印刷出版等諸種の特許を與へたり

●同志社校長の辭職　同志社校長原田友信氏は今回突然辭表提出せられたり原田氏の後任は多分下村孝太郎氏なるべしと云ふ

●モルモン宗宣敎師の來朝　八月十二日横濱入港のエンプレス號にてクノンド氏外三人來着したり

●教友會　本願寺の小田尊順氏一派の組織せるもの其主義は

第一條　吾等同志は兩猊下の威德を顯揚し宗門の繁榮を圖るを以て主義とす

第二條　吾等同志は宗制寺法に基き教學を振起し財政の整理を以て目的とす

第三條　吾等同志は宗門の積弊を洗除し本山末寺の權義を保全するに努むべし

●佛教傳道協會　府下本願寺派末寺の有志者發企して今回佛教傳道協會と名くる團躰を組織し本部を築地別院内に置き大に布教傳道を謀る由にて去月八日其創立大會を築地本願寺に開き夫れより府下各所に演說會を催せり其目的は僧俗一致して佛教の本旨を宣布するにありて其事業は傳道事業及び社會事業の二種に分ち會員は名譽會員特別會員贊成會員の四種とし何人にも入會を許す

●保護建造物實測　曩に保護建造物として指定せられたる茨城縣鹿島神宮及び長野縣大寶寺三重塔安樂寺八角四重塔は此の程其筋の實測を遂げたり

●宗教取調　宗教局にては沖繩福岡鹿兒島三縣下に於ける寺院教會視察の爲め宿直課長を派遣す

●列國東洋艦隊の現狀　此程海軍省に於て調製せる列國東洋艦隊現在表によれば海軍力の比較左の如し

▲英國東洋艦隊　軍艦五十隻　驅逐艦七隻　水雷艇九隻　運送船一隻　合計十八萬五千八百九十二噸

▲米國東洋艦隊　軍艦三十八隻　合計十二萬四千四百五十九噸

▲露國東洋艦隊　軍艦二十七隻　驅逐艦五隻　水雷艇二十九隻　義勇艦隊十五隻合計十二萬六千六百九十七噸

▲佛國東洋艦隊　軍艦二十九隻　驅逐艦一隻　運送船四隻　水雷艇二隻　合計八萬八千五百三十九噸

▲獨國東洋艦隊　軍艦十九隻　驅逐艦一隻　水雷艇三隻　合計九萬八百九十七噸

▲伊國東洋艦隊　軍艦六隻　合計二萬五千百噸

▲蘭國東洋艦隊　軍艦三隻　合計一萬二千噸

▲葡國東洋艦隊　軍艦三隻　合計二千八百八十一噸

